大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

『万葉集』の舟・船

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 辻尾, 榮市 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004341

『万葉集』の舟・船

辻　尾　榮　市

1、

万葉集20巻約4500首、詠まれる地域は畿内に留まらず、東北、関東、北陸、山陰、九州に及び、その中には舟が登場する歌が多くある。それらの歌の中に登場する小型の刳舟であった「棚無し小舟」や構造を伴った大型の船である「四つの船」と呼ばれた遣唐使船、それ以外に想像される舟・船が考えられる。万葉集の性格上、海や河川に浮かぶ舟を見て詠まれた歌、舟に託して心情を訴えた歌など創造された舟・船が多く詠まれたことだろう。また実際に乗船した気持ちや舟の構造に触れた歌も詠まれている。詠まれた歌から舟の構造を知ることは難しいが、5世紀前半から奈良時代後期までの舟を知る手掛かりがある。直接、「舟・船」を詠んだ歌は多首あり、それ以外に港湾、漁村風景など漁民の姿や島陰を航行する舟、船舶や漁撈に関する情報が断片的ではあるが得られ、舟の解釈の一助になると考えられる。

今回は詠まれた歌から舟の型式を考察してみることにした。想像上の舟に関しても型式をあてはめた。また以下では「舟・船」表記のない歌に関しても明らかに舟を歌っている一部を含んでいる。

凡例として本文刊本については多く出版（文献一覧参照）されているが、以下では岩波書店刊行の「日本古典文学大系」のなかの『万葉集』（全4冊）を底本とし、表記法は特殊な漢字以外は常用漢字に改めている。なお（大意）解釈についての口語訳は舟の型式を理解する上での私見簡訳を付している。また註釈本・鑑賞解説本についても多く出版（文献一覧参照）されており、詳しい注釈本があるが取り敢えず簡訳の参考程度とし、註に付すことはせず、今後、舟構造・湊港湾・航行など一方的な解釈についての比較分析などが必要性であり、どのような解釈が適正分析であるのかは他日を期することにした。

〈万葉集〉

８・熟田津尓　船乗世武登　月待者　潮毛可奈比沼　今者許芸乞菜

（**大意**）「熟田津に船（準構造舟・船）に乗って出発しようと月を待つと、潮も都合良くなり、これから漕ぎ出そう」

（**註**）伊予熟田津石湯行宮に泊し、繫留する征新羅舟・船か。

30・楽浪之　思賀乃辛崎　雖幸有　大宮人之　船麻知兼津

（**大意**）「ささなみの志賀（滋賀里）の辛崎は変わることなくあるけれど、大宮人の舟（刳舟）は待っても来ることはない」

（**註**）辛崎に舟の出入りがあったことが知られる。

36・八隅知之　吾大王之　所聞食　天下尓　国者思毛　沢二雖有　山川之　清河内跡　御心乎　吉野乃国之　花散相　秋津乃野辺尓　宮柱　太敷座波　百磯城乃　大宮人者　船並弖　旦川渡舟競　夕河渡　此川乃　絶事奈久　此山乃　弥高思良珠　水激　滝之宮子波　見礼跡不飽可問

（**大意**）「わが大君の治められる天下に国は多くあるが、山や川の清い川沿いの河内であって、御心を吉野の国の花散らふ秋津の野辺に宮の柱を太く立てておいでになれば、大宮人は舟（刳舟）を並べて朝の川を渡り、舟（刳舟）を競って夕べの川を渡る。この川のように絶えることなく、この山のようにいよいよ高く世の中を治められ、激流となって流れる吉野の滝のほとりの宮処は見ても見ても飽きないことである」

（**註**）幽雅な舟遊びをする情景。『和漢船用集』に「舟競」として「季吟の曰、船ならへて朝夕舟くらへして遊ふさなり。舟競は舟の遅速をあらそふなり。異朝の競舟の類なり。楚俗不愛力費力為競渡と言語を注せり」とあり。また「競渡」として「荊楚記曰、五月五日屈原是日ヲ以テ、汨羅ニ於イテ死ス。人舟ヲ以テ之ヲ拯フ。今競渡其の遺俗なり。又曰ク、其ノ軽利ヲ取ッテ、之ヲ兆鳧ト謂フ」とある。

39・山川毛　因而奉流　神長柄　多芸津河内尓　船出為加母

（**大意**）「山も川もあい寄って奉仕する神としての大君は、急流の吉野川の深い淵に舟（刳舟）を乗り出され遊ばれる」

40・嗚呼見乃浦尓　船乗為良武　呎嬬等之　珠裳乃須十二　四宝三都良武香

（**大意**）「あみの浦で舟（刳舟）乗りをしているであろう乙女たちの美しい裳裾に潮が満ちて触れるころだろう」

42・潮左為二　五十等児乃嶋辺　榜船荷　妹乗良六鹿　荒嶋廻乎

（**大意**）「潮の騒ぐ中に伊良虞の島のほとりを漕ぐ舟（刳舟）に、荒い島のほとりを妹は乗っ

ているでしょうか」

50・八隅知之　吾大王　高照　日乃皇子　荒妙乃　藤原我宇倍尓　食国乎　売之賜牟登　都宮者　高所知武等　神長柄　所念奈戸二　天地毛　縁而有許曽　磐走　淡海乃国之　衣手能　田上山之　真木佐苦　桧乃嬬手乎　物乃布能　八十氏河尓　玉藻成　浮倍流礼　其乎取登　散和久御民毛家忘　身毛多奈不知　鴨自物　水尓浮居而　吾作　日之御門尓　不知国　依巨勢道従　我国者　常世尓成牟　図負留　神亀毛　新代登　泉乃河尓　持越流　真木乃都麻手乎　百不足　五十日太尓作　泝須良牟　伊蘇波久見者　神隨尓有之

（**大意**）「わが大君、日の御子が藤原の地に国を治められようと宮殿を高く営まれようと、神として思われるのとともに天の神地の神もそれにお仕えしているから、近江の国の田上山の檜の材木を宇治川に藻草の如くに浮かべて流せば、それを取ると騒ぐ人々らも家のことも忘れ自分のこともかまわず、鴨の如くに水に浮かんでいて、自分たちの作る大君の御殿にまだ治めてない国が従ってくるという巨勢路からわが国は永久に栄える国になろうという印しをつけた不思議な亀も新しい時代になるというので出てくる、泉川に持ち運んだ木の材木を筏（イカダ）に作って漕ぎ上ろうと勤めるのを見れば神のすることさながらのように見える」

（**註**）木津川を利用して木材を筏に組み運搬した。近江の田上山から伐りだし、宇治川から巨椋池に集積された。

58・何所尓可　船泊為良武　安礼乃崎　榜多味行之　棚無小舟

（**大意**）「どこに船泊まりするのであろう。安礼の崎を漕ぎ巡って行った棚なし小舟（刳舟）は」

（**註**）「棚無小舟」とは刳舟と考えられる。タナすなわち舷側板を付加していない一材刳舟であろう。『和漢船用集』に「万葉注に、童蒙抄に云、たなとはうらうへのふなはたに打たる板を云、舷と書り。それもなき小舟也と見へたり。八重垣に、舟はともにもへにもたなをかきて、その上にのほりてかちをとり、ろをおす也。ちいさき舟にはたななしといへり。是は船のわけもしらずおしすいに、棚の字義をもて注せるゆへ、誤る者也。しらさることををしすいに注するは、世に惑をおしゆる也。ともにもへにも棚をかくと云は、とも板、屋板と云て、棚とはいわす。軍書板子と書り。踏立板と云者也。万葉の注にて見るへし。凡棚なき舟、剣先舟一枚棚、三枚棚の類なり」とある。272「棚無小舟」、930、3956 にタナの記事が読める。

62・在根良　対馬乃渡　海中尓　幣取向而　早還許年
（**大意**）「対馬の渡り、航路（準構造舟）での海上に神へ幣を手向けて早く帰って来てください」

72・玉藻苅　奥敵波不榜　敷妙乃　枕辺之人　忘可祢津藻
（**大意**）「玉藻を刈る沖の方へは舟（刳舟）を漕ぐまい、昨夜宿った枕のあたりのことが忘れることができない」

79・天皇乃　御命畏美　柔備尓之　家乎択　隠国乃　泊瀬乃川尓　鰈浮而　吾行河乃　河隈之　八十阿不落　万段　顧為乍　玉桙乃　道行晩　青丹吉　楢乃京師乃　佐保川尓　伊去至而　我宿有　衣乃上従　朝月夜　清尓者　栲乃穂尓　夜之霜落　磐床等　川之水凝　冷夜乎　息言無久　通乍　作家尓　千代二手　来座多公与　吾毛通武
（**大意**）「大君のお言葉をつつしみ承り、慣れ親しんだ家を後に残し、初瀬川に舟（刳舟）を浮かべて漕いで行く川に、川の曲がり角ごとに幾度も幾度も後を振り返りながら、この道を行き日が暮れ、奈良の都の佐保川に到着して、私の寝た着物の上から朝の月影にはっきり眺めると、綿のごとくに夜の霜が降り、岩の床のように川の氷が固まっていおり、そのような寒い夜を休むことなく通い通って作った御殿に後々までも来てください大君よ、私も通います」
（**註**）「鰈」とは、小舟と解釈している。

122・大船之　泊流登麻里能　絶多日二　物念痩奴　人能児故尓
（**大意**）「大船（準構造舟）の碇泊する港で水の揺れが定まらないように、この乙女のために躊躇いながら物思いにやせてしまった」

135・角障経　石見之海乃　言佐敵久　辛乃崎有　伊久里尓曽　深海松生流　荒磯尓曽　玉藻者生流　玉藻成　靡寝之児乎　深海松乃　深目手思騰　左宿夜者　幾毛不有　延都多乃　別之来者　肝向　心乎痛　念乍　顧為騰　大舟之　渡乃山之　黄葉乃　散之乱尓　妹袖　清尓毛不見　嬬隠有　屋上乃　（一云室上山）　山乃　自雲間　渡相月乃　雖惜　隠比来者　天伝　入日刺奴礼　大夫跡念有吾毛　敷妙乃　衣袖者　通而沾奴
（**大意**）「石見の海の辛の崎にある暗礁には深海松が生え、荒磯に玉藻が生える。その玉藻のように寝た妻を心深く思うが、共に寝た夜はいくらもなく、別れてきたので心痛さにあれこれ思い振り返っても、（大船のように）渡りの山の黄葉が取り乱れており、妻の振

る袖もはっきりと見えず、山の雲間を渡って行く月のように惜しいが隠れて見えなくなってくるその時に入り日が射し、立派な男と思っても衣の袖は涙で濡れてしまった」

151・如是有乃　懐知勢姿　大御船　泊之登万里人　標結麻思乎
（**大意**）「こうなるであろうとあらかじめ分かっていたなら大君の大御船（準構造舟）の泊まった港に注連を張って引き留めたものであった」

152・八隅知之　吾期大王乃　大御船　待可将恋　四賀乃辛崎　（舎人吉年）
（**大意**）「わが大君の大御船（準構造舟）を志賀の辛崎は待ち慕っていることであろうか」

153・鯨魚取　淡海乃海乎　奥放而　榜来船　辺附而　榜来船　奥津加伊　痛勿波祢曽　辺津加伊　痛莫波祢曽　若草乃　嬬之　念鳥立
（**大意**）「淡海の海を沖に離れて漕いで来る船（刳舟）。岸に着いて漕いで来る船（刳舟）。沖の船（刳舟）は沖漕ぐ櫂を酷く撥ねないで、岸の船（刳舟）は岸漕ぐ櫂を酷く撥ねないでほしい。亡きわが君の愛されている鳥が飛び立つから」
（**註**）「鯨魚取」イサナトリは「海」にかかる枕詞である。すでに弥生時代後期には長崎県壱岐郡勝本町唐神遺跡出土大型鯨骨製銛頭。長崎県壱岐郡芦辺町原の辻遺跡出土鯨骨製銛頭があり、同じく壱岐島の郷ノ浦町の鬼屋久保遺跡の横穴式石室奥壁には線刻の鯨と舟が知られる。縄文時代前期の青森県山内丸山遺跡出土鯨肋骨製骨刀、縄文時代後期の福島県いわき市小名浜寺脇貝塚出土茎槽式銛頭がある。3893 に「伊佐魚取」がある。

167・天地之　初時　久堅之　天河原尓　八百萬　千萬神之　神集　々座而　神分　々之時尓　天照　日女之命　（一云指上日女之命）　天乎婆　所知食登　葦原乃　水穂之国乎　天地之　依相之極　所知行　神之命等　天雲之　八重掻別而　（一云天雲之八雲別而）　神下　座奉之　高照　日之皇子波　飛鳥之　浄之宮尓　神隨　太布座而　天皇之　敷座国等　天原　石門乎開　神上　々座奴　（一云神登座尓之可婆）　吾王　皇子之命乃　天下　所知食世者　春花之　貴在等　望月乃　満波之計武跡　天下　（一云食国）　四方之人乃　大船之思憑而　天水　仰而待尓　御念食可　由縁母無　真弓乃岡尓　宮柱　太布座　御在香乎　高知座而　明言尓　御言不御問　日月之　数多成塗　其故　皇子之宮人　行方不知毛　（一云刺竹之皇子宮人帰辺不知尓為）
（**大意**）「天地の始めの時、天の河原に多くの神々が集まって、天地の支配を分けた時に天照日女の神には天を治めよと定め、地である瑞穂の国を天地のあらん限り治められる神

として天の雲の重なっているのを掻き分けて下された日並皇子は、飛鳥の浄御原の宮に神として都を立てておられたが、天皇のおられる国はこの国ではなく天上であるとして、天の原の岩戸を開いて天上に上がって行かれてしまった。そこで日並皇子が天下を治められたならば、春の花のように貴くあろうと、満月のように欠けたこともなかろうと四方の人々が（大船のように）信頼し渇仰して待っているのにどのようにお思いなされたことか、縁もない真弓の丘に宮柱を太く殯宮をお立てになって朝々のお言葉も仰せられず既に数日数月が経ってしまった。そのために日並皇子の宮に仕えていた人々は行くべき方も分からずにいる」

196・飛鳥　明日香乃河之　上瀬　石橋渡　（一云石浪）　下瀬　打橋渡　石橋　（一云石浪）　生靡留　玉藻毛叙　絶者生流　打橋　生乎烏礼流　川藻毛叙　干者波由流　何然毛　吾王能　立者　玉藻之母許呂　臥者　川藻之如久　靡相之　宜君之　朝宮乎　忘賜哉　夕宮乎　背賜哉　宇都会臣跡　念之時　春部者　花折挿頭　秋立者　黄葉挿頭　敷妙之　袖携　鏡成　雖見不猒　三五月之　益目頻染　所念之　君与時々　幸而　遊賜之　御食向　木瑞之宮乎　常宮跡　定賜　味沢相　目辞毛絶奴　然有鴨　（一云所已乎之毛）　綾尓憐　宿兄鳥之　片恋嬬　（一云為乍）　朝鳥　（一云朝霧）　往来為君之　夏草乃　念之萎而　夕星之　彼往此去　大船　猶預不定見者　遣悶流　情毛不在　其故　為便知之也　音耳母　名耳毛不絶　天地之　弥遠長久　思将往　御名尓懸世流　明日香香河　及万代　早布屋師　吾王乃　形見河此焉

（**大意**）「明日香河上流の瀬には石橋を渡し、下流の瀬には打橋を渡し、その石橋に伸びている玉藻も切っても新しく伸び、打橋に伸び繁る川藻も枯れても新しい芽を出す。だが皇女は立たれると玉藻のように臥されると川藻のようになびき合い、君の朝宮を忘れられたのだろうか、夕宮を離れられたのか、この世の人であった時、春には花を折りかざし、秋には黄葉をかざし、睦まじく袖を連ね、見ても見飽きることがなく満月のようにより愛おしく思い、君とお出ましになって遊ばれた城上の宮を永久の宮と定められて、お逢いになることも言葉を交わされることもなく、何とも言えず悲しく思い片恋いの君、朝鳥のように通われる君が悲しみに萎れ、夕星のようにそこに行き来して（大船のように）ためらい心休まらない様子を見ると自分の心をどのように慰めていいのか分からず、どうするすべも知らないがせめてその音だけ名だけでも絶えず、天地のように久しく偲んでいきたいと思い、この明日香川を万代までもここが追慕として形見の所である」

207・天飛也　軽路者　吾妹児之　里尓思有者　懃　欲見騰　不已行者　人目乎多見　真

根久往者　人応知見　狭根葛　後毛将相等　大船之　思憑而　玉蜻　磐垣淵之　隠耳　恋管在尓　度日乃　晩去之如　照月乃　雲隠如　奥津藻之　名延之妹者　黄葉乃　過伊去等　玉梓之　使之言者　梓弓　聲尓聞而　（一云聲耳聞而）　将言為便　世武為便不知尓　聲耳乎　聞而有不得者　吾恋　千重之一隔毛　遣悶流　情毛有八等　吾妹子之　不止出見之　軽市尓　吾立聞者　玉手次　畝火乃山尓　喧鳥之　音母不所聞　玉桙　道行人毛　独谷　似之不去者　為便乎無見　妹之名喚而　袖曽振鶴　（或本有謂之名耳聞而有不得者句）

（**大意**）「軽の路はわが妹子の里であるからしみじみ見たいがいつ行っても人目が多く目に付き、行けば人目に知られ五月蠅く、後にでも逢おうと（大船の頼みにして）心の中で恋しく思いつづけていたが暮れていく夕日のように雲に入る月のように愛しい妹は亡くなってしまったと使いの者が来ていうので、それを聞いて何と応えていいものか、どのようにしていいのかさえ分からず、知らせだけを聞いてはおれないのでこの恋いの千にひとつでも慰められるのか、妹子がよく出て見た軽の市に佇んで耳を澄ませても畝傍の山に鳴く鳥の声も聞こえず、道行く人に似た人は通らず何とも仕方なく妹の名を呼んで袖を振ったことである」

220・玉藻吉　讃岐国者　国柄加　雖見不飽　神柄加　幾許貴寸　天地　日月与共　満将行　神乃御面跡　次来　中乃水門従　船浮而　吾榜来者　時風　雲居尓吹尓　奥見者　跡位浪立　辺見者　白浪散動　鯨魚取　海乎恐　行船乃　梶引折而　彼此之　嶋者雖多　名細之　狭岑之嶋乃　荒磯面尓　廬作而見者　浪音乃　茂浜辺乎　敷妙乃　枕尓為而　荒床　自伏君之　家知者　往而毛将告　妻知者　来毛問益乎　玉桙之　道太尓不知　欝悒久　待加恋良武　愛伎妻等者

（**大意**）「讃岐の国は、国の成り立ちのためか見ても見てもおもしろい。神の成り立ちのためか甚だ貴く、天地と共に日月と共に永遠に満ち足り行く神のみ面として続いてきた所の中津の港から船（準構造舟）を浮かべて、私たちが漕いでくれば、時つ風が雲のいる空に吹くのに、沖を見ればしき波が立ち岸を見れば白波が騒いでいる。海が恐ろしいので進む船（準構造舟）の梶を引きたわめるまで漕いで行き遠く近くに島は多くあるけれど名の好い狭嶺の島の荒い石浜の上に庵を作ってさてあたりを見れば、波の音のしきりにしている浜辺を枕にして荒い床に伏している人がいて、その君の家が分かるなら家に行って告げもしようと、妻がこのことを知ったなら来て尋ねもしようものを、君が愛しい妻たちはその尋ね来るべき道も分からずおぼつかなく待ち恋しがることであろうか」

（**註**）「鯨魚取」枕詞。153 に「鯨魚取」、3335「不知魚取」、3893 に「伊佐魚取」がある。

246・葦北乃　野坂乃浦従　船出為而　水嶋尓将去　浪立莫勤

（**大意**）「葦北の野坂の浦から船（刳舟）に乗り出して水島に行こう。決して波よ立たないでほしい」

（**註**）「野坂乃浦」を熊本県葦北郡佐敷とし、あるいは田浦の説がある。

247・奥浪　辺波雖立　和我世故我　三船乃登麻里　瀾立目八方

（**大意**）「沖の波が立ちまた岸の波が立とうとも君の船（準構造舟）の碇泊すべき港は平穏で波は立たないでしょう」

249・三津崎　浪矣恐　隠江乃　舟公宣奴嶋尓

（**大意**）「難波の御津の崎（舟着場）は波が恐ろしいので入り江の湊の舟（刳舟）にいる人は野島に行こうとしているのであろうか」

250・珠藻苅　敏馬乎過　夏草之　野嶋之崎尓　舟近著奴

（**大意**）「玉藻をかる敏馬を通りすぎて野崎の崎に舟（準構造舟）が近づいた」

（**註**）兵庫県津名郡北淡町野島は淡路島の北端の岬。

254・留火之　明大門尓　入日哉　榜将別　家當不見

（**大意**）「わが舟（準構造舟）が明石の大きな海峡に入ろうとする夕日に故郷の方も見ず漕ぎ別れて行くことであろう」

256・飼飯海乃　庭好有之　苅薦乃　乱出所見　海人釣船

（**大意**）「飼飯の海の海面がよく凪いでいるらしく海人の釣り船（刳舟）の乱れ出ているのが見える」

（**註**）「釣船」294・1740 あり。

257・天降付　天之芳来山　霞立　春尓至婆　松風尓　池浪立而　桜花　木乃晩茂尓　奥辺波　鴨妻喚　辺津方尓　味村左和伎　百磯城之　大宮人乃　退出而　遊船尓波　梶棹毛　無而不楽毛　己具人奈四二

（**大意**）「天から降ったという天の香具山は霞の立つ春になれば松を吹く風に池の波が立ち、桜の花は木々の中に沢山咲き、池の沖には鴨が妻を呼び岸には味鴨の群れが騒ぎ、大宮人たちが宮中を下がって遊ぶ船（刳舟）には梶も棹も無くなっており、漕ぐ人がいない

ので寂しいことである」

258・人不榜　有雲知之　潜為　鴛与高部共　船上住

（**大意**）「人が漕がず捨ててあるようすが目について、鴛鴦とたかべとが船（刳舟）の上に止まっている」

260・天降就　神乃香山　打靡　春去来者　桜花　木暗茂　松風丹　池浪飈　辺都遍者　阿遅村動　奥辺者　鴨妻喚　百式乃　大宮人乃　去出　榜来舟者　竿梶母　無而佐夫之毛　榜与雖思

（**大意**）「天から降ったという天の香具山は長閑な春になると木陰に桜が咲き、松風に池波が立ち渚にはアジが群がり、沖には鴨が妻を呼ぶ、その昔、大宮人がここに来て漕いだ舟（刳舟）には漕ぎたいけれど竿も梶もなく寂しいことである」

270・客為而　物恋敷尓　山下　赤乃曽保船　奥榜所見

（**大意**）「旅にあって物恋しいのに山の下に見える赤く（赭土）塗った船（準構造舟）が沖へと漕いで行くのが見える」

（**註**）「赤乃曽保船」赤塗りの舟・船は官舟・船とするようだが、魔除けと考えられるかもしれない。1780「狭丹塗之小船」、2089「其穂船」、3868「赤羅小舟」など。

272・四極山　打越見者　笠縫之　嶋榜隠　棚無小船

（**大意**）「四極山を越えて見渡すと笠縫の島を漕ぎかくれて行く棚無し小船（棚無刳舟）が見える」

（**註**）「棚無小船」とは刳舟と考えられる。タナすなわち舷側板を付加していない一材刳舟であろう。「和名抄」に「枻、大船旁板也、不奈太奈」とあり、舷縁の板をいう。58「棚無小舟」、930、3956 にタナの記事が読める。

273・磯前　榜手廻行者　近江海　八十之湊尓　鵠佐波二鳴

（**大意**）「磯崎を舟（刳舟）で漕ぎめぐって行くと近江の海の多くの湊に鶴が沢山に鳴いている」

274・吾船者　枚乃湖尓　榜将泊　奥部莫避　左夜深去来

（**大意**）「私たちの船（刳舟）は比良の湊に漕ぎ入り泊まろう。沖へは離れるな夜は更け

てしまった」

（**註**）1229「狭夜深」、3348「佐欲布気」参照。

283・墨吉乃　得名津尓立而　見渡者　六児乃泊従　出流船人

（**大意**）「住吉の榎津に立って見渡すと武庫の湊を出て来る船（準構造舟）人が見渡される」

292・久方乃　天之探女之　石船乃　泊師高津者　浅尓家留香裳

（**大意**）「天の探女が天から乗ってきた石船（天磐船）が碇泊した高津は浅くなったことである」

（**註**）『摂津国風土記逸文』には「難波高津は天稚彦天降りし時、天稚彦に属て下れる神天の探女、磐舟に乗りてここに至る、天磐舟の泊る故を以て高津と号す」とある。4254「磐船」あり。

294・風乎疾　奥津白波　高有之　海人釣船　浜眷奴

（**大意**）「風が強いので沖の白波が高いのだろう。海人たちの釣り船（刳舟）が浜に帰ってきた」

（**註**）「釣船」256・1740 あり。

323・百式紀乃　大宮人之　飽田津尓　船乗将為　年之不知久

（**大意**）「大宮人たちが飽田津に船（刳舟）遊びした昔はいつ頃のことかわからない」

（**註**）3202 柔田津、熟田津は三津浜、「御津」の意。

351・世間乎　何物尓将譬　旦開　榜去師船之　跡無如

（**大意**）「世の中を何にたとえよう。朝、湊を出て漕ぎ去った船（刳舟）が何の跡も残らないようなものである」

357・縄浦従　背向尓所見　奥嶋　榜廻舟者　釣為良下

（**大意**）「縄の浦から背後に見える沖の島を漕ぎめぐる舟（刳舟）は釣りをするのだろう」

358・武庫浦乎　榜転小舟　粟島矣　背尓見乍　乏小舟

（**大意**）「武庫の浦を漕ぎめぐっている小舟（刳舟）、粟島を後に見て漕ぎ廻る羨ましい小舟（刳舟）よ」

366・越海之　角鹿乃浜従　大舟尓　真梶貫下　勇魚取　海路尓出而　阿倍寸管　我榜行者　大夫乃　手結我浦尓　海未通女　塩焼炎　草枕　客之有者　独為而　見知師無美　綿津海乃　手二巻四而有　珠手次　懸而之努櫂　日本嶋根乎

（**大意**）「越の海の角鹿の浜から大舟（準構造船）に対の櫓を揃えて海路に漕ぎ出して、息を切らしながら漕いで行くと田結の浦に海の乙女どもの塩を焼く煙が見えるが、そのもののあわれさも旅のことで自分一人では見るかいもないので大和のことを思って恋い忍んだことである」

（**註**）「真梶貫」とは舷側板左右から櫓櫂が出して漕ぐ状態になっている。「勇魚取」枕詞。931 にもあり。

368・大船二　真梶繁貫　大王之　御命恐　礒廻為鴨

（**大意**）「大船（準構造船）に左右の櫓を揃えて、大君の命令をかしこまり、海岸を巡って行くことである」

（**註**）「真梶繁貫」は櫓櫂が複数あるのだろう。366 同じ。

388・海若者　霊寸物香　淡路嶋　中尓立置而　白浪乎　伊与尓廻之　座待月　開乃門従者　暮去者　塩乎令満　明去者　塩乎令干　塩左為能　浪乎恐美　淡路嶋　礒隠居而　何時鴨　此夜乃将明跡　侍従尓　寝乃不勝宿者　瀧上乃　浅野之雉　開去歳　立動良之　率児等　安倍而榜出牟　尓波母之頭気師

（**大意**）「海神は不思議なものであり、淡路島を中に置いて白波を伊予の方まで廻らし、明石の海峡からは夕方になれば潮を満ちさせ、朝になれば潮を干さす。その潮の満干の波の騒ぎが恐ろしいので淡路島の磯に舟（準構造舟）を寄せ隠れていて、いつになったらこの夜が明けるであろうかと潮待ちをしていると、寝ることもできなかったのに急流のほとりの浅野の雉子がもう夜が明けたと立ち騒ぐ様子であり、さあ船子どもよ、力を入れて漕ぎ出そう、海上は静である」

389・嶋伝　敏馬乃崎乎　許芸廻者　日本恋久　鶴左波尓鳴

（**大意**）「島伝いに敏馬の崎を舟（準構造舟）が漕ぎ廻って行くと大和のことが恋しく思われ、鶴がたくさん鳴くのが聞こえ、心を掻き立てる」

391・鳥総立　足柄山尓　船木伐　樹尓伐帰都　安多良船材乎

（**大意**）「鳥総を立て足柄山で船材となるべき木を但の材木として伐って行ってしまい船木であるのに惜しいことである」

（**註**）「鳥総」とは、山の神に対して茂った梢を切り落とし樹木の幹に立てておく風習のあったことを示しており、樹木を伐採する時の儀礼であり、舟・船材を得るための祭祀をしめしている。950に詠まれている「山守」のように山の番人を置いて造舟・船用材などの管理を行なわせ、樹木の伐採が個人的な行為では行えないことを示している。船舶造舟・船に関わる問題として特異な点である。4026にも舟・船材あり。

509・臣女乃　匣尓乗有　鏡成　見津乃浜辺尓　狭丹頬相　紐解不離　吾妹児尓　恋乍居者　明晩乃　旦霧隠　鳴多頭乃　哭耳之所哭　吾恋流　干重乃一隔母　名草漏　情毛有哉跡　家當　吾立見者　青旗乃　葛木山尓　多奈引流　白雲隠　天佐我留　夷乃国辺尓　直向　淡路乎過　粟嶋乎　背尓見管　朝名寸二　水手之音喚　暮名寸二　梶之聲為乍　浪上乎　五十行左具久美　磐間乎　射往廻　稲日都麻　浦箕乎過而　鳥自物　魚津左比去者　家乃嶋　荒磯之宇倍尓　打靡　四時二生有　莫告我　奈騰可聞妹尓　不告来二計謀

（**大意**）「女の櫛笥の上に乗っている鏡のように見える三津の浜に美しい紐をとき妹と共に寝ることもなく、わが妹子に恋い焦がれていると、朝の薄闇の霧の中に籠もって鳴く鶴のようにただ泣かれる。そこで自分の恋しく思う心の千のひとつも慰められる心持ちにもなるかと家のあたりを立って見ると、葛城山にたなびいている白雲に隠れており、さて船（準構造船）出して遠い田舎に真っ直ぐの淡路を通り過ぎ粟島を後ろに見ながら、朝の凪ぎには水夫が声高く呼び、夕凪には梶の音がしながら波の上を行き遠ざかり岩の間を巡り、印南野の浦を過ぎて島の如くに水の上を行くと家の島の荒磯の上に靡いて茂っているなのりそがあるが、そのなのりその名のようにどうして恋しい妹に物も言わず別れてきたのだろう」

550・大船之　念憑師　君之去者　吾者将恋名　直相左右二

（**大意**）「（大船のように）心に頼りにしていた君が立ち去られるならば、また逢うまで恋しく思っていることだろう」

556・筑紫船　未毛不来者　予　荒振公乎　見之悲左

（**大意**）「筑紫の船（刳舟）がまだ来ないので疎遠になっている君に会うことが今から悲しく思います」

（**註**）「筑紫船」は筑紫の湊を往来する刳舟であろう。1143「松浦船」、3173「松浦舟」あり。

557・大船乎　榜乃進尓　磐尓触　覆者覆　妹尓因而者
（**大意**）「大船（刳舟）を漕ぎに漕いで岩に衝突し、転覆するなら転覆してもいい、妹のためならば」

619・押照　難波乃菅之　根毛許呂尓　君之聞四手　年深　長四云者　真十鏡　磨師情乎　縦手師　其日之極　浪之共　靡珠藻乃　云々　意者不持　大船乃　憑有時丹　千磐破　神哉将離　空蟬乃　人歟禁良武　通為　君毛不来座　玉梓之　使母不所見　成奴礼婆　痛毛為便無三　夜干玉乃　夜者須我良尓　赤羅引　日母至闇　雖嘆　知師乎無三　雖念　田付乎白二　幼婦常　言雲知久　手小童之　哭耳泣管　俳徊　君之使乎　待八兼手六
（**大意**）「自分の事を難波の菅の根の懇ろに君が聞かれて年長く言われるものなので研ぎ澄ましていた心を許したその日から、波に靡く玉藻のようにあれこれと二心は持たず専ら君を思い、（大船のように）安心して信頼している時、神が二人の間を離すのだろうか。世間が邪魔するのだろうか。今まで通われた君も来られず使いも見えなくなってしまったので大変やるかたなく、夜は夜中、昼は日の暮れるまで嘆くけれども甲斐もなく、物思いしても取り付き場はなく、弱い女といえばその通りであるが、まるでおぼこ娘のようにただ泣きに泣いてあちらこちら行き帰りながら君の使いを待っても待ちきれないでしょうか」

874・宇奈波良能　意吉由久布祢遠　可弊礼等加　比礼布良斯家武　麻都良佐欲比売
（**大意**）「海原の沖を遠く行く船（準構造船）を帰れと、領巾を振ったことであろうか、夫に戻れと言った松浦佐用姫」

875・由久布祢遠　布利等騰尾加祢　伊加婆加利　故保斯苦阿利家武　麻都良佐欲比売
（**大意**）「遠く去り行く船（準構造船）を領巾を振り引き留めようしても、停めることができず、どれほど恋しく思ったことか、松浦佐用姫は」

894・神代欲理　云伝久良久　虚見通　倭国者　皇神能　伊都久志吉国　言霊能　佐吉播布国等　加多利継　伊比都賀比計理　今世能　人母許等期等　目前尓　見在知在　人佐播尓　満弖播阿礼等母　高光　日御朝庭　神奈我良　愛能盛尓　天下　奏多麻比志　家子等　撰多麻比天　勅旨　（反云大命）　戴持弖　唐能　遠境尓　都加播佐礼　麻加利伊麻勢　宇奈原能　辺尓母奥尓母　神豆麻利　宇志播吉伊麻須　諸能　大御神等　船舳尓　（反云

布奈能閇尓）　道引麻遠志　天地能　大御神等　倭　大国霊　久堅能　阿麻能見虚喩　阿麻賀気利　見渡多麻比　事畢　還日者　又更　大御神等　船舳尓　御手打掛弖　墨縄遠播倍多留期等久　阿遅可遠志　智可能岬欲利　大伴　御津浜備尓　多太泊尔　美船播将泊　都々美無久　佐伎久伊麻志弖　速帰坐勢

（**大意**）「神代から言い伝えたことには大和の国は皇祖神の厳かなる国、言葉の魂の幸する国であると語り継ぎ言い継いだことであった。今の世の人々もそのことは目の前に見ておりまた聞いている。世間に人は多く満ちているが天皇の朝廷に置いて天皇が神々しくも愛される中で天下の政治のことを申し上げた者の子孫として選びなされて、天皇の命令を奉斎して唐国の遠き地に遣わされ出発して行かれれば海の岸にも沖にも留まりその海を支配しておられる諸々の大神たちが、船（準構造船）の舳先に立って導いてください。また天地の大神たち、分けても大和の大国魂神は空から天がけって見渡してください。使命を終えて帰る日には更にまたそれらの大神たちが舳先に手を掛けて船（準構造船）を引かれ、墨なわを挽き延べたように値嘉の入り江から大伴の御津の浜に真っ直ぐに船（準構造船）はきて港に着くであろう。恙なく無事に行かれて早く帰ってください」

（**註**）「智可能岬」値嘉の岬とは、長崎県北松浦郡に小値嘉島があり、五島列島平戸島を指し、長崎県南松浦郡三井楽町の福江島の三井楽湾（美弥良久）が遣唐使船発着地とする。

896・難波津尓　美船泊農等　吉許延許婆　紐解佐気弖　多知婆志利勢武

（**大意**）「難波津に君の船（準構造舟）が到着したと伝わってきたら衣の紐を弛めて躍り上がってよろこぶだろう」

904・世人之　貴慕　七種之　宝毛　我波何為　和我中能　産礼出有　白玉之　吾子古日者　明星之　開朝者　敷多倍乃　登許能辺佐良受　立礼杼毛　居礼杼毛　登母尓戯礼　夕星乃　由布弊尓奈礼婆　伊射祢余登　手乎多豆佐波里　父母毛　表者奈佐我利　三枝之中尓乎祢牟登　愛久　志我可多良倍婆　何時可毛　比等々奈理伊弖天　安志家口毛　与家久母見武登　大船乃　於毛比多能無尓　於毛波奴尓　横風乃　尓布敷可尓　覆来礼婆　世武須便乃　多杼伎乎之良尓　志路多倍乃　多須吉乎可気　麻蘇鏡　弖尓登利毛知弖　天神　阿布芸許比乃美　地祇　布之弖額拜　可加良受毛　可賀利毛　神乃末尓麻尓等　立阿射里　我例乞能米登　須臾毛　余家久波奈之尓　漸々　可多知都久保利　朝々　伊布許等夜美　霊剋　伊乃知多延奴礼　立乎杼利　足須里佐家婢　伏仰　武祢宇知奈気吉　手尓持流　安我古登婆之都　世間之道

（**大意**）「世間の人が貴びほしがる七種の宝も自分は何の役にたとう、ほしくはない。自

分の子、人間から生まれ出た白珠のような子の古日は、朝の明星に輝いて夜の明ける朝には、家のあたりで私が立っていても坐っていても共に戯れ、宵の明星の輝く夕方になれば、さあ寝なさいと手を取り合って父母も離れないで三人の中に寝ようと古日が言うから早く大人になって良いことも悪いことも見てやろうと（大船のように）心頼みにしているのに、思いがけず俄の風の吹きかぶさりくるように凶事がやってきて発病したので如何にしようか手立てもなく、白栲の襷をかけ鏡を手に持って仰いで天の神を請い祈り、伏して地の神を額ずき拝み、病になるのも成らぬも神の御心のまま故、その御心により病を免れたいと立ち騒ぎ私は請い祈るけれど少しも良く成らず、次第に顔立ちが衰え、朝々に話をすることも止まって命が絶えてしまったので躍り上がり、地団駄を踏んで叫び、或いは伏して或いは仰ぎ、胸を叩いて歎き、手に持っていた子を飛ばしてしまい、これも世の世界のあり方であろうか」

930・海未通女　棚無小舟　榜出良之　客乃屋取尓　梶音所聞

（**大意**）「漁師の乙女たちが棚無し小舟（刳舟）で漕ぎ出るのだろう。旅宿りしている所に梶（櫓）の音が聞こえる」

（**註**）「棚無小舟」とは、刳舟漁舟であろう。舷側板のタナとすれば一材を刳り抜いた舟であり、沖には出られない刳舟である。梶（楫）は舷側から水面を漕ぎ掻いて舟を進める道具であり、刳舟には櫓を引いて推進具とした。「和名抄」に「枻、大船旁板也、不奈太奈」とあり、舷縁の板をいう。58・272「棚無小舟」。

933・天地之　遠我如　日月之　長我如　臨照　難波乃宮尓　和期大王　国所知良之　御食都国　日之御調等　淡路乃　野嶋之海子乃　海底　奥津伊久利二　鰒珠　左盤尓潜出　船並而　仕奉之　貴見礼者

（**大意**）「天地の永遠なるがごとく、月日の長久なるがごとく、難波の宮にわが大君は国を治められるのであろう。御食物を差し上げる国の大君へのその日の貢ぎとして淡路の野島の海人が深い海の岩礁から鮑玉の真珠を多く、水に潜って取り出して船（刳舟）を並べて献上してくるその様子を見ていると貴いことである」

（**註**）「鰒珠」とは真珠のことである。特にアワビは主要な海産物の一つとして宮中で食用とされ御贄であった。珠は各種貝類から採取されており、古代では暗礁に潜り真珠を採りだしていたことが知られている。難波の海域でも刳舟を出し海士が素潜りして漁をしていたことが窺える。

934・朝名寸二　梶音所聞　三食津国　野嶋乃海子乃　船二四有良信
（**大意**）「朝凪の海に梶（櫓）の音が聞こえる。大君の食べ物を差し上げる野島の海人の船（刳舟）であるらしい」

935・名寸隅乃　船瀬従所見　淡路嶋　松帆乃浦尓　朝名芸尓　玉藻苅管　暮菜寸二　藻塩焼乍　海未通女　有跡者雖聞　見尓将去　余四能無者　大夫之　情者梨荷　手弱女乃念多和美手　俳徊　吾者衣恋流　船梶雄名三
（**大意**）「名寸隅の船泊まりから見える淡路島の松帆の浦に朝の凪ぎに玉藻を刈り、夕べの凪ぎに藻塩を焼きながら海人乙女がいるとは聞くけれど見に行く訳も口実もなく、船（刳舟）も梶（櫓）もないので、男らしい心持ちもなく、手弱女のごとく思い撓んで立ち彷徨い、自分は恋い思うことである」

936・玉藻苅　海未通女等　見尓将去　船梶毛欲得　浪高友
（**大意**）「玉藻を刈る海人の乙女たちを見に行く船（刳舟）と梶（櫓）とが、波は高くともほしいものである」

938・八隅知之　吾大君乃　神隨　高所知須　稲見野能　大海乃原笑　荒妙　藤井乃浦尓　鮪釣等　海人船散動　塩焼等　人曽左波尓有　浦乎吉美　宇倍毛釣者為　浜乎吉美　諾毛塩焼　蟻往来　御覧母知師　清白浜
（**大意**）「わが大君が神として高く知らしめす印南野の邑美の原の藤井の浦に鮪を釣ると海人の船（刳舟）が入り乱れ、塩を焼くという人が多く、浦が良いので本当に釣りをし、浜が良いので本当に塩を焼く、常にこのようにして行き来してご覧になることも晴れがましいこと、清い白浜である」
（**註**）「海人船散動」とは、サワキともミダレとも訓み、動く様であり、927 にも「散動」とあり、939 にも「動流」などとあり、刳舟の動きを描いている。1182・2347・4360 あり。

939・奥浪　辺波安美　射去為登　藤江乃浦尓　船曽動流
（**大意**）「沖の波、岸辺の波が静かなので、漁をするというので藤江の浦に船（刳舟）が入り乱れている」

942・味沢相　妹目不数見而　敷細乃　枕毛不巻　桜皮纏　作流舟二　真梶貫　吾榜来者　淡路乃　野嶋毛過　伊奈美嬬　辛荷乃嶋之　嶋際従　吾宅乎見者　青山乃　曽許十方不

見　白雲毛　千重尓成来沼　許伎多武流　浦乃尽　往隠　嶋乃崎々　隈毛不置　憶曽吾来　客乃気長弥

（**大意**）「妹に会うこともせず、妹の手枕もせず、桜皮を巻いて作った船（準構造船）に真梶（櫂）を揃えて漕いでくると、淡路の野島の崎も過ぎ印南野にある辛荷の島辺から家を振り替え見れば、青山の連なっているところにわが家があるとも見えなく、立ち隠す白雲も千重に隔てるまでになってきた。旅の日数が長いから漕ぎ巡る浦のことごとく行き隠れる島の崎々に一所も残さず物思いがしてくる」

（**註**）「桜皮纏作流舟」は桜皮の縫合舟と考えられるのか、アイヌのイタオマチプは縫合舟であり、時期を遡れば可能性はある。古墳時代前期の滋賀県守山市下長遺跡の遺構では、旧河道有機質層から準構造舟の部材片に桜樹皮で結合された船底部と舷側板の結合部片の例が見られ、樹皮楔止めという結合方法から造舟方法の手掛かりが知られる。『北越雪譜』には「シナ皮とて深山にある木（科木）の皮にて作る」と紹介がある。西村真次は「舳の処へ樺皮を巻いた舟だろうと一般には説明する。マキといふのは、しかし、私ははいだもの、接いだものであると思ふ。琉球でははぎ合はせ舟をハジブネと云ふ如く、カニハブネは恐らく樺の皮をはぎ合はせて造つた舟だろう」と論じる。

「真梶」について梶（楫）は舷側から水面を漕ぎ掻いて舟を進める道具であり、刳舟には櫓を引いて推進具とした。

944・嶋隠　吾榜来者　乏毳　倭辺上　真熊野之船

（**大意**）「島に隠れて漕いで来れば羨しくも見えることであるようであり、大和の方へ上がって行く熊野の船（諸手舟・刳舟）がある」

（**註**）舟・船に松浦、筑紫、足柄、伊豆などの地名を冠したものがある。「真熊野之船」はすでに『日本書紀』「神代下」には「熊野諸手船（亦の名は天鴿船）」とあり、黒板勝美編注には「諸手船は二挺櫓建の遊艇なり」とある。『和漢船用集』には「是、本邦の早舟の始也」とあり、また『伊豫国風土記逸文』には「野間郡熊野峰、熊野と名づけし由は、昔時、熊野と云ふ船を此に設く、今に至るまで石と成りて在り、因れ熊野の本と謂ふなり」とある。1033「熊野之小船」、3172「熊野舟」あり。

998・如眉　雲居尓所見　阿波乃山　懸而榜舟　泊不知毛

（**大意**）「眉のように雲居の遥かに見える阿波の山を目指して漕いで行く舟（準構造舟）の碇泊まりの地はどこであるかは分からない」

1003・海嫐嬬　玉求良之　奥浪　恐海尓　船出為利所見

（**大意**）「海人の乙女たちが真珠を探しているのだろう。沖の波の恐ろしい海に船（刳舟）出し漕いでいるのが見える」

（**註**）『日本書紀』巻13允恭天皇十四年秋九月癸丑朔甲子条に「赤石の海の底に真珠有り…実に真珠、腹の中に有り、其の大きさ桃子の如し」とあって、島の神を祀る御供物として得たことが記される。

1020・1021・王　命恐見　刺並　土左国尓　出座耶　吾背乃公矣　繫巻裳　湯々石恐石住吉乃　荒人神　船舳尓　牛吐賜　付賜将　嶋之崎前　依賜将　磯乃崎前　荒浪　風尓不令遇　莫管見　身疾不有　急令変賜根　本国部尓

（**大意**）「大君の命令を謹んで、土佐の国に出て行かれる君を言葉に言うことも恐れ多いことであるが、住吉の現人神が船（準構造船）の舳先に鎮座されて、着く島の崎々、寄る磯の崎々で荒い波や風にも遇わせず、病にも罹らず、早々に故郷の国に帰してほしい」

1023・大崎乃　神之小浜者　雖小　百船純毛　過跡云莫国

（**大意**）「大崎の神の小浜は狭いけれど多くの船人もここを通り過ぎ去って行こうとは言わない」

1033・御食国　志麻乃海部有之　真熊野之　小船尓乗而　奥部榜所見

（**大意**）「大君の御食を差し上げる国の志摩の海人たちであろうか、真熊野の小船（諸手舟）に乗って沖の方に漕いでいるのが見える」

（**註**）「熊野舟」を特殊な舟とみるか、地名によるか、いずれにしても諸手舟。『和漢船用集』は「紀州名所を呼。万葉注に季吟曰、みくまの丶舟とは、熊野山の木にて造りし舟也。此山の木にて造りし舟は風波難なし、と旧記に有とそ。師説に伝りしといへり。新宮より船板多く出せり。又、川舟に有。」とある。944「真熊野之船」とあり。3172「熊野舟」諸手舟と解する。

1062・安見知之　吾大王乃　在通　名庭乃宮者　不知魚取　海片就而　玉拾　浜辺乎近見　朝羽振　浪之聲躁　夕薙丹　櫂合之聲所聆　暁之　寝覚尓聞者　海石之　塩干乃共　汭渚尓波　千鳥妻呼　葭部尓波　鶴鳴動　視人乃　語丹為者　聞人之　視巻欲為　御食向味原宮者　雖見不飽香聞

（**大意**）「わが大君の常に通われる難波の宮は海の近くに寄っており、玉を拾う浜辺が近

いので朝吹き来る波の音が騒ぎ、夕凪には舟（刳舟）の櫂（櫓）音が聞こえる。明け方の寝覚めの床に聞くと海の磯の潮干とともに浦の渚には千鳥が妻を呼び、葦の生えた辺には鶴の声が鳴き騒ぎ、見る人はそれを語り草にすれば聞く人は見たいと思い、その味原の宮は見ても飽くことがない」

（**註**）「不知魚取」鯨魚取り、枕詞。153 に「鯨魚取」、220「鯨魚取」、3335「不知魚取」、3893 に「伊佐魚取」がある。

1063・有通　難波乃宮者　海近見　漁童女等之　乗船所見

（**大意**）「常に通う難波の宮は海が近いので海人の乙女たちが乗っている船（刳舟）が見える」

1065・八千桙之　神乃御世自　百船之　泊停跡　八嶋国　百船純乃　定而師　三犬女乃浦者　朝風尓　浦浪左和寸　夕浪尓　玉藻者来依　白沙　清浜部者　去還　雖見不飽　諾石社　見人毎尓　語嗣　偲家良思吉　百世歴而　所偲将往　清白浜

（**大意**）「八千鉾の神の御代から多くの船（準構造船）が碇泊する港として大八洲の国の多くの船人たちが定めた敏馬の浦は、朝風に浦の波が騒ぎ、夕波に玉藻が寄って来て白砂の清い浜辺は行きに帰りに見ても飽くことがなく、道理こそ見る人は皆語り継ぎ懐かしく思ったのであり、この清い白浜は、百代を経ても懐かしく思われてゆくであろう」

（**註**）「三犬女乃浦」は、神戸市灘区岩屋･大石付近の浜。難波津を出航して初めての湊。250、389、449、946、1066、1065、3627 に敏馬浦が登場する。『摂津風土記逸文』には「…吾が為に船に造れ、…此の神を斯の浦に祠ひ祭り、并せて船を留めて神に献りたまひ、亦、此の地を名づけて美奴賣と曰ひき」と見える。

1066・真十鏡　見宿女乃浦者　百船　過而可往　浜有七国

（**大意**）「敏馬の美しい浦は多くの船(準構造船)のただ通り過ぎて行くような浜ではない」

1067・浜清　浦愛見　神世自　千船湊　大和太乃浜

（**大意**）「浜は清く浦は麗しいので、神代の言から多くの船（準構造船）が泊まる大和田の浜である」

1068・天海丹　雲之波立　月船　星之林丹　榜隠所見

（**大意**）「空の海に雲の浪が立ち、月の舟（舟・船）が漕ぎ出て星の林に隠れるのが見える」

（**註**）月あるいは星を舟に見立てる 1295･2223 あり。

1135・氏河歯　与杼湍無之　阿自呂人　舟召音　越乞所聞
（**大意**）「宇治川には淀と瀬の区別がないと見え、網代をする人が舟（刳舟）を呼ぶ声があちこちで聞こえる」

1138・氏河乎　船令渡呼跡　雖喚　不所聞有之　楫音毛不為
（**大意**）「宇治川を渡し舟（刳舟）を渡せと繰り返し呼ぶけれど聞こえないらしく、迎えに来る楫（櫓）の音もしない」
（**註**）2072 に同じ。

1143・作夜深而　穿江水手鳴　松浦船　梶音高之　水尾早見鴨
（**大意**）「夜が更けて堀江を漕ぐ松浦の船（刳舟）の梶（櫓）の音が高いのは潮の流れが速いためだろうか」
（**註**）「松浦船」肥前国松浦で造舟・船、櫓音が高いという。3173 あり。

1144・悔毛　満奴流塩鹿　墨江之　岸乃浦廻従　行益物乎
（**大意**）「残念にも潮が満ちてしまったが、潮干ならば住吉の岸の浦（入り江）の方を通って（刳舟）を漕いだのに」

1152・梶之音曽　髣彿為鳴　海未通女　奥藻苅尓　舟出為等思母　（一云暮去者　梶之音為奈利）
（**大意**）「梶（櫓）の音がほんの少しするが海人の乙女が沖の海藻を刈りに舟（刳舟）出するのだろう」

1163・年魚市方　塩干家良思　知多乃浦尓　朝榜舟毛　奥尓依所見
（**大意**）「愛知潟の潮が干たらしい、知多の入り海を朝漕いでいる舟（刳舟）も沖の方に寄って行くのが見える」

1169・近江之海　湖者八十　何尓加　公之舟泊　草結兼
（**大意**）「近江の海は湊が多く、どこに君の舟（準構造舟）は航海を終えて草を結び泊っただろう」

1171・大御舟　竟而佐守布　高嶋之　三尾勝野之　奈伎左思所念
（**大意**）「大君の大御舟（準構造舟）が碇泊して風待ちをしており、高島の三尾にある勝野の渚が遥かに思われる」

1172・何処可　舟乗為家牟　高嶋之　香取乃浦従　己芸出来船
（**大意**）「高島の香取の浦から漕ぎ出す船（刳舟）は、どこで舟（刳舟）に乗ったのだろう」

1173・斐太人之　真木流云　尓布乃河　事者雖通　舡曽不通
（**大意**）「飛騨の人が真木を流すという丹生の川は言葉は聞こえるが舡（筏）しか通らない」
（**註**）「尓布乃河」は岐阜県大野郡丹生川村小八賀川に比定。『斐太風土記』には「乗鞍岳の数池水流出て、大丹生池に集り、池俣の山中青垂滝を真下、当村を過、澤上川と、湫川と落合、西流、郷中をへて、古は丹生川と称し由也。此川水甚寒冽なれば、古来年魚・鱒の、上りしことなしとぞ、吉城郡三川村に至て、宮川に入、三川は寒川の由也」とあり、宮川の項には「其両郷村々の通路に丸木刳舟又籠渡を用」とあり、また「益田川、白川、高原川は甚激流也。四川ともいづれも、舟筏横流しの外は用がたし」とある。宮川には舟橋「舟十七艘維」や「舟十三艘繋」の伝承がある。

1181・朝霞　不止軽引　龍田山　船出将為日　吾将恋香聞
（**大意**）「朝霧の常にたなびく龍田山を難波から船（準構造船）出する日には恋いしく思うことであろうか」

1182・海人小船　帆毳張流登　見左右荷　鞆之浦廻二　浪立有所見
（**大意**）「漁師の小舟（刳舟）が帆を張っているかと思うほどに鞆の浦のあたりには波の立っているのが見える」
（**註**）「小船帆毳張流」とあり、帆を張った刳舟が帆走していたことを窺わせる。

1185・朝菜寸二　真梶榜出而　見乍来之　三津乃松原　浪越似所見
（**大意**）「朝凪に（準構造船の）真梶を揃え漕ぎ出し目当てにしてきた難波三津の松原がすでに波の向こうに見える」

1189・大海尓　荒莫吹　四長鳥　居名之湖尓　舟泊左右手

（**大意**）「大海に嵐は吹かないでこのまま猪名の湊に舟（準構造舟）が到着するまでは」

1190・舟尽　可志振立而　廬利為　名子江乃浜辺　過不勝鳧
（**大意**）「舟（刳舟）を泊めて舫い杭を立てて宿りをしたいが、名子江の浜辺は素通りはできない」

1199・藻苅舟　奥榜来良之　妹之嶋　形見之浦尓　鶴翔所見
（**大意**）「藻を刈る舟（刳舟）が沖を漕いで来るようである。妹が島の形見の浦に鶴の飛ぶのが見える」
（**註**）「藻刈舟」1227 あり。

1200・吾舟者　従奥莫離　向舟　片待香光　従浦榜将会
（**大意**）「この舟（準構造船）は沖を通って離れて行かないで、迎えの舟（刳舟）を待ちながら浦の方を通って漕いで会いたいから」

1201・大海之　水底豊三　立浪之　将依思有　磯之清左
（**大意**）「大海の水底を逆巻き波が立ち寄せ、舟（刳舟）を寄りたいと思う浜が何とも清々しいことか」

1205・奥津梶　漸々志夫乎　欲見　吾為里乃　隠久惜毛
（**大意**）「沖を漕ぐ梶（櫓）が段々と渋くなってくる船（準構造船）、見ていたいと思う里は隠れていくのは惜しい」
（**註**）「漸々志夫乎」は船の動きが遅くなっていることを表現したものか。水手が疲れて漕げなくなっており、不安が募る。

1221・吾舟乃　梶者莫引　自山跡　恋来之心　未飽九二
（**大意**）「この舟（刳舟）の梶（櫓）を引かないで、大和から恋しく思ってきた心がまだ満足させられない」

1223・綿之底　奥己具舟乎　於辺将因　風毛吹額　波不立而
（**大意**）「海の沖を漕ぐ舟（刳舟）を岸に寄せる風が、波は立たずに風が吹かないだろうか」

1224・大葉山　霞蒙　狭夜深而　吾船将泊　停不知文

（**大意**）「大葉山に霞がたなびいて、夜が更け、船（準構造舟）の碇泊するにも湊が何処かわからない」

1225・狭夜深而　夜中乃方尓　欝之苦　呼之舟人　泊兼鴨

（**大意**）「夜が更けて夜中の潟に、何かはっきりしない声で呼んでいた舟人たちも、（準構造舟が）湊に入ったのだろうか静になった」

1227・磯立　奥辺乎見者　海藻苅舟　海人榜出良之　鴨翔所見

（**大意**）「磯に立って沖のあたりを見ていると、海藻を刈る舟（刳舟）を海人が漕ぎ出すのか、鴨の飛びだすのが見える」

（**註**）「藻刈舟」1199 あり。

1228・風早之　三穂乃浦廻乎　榜舟之　船人動　浪立良下

（**大意**）「風早の三穂の浦のあたりを漕ぐ舟（刳舟）の船人が騒いでおり、波が立つらしい」

1229・吾舟者　明旦石之湖尓　榜泊牟　奥方莫放　狭夜深去来

（**大意**）「私の舟は明石の河口に停泊しよう。夜が更けてしまったので沖の方には流れないでほしい」

1232・大海之　波者畏　然有十方　神乎斉祀而　船出為者如何

（**大意**）「大海の波は恐ろしい。だからこそ神を祈って船（準構造船）出したらどうだろうか」

1235・浪高之　奈何梶執　水鳥之　浮宿也応為　猶哉可榜

（**大意**）「波が高いのでどうしようか。梶（櫓）取りに、船（準構造舟）を停めて水鳥のように浮き寝をしようか。もっと漕ごうか」

1245・四可能白水郎乃　釣船之絆　不堪　情念而　出而来家里

（**大意**）「志賀の海人が釣り船（刳舟）の引き綱が丈夫でも荒波に堪えられないように、堪え難く人を思って、いたたまれずつい来てしまった」

1254・大船尓　梶之母有奈牟　君無尓　潜為八方　波雖不起
（**大意**）「大船（準構造舟）に梶（櫓）があればいいのです。それであれば、君なしで海が凪ぎいても水に潜ることはないでしょう」

1266・大舟乎　荒海尓榜出　八船多気　吾見之児等之　目見者知之母
（**大意**）「大舟（刳舟）を荒い海に漕ぎ出し、多くの船（準構造船）が漕ぎ進んで行くが、乙女たちのまなざしははっきりと思い出されます」

1295・春日在　三笠乃山二　月船出　遊士之　飲酒坏尓　陰尓所見管
（**大意**）「春日の三笠山に月の舟がでる。才子らの飲む杯にその影が映っている」
（**註**）月あるいは星を舟に見立てる 1068･2223 あり。

1299・安治村　十依海　船浮　白玉採　人所知勿
（**大意**）「騒がしいあじ鴨の群れが弓なりになって寄る海に船（刳舟）を浮かべて、真珠を採ることを人にしられないように」

1307・従此川　船可行　雖在　渡瀬別　守人有
（**大意**）「この川を通って船（刳舟）は行けると言うようであるが、どの渡しの瀬にも番人がいる」

1308・大海　候水門　事有　従何方君　吾率凌
（**大意**）「航海のために風待ちをしている船（準構造舟）が大海の湊で何かがあったら、私を連れてどこを通って逃げるのだろう」

1386・大船尓　真梶繁貫　水手出去之　奥者将深　潮者干去友
（**大意**）「大船（準構造舟）に両舷の梶（櫓）を揃えて漕ぎ出した沖は、潮が引いたと言っても深いのだろう」

1398・神楽聲浪乃　四賀津之浦能　船乗尓　乗西意　常不所忘
（**大意**）「さざ波の志賀津の浦での船に乗るように、心にのりかかり忘れられない子である」

1399・百伝　八十之嶋廻乎　榜船尓　乗尓志情　忘不得裳

（**大意**）「八十近くの多い島巡りを漕ぐ船（刳舟）に乗るように、心にのりかかり忘れられない子である」

1400・嶋伝　足速乃小舟　風守　年者也経南　相常歯無二

（**大意**）「島伝いに行く速力が早い小舟（刳舟）のように、風の様子を見守っているうちに逢いもしないのに年は過ぎる」

（**註**）「足速乃小舟」がどのような型の刳舟と考えられるのか、カヌーのように少人数が櫂によって漕ぐ舟型と見られる。あるいは「足軽山」と関係があるか。3367「足柄小舟」。

1401・水霧相　奥津小嶋尓　風乎疾見　船縁金都　心者念杼

（**大意**）「水しぶきが立つ沖の小島に、心に思っているのだが、風が強いので船（刳舟）を寄せることができない」

1417・名児乃海乎　朝榜来者　海中尓　鹿子曽鳴成　可怜其水手

（**大意**）「名児の海を朝、舟（刳舟）を漕いで来ると、海の中で鹿が鳴いているようで、水夫が思い出されることである」

1453・玉手次　不懸時無　気緒尓　吾念公者　虚蟬之　世人有者　大王之　命恐　夕去者　鶴之妻喚　難波方　三津崎従　大舶尓　二梶繁貫　白浪乃　高荒海乎　嶋伝　伊別往者　留有　吾者幣引　斎乍　公乎者将往　早還万世

（**大意**）「心にかけぬ時はなく命の綱にかけて恋い思う君は大君の仰せのままに、夕になれば鶴が妻を呼び、難波潟の三津の崎から大船（準構造船）の両舷に梶（櫓）を揃えて、白波の高い荒海を島伝いに唐国に行かれたならば、後にいて幣を手に取り神を奉り、身を清めてお送り、早く帰ってきてください」

（**註**）「難波方三津崎」をどこに求めるか。難波潟を広域に解釈して入江湊地を難波（堀江）津、住吉津、務古津を三津とするか。4245あり。

1455・玉切　命向　恋従者　公之三船乃　梶柄母我

（**大意**）「命にかけて恋い焦がれるより、君の乗る御船（準構造船）の梶（櫓）の柄となり一緒にでもなりたい」

1519・久方之　漢尓　船泛而　今夜可君之　我許来益武

（**大意**）「天の川の川瀬に船（刳舟）を浮かべて、今夜は君はここまでおいでになるでしょう」

1520・牽牛者　織女等　天地之　別時由　伊奈宇之呂　河向立　思空　不安久尓　嘆空　不安久尓　青浪尓　望者多要奴　白雲尓　滯者尽奴　如是耳也　伊伎都枳乎良牟　如是耳也　恋都追安良牟　佐丹塗之　小船毛賀茂　玉纏之　真可伊毛我母　（一云小棹毛何毛）　朝奈芸尓　伊可伎渡　夕塩尓　（一云夕倍尓毛）　伊許芸渡　久方之　天河原尓　天飛也　領巾可多思吉　真玉手乃　玉手指更　余宿毛　寝而師可聞　（一云伊毛左祢而師加）　秋尓　安良受登母　（一云秋不待登毛）

（**大意**）「彦星は織姫と天地のそのはじめから天の川を中にへだてて、思うことも思うかいなく、青波に川を渡れず、白雲の間に隔たれ悲しみの涙はつき、いつも苦しむことか、こうして恋い焦がれることか。赤塗りの小船（刳舟）がほしいものである。両舷に玉を巻き付けた梶（櫂）もほしいものである。朝凪ぎに漕ぎ渡り、夕の潮に漕ぎ渡り、天の川の河原に空を飛ぶ領巾を敷いて、美しい手を差し交わし心行くまで寝たいものである。秋でなくても」

（**註**）「佐丹塗」、赤塗りの舟・船は官舟・船とするようだが、「赤羅小舟」、270「赤乃曽保船」、1780「狭丹塗」、2089「其穂船」など魔除けと考えられるかもしれない。

1527・牽牛之　迎嬬船　己芸出良之　天漢原尓　霧之立波

（**大意**）「彦星が妻を迎えるための船（刳舟）が漕ぎ出たようである。天の川に霧が立っているのは」

1529・天河　浮津之浪音　佐和久奈里　吾待君思　舟出為良之母

（**大意**）「天の川の船着き場の波の音が高くなったようだ。待つ人が舟（刳舟）出するらしい」

1668・白崎者　幸在待　大船尓　真梶繁貫　又将顧

（**大意**）「白崎は変わらずに待っていてほしい。大船（準構造舟）に両舷に真梶（櫓）をつけてまた訪ねよう」

1670・朝開　滂出而我者　湯羅前　釣為海人乎　見反将来

（**大意**）「朝、碇泊していた船（刳舟）を漕ぎ出して由良の崎に釣りをする海人を見て帰ってこよう」

1671・湯羅乃前　塩乾尓祁良志　白神之　礒浦箕乎　敢而滂動
（**大意**）「由良の崎あたりは干潮するらしい。釣り舟（刳舟）が白神の礒の浦あたりで漕ぎ騒いでいる」

1711・百転　八十之嶋廻乎　榜雖来　粟小嶋志　雖見不足可聞
（**大意**）「多くの島々をめぐって舟（刳舟）を漕いで来たけれど、粟の小島は見飽きがしない」

1718・足利思代　榜行舟薄　高嶋之　足速之水門尓　極尓監鴨
（**大意**）「高島を目指して連れだち漕いで行く舟（準構造舟）は高島の阿渡の湊に停泊したのだろうか」

1719・照月遠　雲莫隠　嶋陰尓　吾船将極　留不知毛
（**大意**）「照る月を雲は隠さないで、島影に船（準構造舟）を碇泊しようとする湊がわからないから」

1732・母山　霞棚引　左夜深而　吾舟将泊　等万里不知母
（**大意**）「大葉山に霞がたなびき、夜が更けて舟（準構造舟）の碇泊しようとする港がわからないので心細い」

1734・高嶋之　足利湖乎　滂過而　塩津菅浦　今香将滂
（**大意**）「高島の阿渡の水門を舟（準構造舟）が漕ぎ過ぎて、塩津、菅浦あたりを今ころは漕いでいることだろう」

1740・春日之　霞時尓　墨吉之　岸尓出居而　釣船之　得乎良布見者　古之　事曽所念　水江之　浦嶋児之　堅魚釣　鯛釣矜　及七日　家尓毛不来而　海界乎　過而榜行尓　海若　神之女尓　邂尓　伊許芸趍　相誂良比　言成之賀婆　加吉結　常代尓至　海若　神之宮乃　内隔之　細有殿尓　携　二人入居而　耆不為　死不為而　永世尓　有家留物乎　世間之　愚人乃　吾妹児尓　告而語久　須臾者　家帰而　父母尓　事毛告良比　如明日　吾者

来南登　言家礼婆　妹之答久　常世辺　復変来而　如今　将相跡奈良婆　此篋　開勿勤常　曽己良久尓　堅目師事乎　墨吉尓　還来而　家見跡　宅毛見金手　里見跡　里毛見金手　怪常　所許尓念久　従家出而　三歳之間尓　垣毛無　家滅目八跡　此筥乎　開而見手歯　如本　家者将有登　玉篋　小披尓　白雲之　自箱出而　常世辺　棚引去者　立走　叫袖振　反側　足受利四管　頓　情消失奴　若有之　皮毛皺奴　黒有之　髪毛白斑奴　由奈由奈波　気左倍絶而　後遂　寿死祁流　水江之　浦嶋子之　家地見

（**大意**）「春の日の霞んでいる日、墨吉の岸に立って釣り船（刳舟）の揺れるのを見ていると、古のことが思い出される。水の江の浦島子が鰹釣り鯛釣りをして得意になって、七日間も家に帰らず海の果てに漕ぎ行くと海神の乙女にたまたま漕ぎ行き違い、互いに語り合い夫婦になり、常世の国に行き海神の宮内の立派な御殿の中に連れ立ち住んで、老いもせず死にもせず永久に暮らし得たのに、世にも愚かな男が妻に告げたのは「しばらくの間、家に帰って父母に訳を話して、明日にでもすぐに戻って来る」と言ったので、妻の言うには「この常世の国にまた帰って来て元通りに暮らそうという気であるなら、この箱を開けないで気をつけて」と強く約束した言葉であったのだが、墨吉に帰って来ると家を見るが家が分からず、里を見るが里が分からず、おかしいと思ったことは、家を出てから僅か三年の間に垣もなくなり家も無くなるはずがないと、この箱を開けてみると元のように家が現れると思い、片隅をすこし開けると、白雲が箱から出て常世の国へと靡き、狼狽えて叫び走り転げ回り足ずりしながらたちまち気を失ってしまった。若かった肌は皺になり黒かった髪は白くなり、とうとう息も絶えて遂に死んでしまったという水の江の浦島子の家の跡が見える」

（**註**）『日本書記』雄略天皇22年条「水江浦嶋子　乗船而釣…」、あるいは『丹後国風土記逸文』「浦島子」「島子独小船　汎出海中為釣…」など神仙思想の影響。「釣船」256・294あり。

1764・久堅乃　天漢尓　上瀬尓　珠橋渡之　下湍尓　船浮居　雨零而　風不吹登毛　風吹而　雨不落等物　裳不令湿　不息来益常　玉橋渡須

（**大意**）「天の川の上流の渡り瀬に立派な橋を渡し、下流の渡り瀬に船（刳舟）を浮かべて、雨が降り風のない日も風が吹いて雨が降らなくても裳を濡らすこともなく、絶えず通えるという美しい橋を渡そう」

1765・天漢　霧立渡　且今日々々々　吾待君之　船出為等霜

（**大意**）「天の川に霧がかかり、今日か今日かと待っていて、君がいよいよ船（刳舟）出

するという」

1780・牡牛乃　三宅之汐尓　指向　鹿嶋之崎尓　狭丹塗之　小船儲　玉纏之　小梶繁貫　夕塩之　満乃登等美尓　三船子呼　阿騰母比立而　喚立而　三船出者　浜毛勢尓　後奈美居而　反側　恋香裳将居　足垂之　泣耳八将哭　海上之　其津乎指而　君之己芸帰者

（**大意**）「下総の三宅の浦と向かい合う鹿島の崎に赤塗りの小船（準構造舟）を用意し玉巻きの梶（櫓）を揃え、夕潮の満ち止まった時に船人を誘い呼び立て、船（準構造舟）が漕ぎ出たら浜一杯に立ち見送り、伏し転がり慕うだろう、足ずりして声を上げ泣くだろう。海上の湊に向けて君が漕いで行くと」

（**註**）「狭丹塗之小船」は赤塗りの舟･船は官舟･船とするようだが、「赤羅小舟」、270「赤乃曽保船」、1520「佐丹塗」2089「其穂船」など魔除けと考えられるかもしれない。

1781・海津路乃　名木名六時毛　渡七六　加九多都波二　船出可為八

（**大意**）「海路の静かな時に渡られたら、このように立つ波に船（準構造舟）出することはない」

1784・海若之　何神乎　斎祈者歟　徃方毛来方毛　船之早兼

（**大意**）「海の中のどのような神に祈ったら行きも帰りも船（準構造舟）が速く漕げるのだろうか」

1807・鶏鳴　吾妻乃国尓　古昔尓　有家留事登　至今　不絶言来　勝壮鹿乃　真間乃手児奈我　麻衣尓　青衿着　直佐麻乎　裳者織服而　髪谷母　掻者不梳　履乎谷　不着雖行　錦綾之　中丹裏有　斎児毛　妹尓将及哉　望月之　満有面輪二　如花　咲而立有者　夏虫乃　入火之如　水門入尓　船己具如久　帰香具礼　人乃言時　幾時毛　不生物呼　何為跡歟　身乎田名知而　浪音乃　騷湊之　奥津城尓　妹之臥勢流　遠代尓　有家類事乎　昨日霜　将見我其登毛　所念可聞

（**大意**）「吾妻の国に昔あった事として今も絶えず語り継がれている。葛飾の真間の手児奈が麻の衣に青い襟を着け良い麻を織り裳として着け、髪は梳かず、靴さえ履かず歩くが、綾錦に包み育てた大事な子にも及ばない。満月のように満ち足りた顔、花のように微笑み立つと、夏虫が火に入るように、湊に船（刳舟）が漕ぎ入るように人々が寄って来るのを何ほどにも生きていることはないとこのようにしてどうしようと、身の上のことを知って波の音が騒ぐ湊の墓に手児奈が臥しており、遠い昔のことなのだが昨日見たことの

ように思われる」

（**註**）千葉県市川市真間付近、国府を控えた漁村、舟着場と考えられる。

1996・天漢　水底左閇而　照舟　竟舟人　妹等所見寸哉

（**大意**）「天の川の水底まで輝いており、その舟（刳舟）を出した舟人は妻に見えたのだろうか」

1998・吾恋　嬬者知遠　徃船乃　過而應来哉　事毛告火

（**大意**）「わが恋を知っている人だから行く（船のように）、言葉だけでも伝えたいのに素通りしないでほしい」

2000・天漢　安渡丹　船浮而　秋立待等　妹告与具

（**大意**）「天の川の安の渡しに船（刳舟）を浮かべて、秋を、立って待っていると妻に知らせてほしい」

2004・己孋　乏子等者　竟津　荒磯巻而寝　君待難

（**大意**）「君に恋い焦がれる人は、船着き場の津で待ちかねて荒磯を枕として寝るだろう」

2015・吾世子尓　裏恋居者　天漢　夜船滂動　梶音所聞

（**大意**）「あの人に心の内に恋い焦がれていれば、天の川を夜船（刳舟）を漕ぐ梶（櫂）の音が聞こえる」

2020・天漢　夜船滂而　雖明　将相等念夜　袖易受将有

（**大意**）「天の川を夜船（刳舟）を漕いでいるうちに夜が明けようとも、逢えると思っていない夜だから、どうして袖をかわさないでおれるでしょう」

2022・相見久　猒雖不足　稲目　明去来理　舟出為牟孋

（**大意**）「飽きたらない逢瀬ではあったが、夜が明けたので帰るから、舟（刳舟）出します」

2029・天漢　梶音聞　孫星　与織女　今夕相霜

（**大意**）「天の川に舟（刳舟）の梶（櫓）の音が聞こえ、彦星と織女とが今夜逢うのでしょう」

2042・数裳　相不見君矣　天漢　舟出速為　夜不深間

（**大意**）「たびたびは逢えない君だから、夜の更けないうちに天の川に舟（刳舟）出を早くしてください」

2043・秋風之　清夕　天漢　舟滂度　月人壮子

（**大意**）「秋風のすがすがしい夕べに天の川を舟（刳舟）漕ぎ渡る月のようす」

2044・天漢　霧立度　牽牛之　楫音所聞　夜深往

（**大意**）「天の川に霧が立ち渡り、彦星の舟（刳舟）の楫（櫓）音が聞こえ、夜が更けて行く」

2045・君舟　今滂来良之　天漢　霧立度　此川瀬

（**大意**）「君の舟（刳舟）が今、漕いで来るらしい、天の川のこの川瀬に霧が立ち渡っている」

2046・秋風尓　河浪起　暫　八十舟津　三舟停

（**大意**）「秋風に川波が立ったので、しばらくの間はどこかの舟着き場に舟（刳舟）を碇泊しよう」

2047・天漢　河声清之　牽牛之　秋滂船之　浪躁香

（**大意**）「天の川の川音がすがすがしい、彦星がこの秋に漕ぎ来る船（刳舟）の波の騒ぎだろうか」

2052・此夕　零来雨者　男星之　早滂船之　賀伊乃散鴨

（**大意**）「今夜、降ってくる雨は彦星が早くも漕ぎ出す船（刳舟）の櫂の雫だろうか」

2053・天漢　八十瀬霧合　男星之　時待船　今滂良之

（**大意**）「天の川の多くの川瀬に霧がかかり、彦星の船（刳舟）が待っていた今、漕ぎ出すらしい」

2054・風吹而　河浪起　引船丹　度裳来　夜不降間尓

（**大意**）「風が吹いて川の波が立ち、夜の更けない間に引き船（刳舟）をしてでも渡って来てほしい」

（**註**）「引船」綱を括り陸から引く舟。2749「引舟」に同じ。

2055・天河　遠渡者　無友　公之舟出者　年尓社候

（**大意**）「天の川は遠い渡り瀬があるわけではないのに舟（刳舟）出を年に一度待っている」

2058・年丹装　吾舟滂　天河　風者吹友　浪立勿忌

（**大意**）「年に一度の舟（刳舟）の仕度して漕ぐ川であり、風が吹いても決して波は立つな」

2059・天河　浪者立友　吾舟者　率滂出　夜之不深間尓

（**大意**）「天の川に波が立ってもこの舟（刳舟）は夜の更けぬ間にさあ漕ぎ出そう」

2061・天河　白浪高　吾恋　公之舟出者　今為下

（**大意**）「天の川に白波が高く立つ、恋い思う君はいよいよ舟（刳舟）出するらしい」

2067・天漢　渡瀬深弥　泛船而　掉来君之　楫音所聞

（**大意**）「天の川の渡りの瀬が深いので、船（刳舟）を浮かべて漕いでくる楫（櫓）の音が聞こえる」

2070・久堅之　天河津尓　舟泛而　君待夜等者　不明毛有寝鹿

（**大意**）「天の川の舟着き場に舟（刳舟）を浮かべて、君を待つ夜は明けないでほしい」

2072・渡守　船度世乎跡　呼音之　不至者疑　梶声之不為

（**大意**）「渡し守に船（刳舟）を渡せと呼ぶ声が届かないのか梶（櫓）の音がしない」

2075・人左倍也　見不継将有　牽牛之　嬬喚舟之　近附往乎　（一云見乍有良武）

（**大意**）「彦星が妻呼び近づいて行く舟（刳舟）は、誰でも見守るだろう」

2077・渡守　舟早渡世　一年尓　二遍往来　君尓有勿久尓

（**大意**）「渡し守に舟（刳舟）を早く渡せ、一年に二度と通うことはないのだから」

2082・天漢　河門八十有　何尓可　君之三船乎　吾待将居

（**大意**）「天の川には川の渡り瀬が多くあり、そのうちのどこで船（刳舟）を待っていようか」

2086・牽牛之　嬬喚舟之　引綱乃　将絶跡君乎　吾之念勿国
（**大意**）「彦星の迎え舟（刳舟）が来るけれど、その引き綱のように切れるようなことは思いはしない」

2087・渡守　舟出為将出　今夜耳　相見而後者　不相物可毛
（**大意**）「渡し守、舟（刳舟）を出してほしい、今夜ばかりで再び逢えぬことはないだろう」
（**註**）「渡守」2072・2077 あり。

2088・吾隠有　楫棹無而　渡守　舟将借八方　須臾者有待
（**大意**）「隠した楫（櫓）や棹が無くては、渡し守は舟（刳舟）を貸すことはできませんから、しばらく待ってください」

2089・乾坤之　初時従　天漢　射向居而　一年丹　両遍不遭　妻恋尓　物念人　天漢　安乃川原乃　有通　出々渡丹　其穂船乃　艫丹裳舳丹裳　船装　真梶繁抜　旗芒　本葉裳其世丹　秋風乃　吹来夕丹　天河　白浪凌　落沸　速湍渉　稚草乃　妻手枕跡　大舟乃　思憑而　滂来等六　其夫乃子我　荒珠乃　年緒長　思来之　恋将尽　七月　七日之夕者　吾毛悲焉
（**大意**）「天地のそのはじめから天の川に向かっていて、一年に二度と通うことはない妻恋いに物思う人は、天の川の河原にいつも通う瀬々の渡で赤塗りの船（準構造船）の艫にも舳先にも船飾りを付けて両舷に梶（櫓）を揃えて、花薄の葉をそよがせて秋風の吹いてくる夕べに天の川の白波を押し分け、急流の早瀬を渡って、若草のような妻の手を枕にしようとし、（大船のように）信頼して川瀬を漕いで来るはずの織女が長く思い続けた恋しさをすっかり晴らし、7月7日の夕べは、見る人に感動を覚えることである」
（**註**）「其穂船」舟の保全の為に赤土を塗った舟。赭土を塗る。270「赤乃曽保船」、1780「狭丹塗之小船」、3300「赤曽朋舟」は赤塗りの舟・船は官舟・船とするようだが、「赤羅小舟」、など魔除けと考えられるかもしれない。

2091・彦星之　河瀬渡　左小舟乃　伊行而将泊　河津石所念
（**大意**）「彦星の天の川瀬を渡る小舟（刳舟）が漕ぎ進み、到着して碇泊する川津が思われる」

2223・天海　月船浮　桂梶　懸而滂所見　月人壮子

（**大意**）「天の海に月の船（刳舟）を浮かべ、桂で作った梶（櫓）で月の男が漕いでいるのが見える」

（**註**）「桂梶」桂（楓）は落葉高木、材は腐朽しにくい性質から舟・船材に用いられる。『懐風藻』文武天皇（詠月）に「月舟移霧渚。楓楫泛霞浜」とある。同 1068・1295 あり。

2347・海小船　泊瀬乃山尓　落雪之　消長恋師　君之音曽為流

（**大意**）「海小船、長い間恋しく思い続けた君が、来られるような音がする」

2367・海原乃　路尓乗哉　吾恋居　大舟之　由多尓将有　人児由恵尓

（**大意**）「海原を舟（準構造舟）で行くようにゆらゆらと不安な気持ちで恋がれるためか、他人のものなのに（大船のように）ゆったりと構えていると思われる」

2407・百積　船漕汌　八占刺　母雖問　其名不謂

（**大意**）「大きい船（準構造船）を人が海に潜って引き入れる浦があり、その浦という言葉のように占を何度もして、母が問うてもその名は言わないでしょう」

2436・大船　香取海　慍下　何有人　物不念有

（**大意**）「（大船のように）香取の海に碇を下ろし、その錨ほどに物を思うのにどのような人が物を思わないのだろう」

2440・近江海　奥滂船　重下　蔵公之　事待吾序

（**大意**）「近江の海の沖を漕ぐ船（準構造舟）に碇を下ろし、湊に隠れるように心を落ち着けて便りを待っている」

2494・大船　真楫繁拔　榜間　極太恋　年在如何

（**大意**）「（大船のように）両舷に楫（櫓）を揃えて漕いで行き、一漕ぎの短い間も恋しい、幾年もの長きにあったらどうしよう」

2738・大船乃　絶多経海尓　重石下　何如為鴨　吾恋将止

（**大意**）「大船の揺れる海に碇を下ろし鎮める（船のように）、いかにしたら恋が止まるのだろう」

2740・大船之　艫毛舳毛　依浪　依友吾者　君之任意
（**大意**）「（大船のように）艫にも舳先にも寄り来る波のように、人が騒ごうとも君の思いのままに他に心は引かれません」

2745・湊入之　葦別小舟　障多見　吾念公尓　不相頃者鴨
（**大意**）「港に入る葦分けの小舟（刳舟）に差し障りが多いように、恋しく思う君にこのごろはお逢いできないのです」
（**註**）2998「葦別小舟」。

2746・庭浄　奥方榜出　海舟乃　執梶間無　恋為鴨
（**大意**）「海が凪なので沖に漕ぎ出して行き、海人の舟（刳舟）の梶（櫓）を取りが休む暇もないのと同じように、絶え間なく恋をする」

2747・味鎌之　塩津乎射而　水手船之　名者謂手師乎　不相将有八方
（**大意**）「味鎌の塩津の港に向かって漕ぐ船（準構造舟）にある名のように、名を告げたのだから必ずお逢いしたいものです」

2748・大船尓　葦荷苅積　四美見似裳　妹心尓　乗来鴨
（**大意**）「大船（刳舟）に葦の荷刈りを積んだように、妹は私の心いっぱいに乗ったことである」

2749・駅路尓　引舟渡　直乗尓　妹情尓　乗来鴨
（**大意**）「駅路で引き船（準構造舟）を引っぱって渡っているように、ひたすらに妹は私の心に乗ったことである」
（**註**）「引舟」綱を括り陸から引く舟。2054「引船」のように流れを遡る時に、陸から綱を付け岸辺を引きながら航行する。あるいは対岸に向かって綱を曳き渡し碇泊させたこともいう。

2831・水沙児居　渚座船之　夕塩乎　将待従者　吾社益
（**大意**）「みさごのいる渚の上に乗り上げた船（準構造舟）が夕潮を待っているよりは、さらに待ち遠しい気持ちです」

（**註**）「渚座船」『和名類聚鈔』には「説文云艘　子紅反、俗云為流　船着沙不行也」とあり、砂州に乗り上げた状態にある舟・船。

2998・湊入之　葦別小船　障多　今来吾乎　不通跡念莫

（**大意**）「港に入る葦分けの小船（刳舟）のように差し障りが多いが、すぐ行けず、やがては行くので躊躇ったとおもわないでほしい」

（**註**）2745「葦別小船」。

3171・難波方　水手出船之　遙々　別来礼杼　忘金津毛

（**大意**）「難波潟を漕ぎ出した船（準構造船）のように、延々と別れてきたが忘れられない」

3172・浦廻榜　熊野舟附　目頬志久　懸不思　月毛日毛無

（**大意**）「浦のあたりを漕ぎ、熊野舟（諸手舟）のように愛おしいので、心にかけて思わない月も日もない」

（**註**）「熊野舟」を特殊な舟とみるか、地名によるか、いずれにしても諸手舟。944「真熊野之船」・1033「真熊野之小船」とあり。

3173・松浦舟　乱穿江之　水尾早　楫取間無　所念鴨

（**大意**）「松浦舟（刳舟）の騒ぎ漕ぐ堀江の潮の流れが速いので、楫（櫓）を操縦するのに休む暇がないが、間もなく思い出すことです」

（**註**）1143「松浦舟」もまた556「筑紫船」も刳舟であろう。

3174・射去為　海部之楫音　湯按干　妹心　乗来鴨

（**大意**）「漁をする海人の舟（刳舟）の楫（櫓）音のようにゆらゆらと妹は心にかかり乗っている」

3202・柔田津尓　舟乗将為跡　聞之苗　如何毛君之　所見不来将有

（**大意**）「熟田津から舟（準構造舟）が出帆すると聞いたのに、どうしたことか姿がお見えにならないのでしょう」

（**註**）熟田津は三津浜、「御津」の意。

3203・三沙呉居　渚尓居舟之　榜出去者　裏恋監　後者会宿友

（**大意**）「みさごのいる渚の上に乗り上げた舟（準構造舟）が満潮を待って漕ぎ出すように、去って行ったなら後で会うとしても心恋しいことである」

3211・玉緒乃　徒心哉　八十梶懸　水手出牟船尓　後而将居
（**大意**）「現し心に、梶（櫓）を揃えて漕ぎ出す船（準構造船）に取り残されて、生きた気がしません」

3212・八十梶懸　嶋隠去者　吾妹児之　留登将振　袖不所見可聞
（**大意**）「多くの梶（櫓）を揃えて漕ぎ出た船（準構造船）が島に隠れたら、留まれと振っている袖も見えない」

3225・天雲之　影塞所見　隠来笑　長谷之河者　浦無蚊　船之依不来　磯無蚊　海部之釣不為　吉咲八師　浦者無友　吉画矢寺　磯者無友　奥津浪　諍榜入来　白水郎之釣船
（**大意**）「天の雲の影さえ映って見える泊瀬の川は浦となる入り江がないのか、船（刳舟）が入って来ない。磯がないためか海人が釣りをしない。たとえ浦がなくてもまた磯がなくても沖の浪が立つように競って漕いで入ってほしい、海人の釣り船（刳舟）」

3226・沙邪礼浪　浮而流　長谷河　可依磯之　無蚊不怜也
（**大意**）「さざ波の泡が浮いて流れる泊瀬川、船（刳舟）の寄るべき磯もないのがさびしいことである」

3232・斧取而　丹生桧山　木折来而　筏尓作　二梶貫　磯榜廻乍　嶋伝　雖見不飽　三吉野乃　瀧動々　落白浪
（**大意**）「斧を取り、丹生の檜山に樵が来て筏（イカダ）を作り、それに左右に梶（櫓）をつけ磯を漕ぎめぐり、島々を伝い見ても飽くことがなく、滝もごうごうと流れ落ちる吉野の激流は飽きない」
（**註**）丹生山から伐りだした檜材を筏にして吉野川から運ぶ。50の藤原宮造営関して伐りだした檜材、筏にして木津川を上がる。

3239・近江之海　泊八十有　八十嶋之　嶋之崎邪伎　安利立有　花橘乎　末枝尓　毛知引懸　仲枝尓　伊加流我懸　下枝尓　比米乎懸　己之母乎　取久乎不知　己之父乎　取久乎思良尓　伊蘇婆比座与　伊可流我等比米登

（**大意**）「近江の湖水には船（準構造舟）の碇泊する湊が幾つもあり、また多くの島がある。その島の崎々に立っている花橘の上の枝に餅引きを付け、中の枝に斑鳩を仕掛け、下の枝に姫を仕掛け、母鳥を捕るを知らず、父鳥を捕るを知らず、斑鳩と姫が戯れふざけている」

3240・王　命恐　雖見不飽　楢山越而　真木積　泉河乃　速瀬　竿刺渡　千速振　氏渡乃　多企都瀬乎　見乍渡而　近江道乃　相坂山丹　手向為　吾越往者　楽浪乃　志我能韓崎　幸有者　又反見　道前　八十阿毎　嗟乍　吾過往者　弥遠丹　里離来奴　弥高二　山文越来奴　剣刀　鞘従拔出而　伊香胡山　如何吾将為　往辺不知而

（**大意**）「大君の仰せのままに見ても飽きない奈良山を越えて、材木を積み、泉川（木津川）の速い川瀬を船（イカダ）に竿指して渡り、宇治川の逆巻く水の渡し瀬を見ながら越し、近江への路の相坂山に神に手向けして越えて行けば、志賀の韓崎に間もなく出て、無事であるならまた再び見よう。道の曲がりの八十の曲がりごとに通り過ぎていけば延々と里は離れた。高山もいくつか越えて、剣太刀が鞘から抜け出て、いよいよ伊香胡山も越えたがどうしよう先が知れずして」

3251・大舟能　思憑　君故尓　尽心者　惜雲梨

（**大意**）「（大船のように）思い信頼した君だから身を尽くす心は惜しくはありません」

3274・為須部乃　田付叫不知　石根乃　興凝敷道乎　石床笑　根延門叫　朝庭　出居而嘆　夕庭　入居而思　白栲乃　吾衣袖叫　折反　独之寝者　野干玉　黒髪布而　人寝　味眠不睡而　大舟乃　往良行羅二　思乍　吾睡夜等呼　読文将敢鴨

（**大意**）「手立てもわからず、岩山の険しい道をさらに岩床の広がる門を朝夕に行き来し、歎き悲しみもして白布の着物の袖を折り返し、一人で寝ると黒髪を敷いて人のように寝るような安眠もせず、（大船）が揺らぐように心が乱れ悲しんで寝た夜は幾夜か数え切れない」

3281・吾背子者　待跡不来　鴈音文　動而寒　烏玉乃　宵文深去来　左夜深跡　阿下乃吹者　立待尓　吾衣袖尓　置霜文　氷丹左叡渡　落雪母　凍渡奴　今更　君来目八　左奈葛　後文将会常　大舟乃　思憑迹　現庭　君者不相　夢谷　相所見欲　天之足夜尓

（**大意**）「あの人は待っても来られない。雁の声も寒く聞こえる。夜更けになり、夜が更けて嵐が吹いて立って待っていると着物の袖に置く霜が氷となって冴えきり、降っている雪も凍ってしまい、今はもう来られないのだろう。後でお逢いしようと（大船のように）

心は信頼しているが、現実では逢えないのでせめて長い夜を夢で夜通し逢いたいものである」

3288・大船之　思憑而　木妨己　弥遠長　我念有　君尓依而者　言之故毛　無有欲得　木綿手次　肩荷取懸　忌戸乎　斎穿居　玄黄之　神祇二衣吾祈　甚毛為便無見

（**大意**）「（大船のように）心を信頼して果てもなく久しい間、恋い思って来た君のために事の障りなくあってほしいと木綿の襷を肩に取り掛け、神酒甕を清めて据え、どのようにしたらいいのかわからないので天地の神々に祈ります」

3299・見渡尓　妹等者立志　是方尓　吾者立而　思虚　不安国　嘆虚　不安国　左丹漆之　小舟毛鴨　玉纏之　小楫毛鴨　榜渡乍毛　相語妻遠

（**大意**）「見渡せる所に妹が立ちこちらに私が立ち、思うことも穏やかでなく、嘆くことも穏やかではない。赤塗りの小舟（準構造舟）がほしい玉巻きの楫（櫓）がほしい。漕ぎ渡って語り合いたい」

3300・忍照　難波乃崎尓　引登　赤曽朋舟　曽朋舟尓　綱取繋　引豆良比　有双雖為　日豆良賓　有双雖為　有双不得敘　所言西我身

（**大意**）「難波の崎に引きのぼる赤塗りのそほ舟（準構造舟）、そのそほ舟（準構造舟）に綱を取り掛け、あれこれと無理矢理に言い張りつづけ、あれこれ言い突っ張りつづけ、結局はいたたまらぬほど人から噂を立てられてしまった」

（**註**）「赤曽朋舟」舟の保全の為に赤土を塗った舟。赭土を塗る。270「赤乃曽保船」、1780「狭丹塗之小船」、2089「其穂船」は赤塗りの舟・船は官舟・船とするようだが、「赤羅小舟」、など魔除けと考えられる。3868 同じ。

3302・紀伊国之　室之江辺尓　千年尓　障事無　万世尓　如是将在登　大舟之　思恃而　出立之　清渚尓　朝名寸二　来依深海松　夕難岐尓　来依縄法　深海松之　深目思子等遠　縄法之　引者絶登夜　散度人之　行之屯尓　鳴児成　行取左具利　梓弓　々腹振起　志乃岐羽矣　二手狭　離兼　人斯悔　恋思者

（**大意**）「紀伊の国の牟婁の入り江のほとりに千年も差し障ることなく萬年もこのようであろうと（大船のように）信頼して、出で立ち見る清い渚に朝凪ぎに寄せる深海の松、夕凪ぎに寄せる縄海苔、深海の松のように深く恋い、縄海苔のように引けば切れ絶えると思ったか。里人の集まる中の泣く子のように泣かせ、あずさ弓の弓腹を振り起こし、しのぎ羽

を二本手に挟み射放したように別れた人は悔しく恋しくてならない」

3324・挂纏毛　文恐　藤原　王都志弥美尓　人下　満雖有　君下　大座常　徃向　年緒長　仕来　君之御門乎　如天　仰而見乍　雖畏　思憑而　何時可聞　日足座而　十五月之　多田波思家武登　吾思　皇子命者　春避者　殖槻於之　遠人　待之下道湯　登之而　国見所遊　九月之　四具礼乃秋者　大殿之　砌志美弥尓　露負而　靡芽乎　珠手次　懸而所偲　三雪零　冬朝者　刺楊　根張梓矣　御手二　所取賜而　所遊　我王矣　烟立　春日暮　喚犬追馬鏡　雖見不飽者　万歳　如是霜欲得常　大船之　憑有時尓　妖言　目鴨迷　大殿矣　振放見者　白細布　飾奉而　内日刺　宮舎人方　（一云者）　雪穂　麻衣服者　夢鴨　現前鴨跡　雲入夜之　迷間　朝裳吉　城於道従　角障経　石村乎見乍　神葬　々奉者　徃道之　田付叫不知　雖思　印乎無見　雖歎　奥香乎無見　御袖　徃触之松矣　言不問　木雖在　荒玉之　立月毎　天原　振放見管　珠手次　懸而思名　雖恐有

（**大意**）「言葉に掛けて言うのも憚りがあるが、藤原の都に多く人は満ちており、君は数多いるが過ぎ去った長年月仕えてきた君の門を天の如く仰ぎ見ながら恐れ多い頼みをかけて、早く成人され望月のように満ち足られようと思って、皇子は春になれば殖槻あたりの松の下の道から丘を登られ国見をされ、九月の時雨降る秋には大殿の砌のあたりに露を受けて靡いた萩を心に掛けて観賞され、雪の降る冬の朝には張ったあずさ弓を手に取り狩りをされた。大君は霞立つ春の日一日見ても見ても飽きないので永久に斯くありたいものと（大船のように）望んでいたが、妖言に泣きはらし見間違えたのであろうか大殿を仰いでみると白布で喪飾りをして、宮のお仕えの舎人も真っ白な麻衣をつけているのは夢なのか現なのかと戸惑っていると、城上の道から石村の山を見ながら神葬りに葬り申せば、行く道の訳も知らず思っても甲斐がなく嘆いても果てがなく、御袖の触れられた松を物言わぬ木ではあるが立ち替わるその月ごとに天の原を振り仰ぎ見ながら、恐れ多いが心にかけて慕い思う」

3329・白雲之　棚曳国之　青雲之　向伏国乃　天雲　下有人者　妾耳鴨　君尓恋濫　吾耳鴨　夫君尓恋礼薄　天地　満言　恋鴨　胸之病有　念鴨　意之痛　妾恋敘　日尓異尓益　何時橋物　不恋時等者　不有友　是九月乎　吾背子之　偲丹為与得　千世尓物　偲渡登　万代尓　語都我部等　始而之　此九月之　過莫呼　伊多母為便無見　荒玉之　月乃易者　将為須部乃　田度伎乎不知　石根之　許凝敷道之　石床之　根延門尓　朝庭　出座而嘆　夕庭　入座恋乍　烏玉之　黒髪敷而　人寝　味寝者不宿尓　大船之　行良行良尓　思乍　吾寝夜等者　数物不敢鴨

（**大意**）「白雲のたなびいている国、また青雲の垂れ臥す国の天雲の下に住む人にして君を恋うのであろうか。恋しておれば天地に満足しているのは恋いしているからか胸が病む。思うために心が疼き恋が日増しにつのり、どのような時にも恋をしないという時はないが、この九月に背子が思い出にせよと言って、千年も恋いつづけ、万年も語り続けよと言い始めたこの九月の過ぎ去るのをとめるすべがなく、思い出の月が変わるとなすすべの手立ても知らず、岩山の険しい道の岩床の広がる門に朝には出て歎き、夕方には恋い焦がれながら黒髪を敷いて寝ながら人のする寝るような安眠もせず、（大船）が揺らぐように心が乱れ悲しんで寝た夜は幾夜か数え切れない」

3333・王之　御命恐　秋津嶋　倭雄過而　大伴之　御津之浜辺従　大舟尓　真梶繁貫　旦名伎尓　水手之音為乍　夕名寸尓　梶音為乍　行師君　何時来座登　大卜置而　斎度尓　狂言哉　人之言釣　我心　尽之山之　黄葉之　散過去常　公之正香乎

（**大意**）「大君の仰せのままに大和を過ぎ大伴の三津の浜から大船（準構造船）に両舷に梶（櫓櫂）を揃えて、朝凪ぎに水夫の声を立て夕凪ぎに梶（櫓）の音を立てながら行かれたが、いつ帰られるのかと夕占を聞き祈り続けたが、戯言を人が言ったのであろうか、筑紫の国の山紅葉のようにはかなくも亡くなられたと消息を伝えてきた」

3335・玉桙之　道去人者　足桧木之　山行野往　直海　川往渡　不知魚取　海道荷出而　惶八　神之渡者　吹風母　和者不吹　立浪母　疏不立　跡座浪之　立塞道麻　誰心　労跡鴨　直渡異六　直渡異六

（**大意**）「道行く人は山を越え野を通り、川を渡りようやく海路に出たが、恐ろしい神の渡りは吹く風も長閑には吹かず立つ波も静には立たず、荒波の塞ぐ道なのに誰の心が大事であると思って無理に渡ったのだろう、躊躇いもせず」

（**註**）「不知魚取」鯨魚取り、枕詞。153 に「鯨魚取」、220「鯨魚取」、1062「不知魚取」、3336「不知魚取」、3893 に「伊佐魚取」がある。

3339・玉桙之　道尓出立　葦引乃　野行山行　潦　川往渉　鯨名取　海路丹出而　吹風裳　箘跡丹者不吹　立浪裳　菌跡丹者不起　恐耶　神之渡乃　敷浪乃　寄浜部丹　高山矣　部立丹置而　細灘矣　枕丹巻而　占裳無　偃為公者　母父之　愛子丹裳在将　稚草之　妻裳有等将　家問跡　家道裳不云　名矣問跡　名谷裳不告　誰之言矣　労鴨　腫浪能　恐海矣　直渉異将

（**大意**）「旅に出発して野を行き山を通り、川を渡りようやく海路に出たが、吹く風も長

閑には吹かず立つ波も静には立たず、恐ろしい神の渡りのしきりに波の寄せる浜辺に、高山を隔てに置いて沖の藻を枕として心なく臥される君は両親の愛子であり、うら若い妻もあるであろう。家を尋ねるが家への道も告げず、名を問うが名さえ言えず、荒波の塞ぐ道なのに誰の言葉を心に大事であると思って、（船で）無理に渡ったのだろう」

3344・此月者　君将来跡　大舟之　思憑而　何時可登　吾待居者　黄葉之　過行跡　玉梓之　使之云者　蛍成　髣髴聞而　大土乎　火穂跡而　立居而　去方毛不知　朝霧乃　思或而　杖不足　八尺乃嘆々友　記乎無見跡　何所鹿　君之将座跡　天雲乃　行之隨尓　所射穴乃　行文将死跡　思友　道之不知者　独居而　君尓恋尓　哭耳思所泣

（**大意**）「この月は君が来られるかと（大船のように）思い信頼していつ来るか今日かと待つと、亡くなられたと知らせの使いが言うので真とは思えぬ、大地を炎を踏むように立ち、立っていても為すべき事がわからず、思い迷い長い溜め息が出て嘆けども嘆く甲斐無く、どこかのおられるだろうと天雲の流れるままに行き、手負いの猪のように行き倒れてしようと思ってもその道も分からず、一人いて恋い焦がれて泣けてならない」

3348・奈都素妣久　宇奈加美我多能　於伎都渚尓　布祢波等杼米牟　佐欲布気尓家里

（**大意**）「沖合の海上潟の洲の崎に船（刳舟）を停めようと、夜が更けてしまった」

（**註**）海上潟を上総海上群の五井・姉ヶ崎付近とする。

3349・可豆思加乃　麻万能宇良未乎　許具布祢能　布奈妣等佐和久　奈美多都良思母

（**大意**）「葛飾の真間の浦辺あたりを漕ぐ船（刳舟）の船人が騒いでおり、波が立つらしい」

（**註**）「宇良未」に 1228「浦廻」あり、湾曲した浦。3599「磯廻」湾曲した磯など。1228「榜舟」に同じ。

3367・母毛豆思麻　安之我良乎夫祢　安流吉於保美　目許曽可流良米　己許呂波毛倍杼

（**大意**）「足柄小舟（刳舟）が漕ぎ廻るように島々寄るところが多いので、深く思うのに逢うのが疎くなるのでしょう」

（**註**）「安之我良乎夫祢」神奈川県足柄上郡・下郡地域の特徴的な「足柄小舟」刳舟。軽快な舟を男女の薄情に喩えるほどの杉・檜材は良質。391「舟木伐り」と関連。

3380・佐吉多万能　津尓乎流布祢乃　可是乎伊多美　都奈波多由登毛　許登奈多延曽祢

（**大意**）「埼玉の津に泊っている船（刳舟）に風が強いので、舫綱は切れることがあって

も仲はきれないでほしい」
（**註**）利根川水系の入江港小崎沼の津の刳舟か。

3401・中麻奈尓　宇伎乎流布祢能　許芸弖奈婆　安布許等可多思　家布尓思安良受波
（**大意**）「川の中洲に浮いている船（刳舟）が漕ぎ出したら、今日でなければ逢えなくなるだろう」

3420・可美都気努　佐野乃布奈波之　登里波奈之　於也波左久礼騰　和波左可流賀倍
（**大意**）「上野国の佐野の舟（刳舟）橋を取り離すように、親は二人を離そうとするが、私は離れはしない」
（**註**）舟橋は刳舟を繋ぎ並べて、その上に板を渡す簡易橋。増水時に切り離す。高崎市上佐野の渡し。

3429・等保都安布美　伊奈佐保曽江乃　水乎都久思　安礼乎多能米弖　安佐麻之物能乎
（**大意**）「遠江の伊奈佐の細江のある（船道すじの）みおつくしのように信頼させておきながら、思ってくれない」

3430・斯太能宇良乎　阿佐許求布祢波　与志奈之尓　許求良米可母与　余志許佐流良米
（**大意**）「志太の浦を朝漕ぐ船（刳舟）は訳もなく漕いでいるのだろうか、訳があるのだろう」

3431・阿之我里乃　安伎奈乃夜麻尓　比古布祢乃　斯利比可志母与　許己波故賀多尓
（**大意**）「足柄の安伎奈山で引く船（刳舟）のように後ろから引き下ろすように、来ることがないので引き留めたいのです」
（**註**）「比古布祢」は、『播磨風土記』「此の里に舟引原あり、昔、神前の村に荒ぶる神ありて、毎に行く人の舟を半ば留めき、ここに往来の舟、悉に印南の大津江に留まりて、川頭に上り、賀意理多の谷より引き出でて、赤石の郡の林の潮に通はし出だしき、故、舟引原といふ…」とあり、『日本霊異記』「熊野村人、至熊野河上之山、伐樹作船。聞之有音、誦法華経。累日径月、猶読不止。造船之人、聞読経音、発心貴之、擎自分粮、以推求之、不瞰形色、故還而居。読経之音、如先不息、後歴半年、為引舟入山。聞之読経音、猶不正。…」とある。『相模国風土記逸文』「足軽山は、此山の杉の木をとりて舟につくるに、あしの軽き事、他の材にて作れる舟にことなり…」とあり、明神ヶ岳山麓に狩川が流れ、小字に舟

石・舟窪などの地があり、山で造舟し引き下ろす伝承があるのか。

3449・思路多倍乃　許呂母能素低乎　麻久良我欲　安麻許伎久見由　奈美多都奈由米
（**大意**）「麻久良我の浜から海人が船（刳舟）を漕いで来るのが見え、波よ立ってくれるな」

3450・乎久佐乎等　乎具佐受家乎等　斯抱布祢乃　那良敝弖美礼婆　乎具佐可知馬利
（**大意**）「乎久佐男と乎具佐助丁と（潮船のように）並べて見ると乎具佐が勝っているように見える」
（**註**）「斯抱布祢」（潮舟・船）海で漕ぐ舟・船。3556「思保夫祢」とあり。

3555・麻久良我乃　許我能和多利乃　可良加治乃　於登太可思母奈　宿莫敝児由恵尓
（**大意**）「麻久良我の許我の渡りの唐楫は楫（櫓）の音が高いように噂が五月蠅く、共寝もしないのに」
（**註**）「可良加治」は唐楫、外国式の櫓と解している。「許我渡」とは利根川、62「対馬渡」とは対馬海峡、1138「氏河」とは宇治川、265「狭野渡」とは紀州。

3556・思保夫祢能　於可礼婆可奈之　左宿都礼婆　比登其等思気志　那乎杼可母思武
（**大意**）「潮船（刳舟）のように捨て置けば愛おしい、共寝すれば噂が高く、どうしたものか」
（**註**）「思保夫祢」（潮舟・船）海で漕ぐ舟・船。3450「斯抱布祢」とあり。

3557・奈夜麻思家　比登都麻可母与　許具布祢能　和須礼波勢奈那　伊夜母比麻須尓
（**大意**）「悩ましい人妻であり、漕ぐ船（刳舟）のようにどうしても忘れられず、いよいよ恋しい」

3558・安波受之弖　由加婆乎思家牟　麻久良我能　許賀己具布祢尓　伎美毛安波奴可毛
（**大意**）「逢わないで行くのは惜しい、麻久良我の許我を漕ぐ渡り船（刳舟）で会いたいものである」

3559・於保夫祢乎　倍由毛登母由毛　可多米提之　許曽能左刀妣等　阿良波左米可母
（**大意**）「大船（準構造船）の舳先も艫もしっかり固めているように、許曽の里人は秘密を人には言わないだろう」

3579・大船尓　伊母能流母能尓　安良麻勢婆　羽具久美母知弖　由可麻之母能乎
（**大意**）「大船（準構造船）に妹が乗ってもいいのであれば、愛しみながら羽で包むように連れて行きたいものである」
（**註**）遣新羅船。

3582・大船乎　安流美尓伊太之　伊麻須君　都追牟許等奈久　波也可敝里麻勢
（**大意**）「大船（準構造船）を荒海に乗り出して行くが、どうか無事に早く帰って来てください」

3592・海原尓　宇伎祢世武夜者　於伎都風　伊多久奈布吉曽　妹毛安良奈久尓
（**大意**）「海原に船（準構造舟）を浮かべて寝る夜は、沖の風が強く吹かないで、愛しい妹がいないのだから」

3593・大伴能　美津尓布奈能里　許芸出而者　伊都礼乃思麻尓　伊保里世武和礼
（**大意**）「大伴の御津から船（準構造船）に乗って漕ぎ出したら、いずれの島で碇泊するのだろう」

3594・之保麻都等　安里家流布祢乎　思良受之弖　久夜之久妹乎　和可礼伎尓家利
（**大意**）「潮待ちの船（準構造船）とも知らず、妹と別れて出てきて出港しない船（準構造船）がくやしい」

3595・安佐妣良伎　許芸弖天久礼婆　牟故能宇良能　之保非能可多尓　多豆我許恵須毛
（**大意**）「朝、早く船（刳舟）を漕ぎ出してくると、武庫の浦の潮干の潟に鶴の声がする」

3599・月余美能　比可里乎伎欲美　神嶋乃　伊素未乃宇良由　船出須和礼波
（**大意**）「月の光が澄んでいるので、夜、神島の磯の浦から私は船（刳舟）出する」
（**註**）「伊素未」湾曲した磯などを廻る。1228「浦廻」、3349「宇良未」あり、湾曲した浦。

3609・武庫能宇美能　尓波余久安良之　伊射里須流　安麻能都里船　奈美能宇倍由見由
（**大意**）「武庫の浦の海上が穏やかであるらしいので漁をする漁師の釣り船（刳舟）が波の上に見える」

3610・安胡乃宇良尓　布奈能里須良牟　乎等女良我　安可毛能須素尓　之保美都良武賀
（**大意**）「阿胡の浦に船（刳舟）乗りする乙女らが赤裳の裾に潮が寄せているだろうか」

3611・於保夫祢尓　麻可治之自奴伎　宇奈波良乎　許芸弖天和多流　月人乎登祜
（**大意**）「大船（準構造船）に両舷に真楫（櫓櫂）を付けて、海の上を漕ぎ出し渡っていく月の男」

3612・安乎尓与之　奈良能美也故尓　由久比等毛我母　久左麻久良　多妣由久布祢能　登麻利都祁武仁
（**大意**）「奈良の都に行く人はいないだろうか、旅行く船（準構造船）の碇泊地のことを家に告げられるのに」

3622・月余美乃　比可里乎伎欲美　由布奈芸尓　加古能己恵欲妣　宇良未許具可聞
（**大意**）「月の光が澄んでいる夕凪ぎに水夫が声をあげ響いており、浦で船（準構造舟）を漕いでいる」
（**註**）「宇良未」、1228「浦廻」、3349「宇良未」あり、湾曲した浦。「伊素未」湾曲した磯などを廻る。長門浦は倉橋島村本浦といい、遣新羅使の船団が瀬戸内海を進む。

3624・和礼乃未夜　欲布祢波許具登　於毛敝礼婆　於伎敝能可多尓　可治能於等須奈里
（**大意**）「自分たちだけが夜船（刳舟）を漕ぐと思っていたら沖の方にも楫（櫓）の音がする」

3627・安佐散礼婆　伊毛我手尓麻久　可我美奈須　美津能波麻備尓　於保夫祢尓　真可治之自奴伎　可良久尓々　和多理由加武等　多太牟可布　美奴面乎左指天　之保麻知弖　美乎妣伎由気婆　於伎敝尓波　之良奈美多可美　宇良未欲理　許芸弖和多礼婆　和伎毛故尓　安波治乃之麻波　由布左礼婆　久毛為可久里奴　左欲布気弖　由久敝乎之良尓　安我己許呂　安可志能宇良尓　布祢等米弖　宇伎祢乎詞都追　和多都美能　於枳敝乎見礼婆　伊射理須流　安麻能乎等女波　小船乗　都良々尓宇家里　安香等吉能　之保美知久礼婆　安之弁尓波　多豆奈伎和多流　安左奈芸尓　布奈弖乎世牟等　船人毛　鹿子毛許恵欲妣　柔保等里能　奈豆左比由気婆　伊敝之麻婆　久毛為尓美延奴　安我毛敝流　許己呂奈具也等　波夜久伎弖　美牟等於毛比弖　於保夫祢乎　許芸和我由気婆　於伎都奈美　多可久多知伎奴　与曽能未尓　見都追須疑由伎　多麻能宇良尓　布祢乎等杼米弖　波麻備欲里　宇良伊蘇乎見都追　奈久古奈須　祢能未之奈可由　和多都美能　多麻伎能多麻乎　伊敝都刀尓

伊毛尓也良牟等　比里比登里　素弖尓波伊礼弖　可敝之也流　都可比奈家礼婆　毛弖礼杼毛　之留思乎奈美等　麻多於伎都流可毛

（**大意**）「朝になれば妻が手にする鏡を見るように、御津の浜辺で大船（準構造船）に両舷に真楫（櫓楫）を付けて新羅の国に渡って行こうと真向かいの敏馬を目標として潮待ちをして航路を辿り行けば、沖は白波が高く、浦あたりを漕いで渡り、懐かしい淡路の島は夕去れば雲に隠れて、夜が更けるとあてが分からなくなったので、やむを得ず明石の浦に船（準構造船）を碇泊し、浮き寝をしながら沖合を眺めて見ると、漁をする漁師の乙女らは小船（刳舟）に乗って連なり浮かんでいる。明け方の潮が満ちてくると葦の生えた岸辺に鶴が鳴いて渡り、朝凪ぎに船出しようと船人も水夫も声をだして漕ぎ出して行くと家島が雲のある遥かに見え、家を思うと心が和らぎ早く行って見ようと思い、大船（準構造船）を漕いで行けば沖合の波が高く立つので、寄ることもできず遠くよそに見るだけで過ぎゆき、多麻の浦に船（準構造船）を停めて浜辺から浦や磯を眺めていると声をあげて泣いてしまった。海の神の手巻き玉を家に待つ妻のみやげにやろうと拾って袖に入れても持たせてやる使いもいなく、持っていても甲斐がないので捨ててしまった」

（**註**）「波麻備」湾曲した浜。「宇良未」湾曲した浦。1228「浦廻」、3349「宇良未」、3622「宇良未」あり、「伊素未」湾曲した磯などを廻る。

3629・安伎左良婆　和我布祢波弖牟　和須礼我比　与世伎弖於家礼　於伎都之良奈美

（**大意**）「秋になったなら船（準構造船）が碇泊するだろう。沖の白波、忘れ貝を寄せてあげておけ」

3630・真可治奴伎　布祢之由加受波　見礼杼安可奴　麻里布能宇良尓　也杼里世麻之乎

（**大意**）「船（準構造船）の両舷に真楫（櫓櫂）を付け漕ぎ行かなかったら、見飽きしない麻里布の浦で泊まれば良かったのに」

（**註**）「真可治」とは舷側板左右から櫓櫂が出して漕ぐ状態になっている。

3632・大船尓　可之布里多弖天　波麻芸欲伎　麻里布能宇良尓　也杼里可世麻之

（**大意**）「大船（準構造舟）にかし（舫杭）を振り立て、浜の清い麻里布の浦に泊まろうか」

（**註**）「可之」は「牧柯」、舟・船を繋ぎ停めるために水中に舫杭を立てる杙である。『和名類聚鈔』「唐韻云、牧柯臧柯二音、楊氏漢語抄云、加之所以繋舟也」とあり、4313「可之」とある。古代刳舟にその痕跡がある。

3640・美夜故辺尓　由可牟船毛我　可里許母能　美太礼弖於毛布　許登都祁夜良牟
（**大意**）「都の方へ行く船（刳舟）があったら、こんなに乱れて思う胸中の苦しさを告げたい」

3641・安可等伎能　伊敝胡悲之伎尓　宇良未欲理　可治乃於等須流波　安麻乎等女可母
（**大意**）「どうしても家を恋しく思われる明け方に、浦の方から楫（櫓）の音をさせる舟（刳舟）は漁師の乙女か」
（**註**）「宇良未」湾曲した浦。1228「浦廻」、3349、3622、3627「宇良未」あり。

3643・於吉敝欲里　布奈妣等能煩流　与妣与勢弖　伊射都気也良牟　多婢能也登里乎
（**大意**）「沖合を通り漁師の船（刳舟）が都の方へ行く、呼び寄せて旅の夜のことを告げてやろう」

3644・於保伎美能　美許等可之故美　於保夫祢能　由伎能麻尓末尓　夜杼里須流可母
（**大意**）「大君の仰せを受けて、大船（準構造船）の行くがままに来て旅寝をする」

3646・宇良未欲里　許芸許之布祢乎　風波夜美　於伎都美宇良尓　夜杼里須流可毛
（**大意**）「浦あたりから漕ぎ来た船（準構造船）なのに風が強く沖に流され、岸に寄れず浦で泊まるかもしれない」
（**註**）「宇良未」湾曲した浦。1228「浦廻」、3349、3622、3627、3641「宇良未」あり。

3656・安伎波疑尓　々保敝流和我母　奴礼奴等母　伎美我美布祢能　都奈之等理弖婆
（**大意**）「秋萩に染めた美しい裳はたとえ濡れようとも、君の御船（準構造船）の綱を手に取るならば濡れても良い」

3658・由布豆久欲　可気多知与里安比　安麻能我波　許具布奈妣等乎　見流我等母之佐
（**大意**）「夕月の光が立って寄り添う天の川で船（刳舟）を漕ぐ船人が羨ましい」

3664・之可能宇良尓　伊射里須流安麻　安気久礼婆　宇良未許具良之　可治能於等伎許由
（**大意**）「志賀の浦で漁をする漁師は、夜明けには浦あたりで舟（刳舟）を漕ぐらしく楫（櫓）の音がする」

3679・於保夫祢尓　真可治之自奴伎　等吉麻都等　和礼波於毛倍杼　月曽倍尓家流
（**大意**）「大船（準構造船）の両舷に真楫（櫓櫂）をつけて、船出の順風を待つつもりであったのに月が過ぎた」
（**註**）「真可治」とは舷側板左右から櫓櫂が出して漕ぐ状態になっている。

3685・多良思比売　御舶波弖家牟　松浦乃宇美　伊母我麻都倍伎　月者倍尓都々
（**大意**）「足姫の御船（準構造船）を泊めた松浦の潟、妻が待っているはずの月は過ぎていく」

3697・毛母布祢乃　波都流対馬能　安佐治山　志具礼能安米尓　毛美多比尓家里
（**大意**）「百船（準構造船）の碇泊するという、対馬の浅茅山が時雨れの雨に紅葉している」

3704・毛美知婆能　知良布山辺由　許具布祢能　尓保比尓米低弖　伊低弖伎尓家里
（**大意**）「紅葉のしきりに散る山辺を通って、漕ぎ行く船（刳舟）の華やかさに感動し、また来たことである」

3705・多可思吉能　多麻毛奈婢可之　己芸低奈牟　君我美布祢乎　伊都等可麻多牟
（**大意**）「竹敷の浦に玉藻を靡かせて、漕ぎ出る君の御船（準構造船）はいつ帰られ、お待ちしたらいいのでしょう」

3721・奴婆多麻能　欲安可之母布祢波　許芸由可奈　美都能波麻末都　麻知故非奴良武
（**大意**）「この船（準構造船）は夜通し漕いで行ってほしいと、難波の御津の浜松が帰りを待ち焦がれているだろう」

3722・大伴乃　美津能等麻里尓　布祢波弖々　多都多能山乎　伊都可故延伊加武
（**大意**）「大伴の御津の湊に船（準構造船）を碇泊させ、龍田の山をいつ越えて、懐かしい大和の国に行くのでしょう」

3866・奥鳥　鴨云船之　還来者　也良乃崎守　早告許曽
（**大意**）「沖つ鳥の鴨という名の船（準構造船）が帰って来たら、也良の崎守、早く知らせろ」

3867・奥鳥　鴨云舟者　也良乃崎　多未弖榜来跡　所聞許奴可聞

（**大意**）「沖つ鳥の鴨という名の船（準構造船）が、也良の崎に廻り漕ぎ来たとは知らせて来てほしい」

3868・奥去哉　赤羅小船尓　裹遣者　若人見而　解披見鴨

（**大意**）「沖を行く赤い小船（準構造舟）に包みを頼んだら、もしかして夫はそれを見て解き開けるだろうか」

（**註**）「赤羅小舟」赤塗りの舟・船は官舟・船とするようだが、魔除けと考えられる。270「赤乃曽保船」、1780「狭丹塗之小船」、2089「其穂船」、3300「赤曽朋舟」など。

3869・大船尓　小船引副　可豆久登毛　志賀乃荒雄尓　潜将相八方

（**大意**）「大船（準構造船）に小舟（刳舟）を引き添えて海の底まで潜って捜したら、志賀の荒雄に探し会えるだろうか」

（**註**）対馬に行く兵粮船は肥前国松浦県美祢良久崎から出港した。

3888・奥国　領君之　漆屋形　黄漆乃屋形　神之門渡

（**大意**）「黄泉の国を治める君が塗り屋形船、黄色の屋形船で、神の海峡を渡っている」

（**註**）「屋形」屋根の形をした覆い構造を備えた船。構造船があったとは考えにくい。赭土を塗る舟に対して黄土を塗る舟、防腐効用の目的。

3892・伊蘇其登尓　海夫乃釣船　波氐尓家里　我船波氐牟　伊蘇乃之良奈久

（**大意**）「磯ごとに漁師の釣り船（刳舟）が泊まっており、わが船（刳舟）の泊まる磯が分からない」

3893・昨日許曽　敷奈低婆勢之可　伊佐魚取　比治奇乃奈太乎　今日見都流香母

（**大意**）「つい昨日、船（準構造舟）出したのに比治奇の灘を今日は目にしたことである」

（**註**）「伊佐魚取」とは、クジラを採る意から「海」「浜」「灘」にかかる枕詞だが、いわゆる捕鯨は古くからあったとされる弓取り法がある。のちに突取法という銛で鯨を突き殺す方法であり、何隻もの舟・船、何人もの漁師を必要としたが、双海舟を用いた網舟などを用いた捕鯨をしたのかは疑問である。「比治奇」は山口県豊浦郡西方地域をさし、漁場として古くから発達していたとみられる。枕詞。153に「鯨魚取」、220「鯨魚取」、1062、3335、3336「不知魚取」がある。

3894・淡路嶋　刀和多流船乃　可治麻尓毛　吾波和須礼受　伊弊乎之曽於毛布
（**大意**）「淡路島の海峡を渡る船（準構造舟）の楫（櫓）を取る間さえ、僅かな間さえ忘れられずに家を思う」

3898・大船乃　宇倍尓之居婆　安麻久毛乃　多度伎毛思良受　歌乞和我世
（**大意**）「大船（準構造船）の上におれば天雲の行方も知れぬ心細さを君よ歌ってください」

3900・多奈波多之　船乗須良之　麻蘇鏡　吉欲伎月夜尓　雲起和多流
（**大意**）「織姫が船（刳舟）に乗るらしい、清らかな鏡のように晴れた月夜に雲が立ち渡る」

3956・奈呉能安麻能　都里須流布祢波　伊麻許曽婆　敷奈太那宇知氐　安倍弖許芸泥米
（**大意**）「奈呉の漁師が釣りする船（準構造舟）は、今こそ船棚（櫂）を打ち漕ぎ出すのだろう」
（**註**）「敷奈太那」とは舷側板であろう。準構造舟・船の舷側から櫂を出して漕ぐ。

3961・白浪乃　余須流伊蘇未乎　榜船乃　可治登流間奈久　於母保要之伎美
（**大意**）「白波の寄せる磯辺を漕ぐ船（刳舟）の楫（櫓）取る間なく、思われた君であります」
（**註**）「伊蘇未」湾曲した磯などを廻る。3622「伊素未」あり。

3991・物能乃敷能　夜蘇等母乃乎能　於毛布度知　許己呂也良武等　宇麻奈米氐　宇知久知夫利乃　之良奈美能　安里蘇尓与須流　之夫多尓能　佐吉多母登保理　麻都太要能　奈我波麻須義氐　宇奈比河波　伎欲吉勢其等尓　宇加波多知　可由吉加久遊岐　見都礼騰母　曽許母安加尓等　布勢能宇弥尓　布祢宇気須恵氐　於伎敝許芸　辺尓己伎見礼婆　奈芸左尓波　安遅牟良佐和伎　之麻未尓波　許奴礼波奈左吉　許己婆久毛　見乃佐夜気吉加多麻久之気　布多我弥夜麻尓　波布都多能　由伎波和可礼受　安里我欲比　伊夜登之能波尓　於母布度知　可久思安蘇婆牟　異麻母見流其等
（**大意**）「大宮人たちが心のあった同志が心ばらしに馬を並べて、千振りの白波が荒磯に寄せる渋谷の崎を廻り、松田江の長浜を通り過ぎ宇奈比川の清い瀬ごとに鵜飼を立てあちこち行き見たけれどなおも満足せず、布勢の海に船（刳舟）を浮かべ沖を漕ぎ、岸辺を漕ぐと渚には鴿群れ騒ぎ、島辺には梢に花が咲き限りなくすがすがしく見え、二上山に這う蔦のように行き別れることなく常に通い来て、年ごとに心会った同志、今と同じように遊

びたい」

3993・布治奈美波　佐岐弖知理尓伎　宇能波奈波　伊麻曽佐可理等　安之比奇能　夜麻尓毛野尓毛　保登等芸須　奈伎之等与米婆　宇知奈妣久　許己呂毛之努尓　曽己乎之母　宇良胡非之美等　於毛布度知　宇麻宇知牟礼弖　多豆佐波理　伊泥多知美礼婆　伊美豆河泊　美奈刀能須登利　安佐奈芸尓　可多尓安佐里之　思保美弖婆　都麻欲妣可波須　等母之伎尓　美都追須疑由伎　之夫多尓能　安利蘇乃佐伎尓　於枳追奈美　余勢久流多麻母　可多与理尓　可都良尓都久理　伊毛我多米　氐尓麻吉母知弖　宇良具波之　布勢能美豆宇弥尓　阿麻夫祢尓　麻可治加伊奴吉　之路多倍能　蘇泥布理可辺之　阿登毛比弖　和賀己芸由気婆　乎布能佐伎　波奈知利麻我比　奈伎佐尓波　阿之賀毛佐和伎　佐射礼奈美　多知弖毛為弖母　己芸米具利　美礼登母安可受　安伎佐良婆　毛美知能等伎尓　波流佐良婆　波奈能佐可利尓　可毛加久母　伎美我麻尓麻等　可久之許曽　美母安吉良米々　多由流比安良米也

（**大意**）「藤の花は咲いて散り、卯の花は今が盛りであり、あちこちの山にも野にも不如帰が鳴き騒ぎ、心もしっとりと引かれ、心から恋しく思い、心の合った者が馬を並べて相共に出て行ってみると、射水川の河口の洲にいる鳥が朝凪ぎに干潟に餌をとり、潮が満ちたら妻を呼び合う。心惹かれるので見ながら過ぎ、渋谷の荒磯の崎に白波の寄せた玉藻を片寄りに蔓に作り妻のために手に巻いて持ち、美しい布勢の湖水に漁師の船（刳舟）に楫や櫂（櫓櫂）をつけて、袖を翻し誘い合い漕いで渡ると、乎布の崎には花が散り乱れ、渚には葦鴨が騒ぎ立って見ていても漕ぎ巡っても飽くことを知らない。秋のなれば紅葉の時、春になれば花の盛りの時、いずれにしても気のままにこのように愛でることにしよう。趣が絶える時があるはずがない」

（**註**）「麻可治加伊」とは舷側板左右から櫓櫂が出して漕ぐ状態になっている。

4006・可伎加蘇布　敷多我美夜麻尓　可牟佐備弖　多氐流都我能奇　毛等母延毛　於夜自得伎波尓　波之伎与之　和我世乃伎美乎　安佐左良受　安比弖許登騰比　由布佐礼婆　手多豆佐波利弖　伊美豆河波　吉欲伎可布知尓　伊泥多知弖　和我多知弥礼婆　安由能加是　伊多久之布気婆　美奈刀尓波　之良奈美多可弥　都麻欲夫等　須騰理波佐和久　安之可流等　安麻乃乎夫祢波　伊里延許具　加遅能於等多可之　曽己乎之毛　安夜尓登母志美之怒比都追　安蘇夫佐香理乎　須売呂伎能　乎須久尓奈礼婆　美許登母知　多知和可礼奈婆　於久礼多流　吉民婆安礼騰母　多麻保許乃　美知由久和礼播　之良久毛能　多奈妣久夜麻乎　伊波祢布美　古要敝奈利奈婆　孤悲之家久　気乃奈我家牟曽　則許母倍婆　許己

呂志伊多思　保等登芸須　許恵尓安倍奴久　多麻尓母我　手尓麻吉毛知弖　安佐欲比尓見都追由可牟乎　於伎弖伊加婆乎思

（**大意**）「仰ぎ見る二上山に神々しく立っている栂の木は幹も枝もいつも変わらず二人はいつも栄え、愛おしい君に朝ごとに逢って語り合い、夕方に手を取り合って、射水川の清い川のほとりに出て行き眺め渡すと、東北の風が強く吹くので河口には白波が高く、妻を呼ぼうとすると洲にいる鳥は騒ぐ。葦を刈ろうとして漁師の小舟（刳舟）が入り江を漕ぐ楫（櫓）の音が高く響き。そのことがえもいえず珍しく思い二人遊ぶさなかを大君の国のことであるから命いを持って立ち別れたら、後にいる君はそれでいいだろうが旅をする私は、白雲のたなびく山に岩を踏み越えて隔たったなら恋しさに日が長いことであり、そのことを思えば心が痛む。不如帰の声に交えて通す玉であったなら手に巻き付けて朝夕に見ながら都に行こうと思うのに置いていくのは心残りである」

4017・東風　（越俗語東風謂之安由乃可是也）　伊多久布久良之　奈呉乃安麻能　都利須流乎夫祢　許芸可久流見由

（**大意**）「東北の風が強く吹くらしい、奈呉の漁師が釣りをする小舟（刳舟）が漕ぎ隠れているのが見える」

4025・之乎路可良　多太古要久礼婆　波久比能海　安佐奈芸思多理　船梶母我毛

（**大意**）「志雄の道から直すぐ越えて来ると羽咋の海が朝凪ぎしており、船（刳舟）や梶（櫓）がほしいものである」

（**註**）石川県羽咋郡志雄町子浦の子浦川から邑知潟が見えたのだろう。

4026・登夫佐多氐　船木伎流等伊布　能登乃嶋山　今日見者　許太知之気思物　伊久代神備曽

（**大意**）「鳥総を立てて船材（舟材木）を切り出すという能登の鳥山は、今日、見れば木立が茂っており、幾年月を経たのだろう」

（**註**）「鳥総立て」の民俗事例、祭祀に関係するか。391 に同じ。

4027・香嶋欲里　久麻吉乎左之氐　許具布祢能　河治等流間奈久　京師之於母倍由

（**大意**）「香島から熊来を目指して漕ぐ船（刳舟）の楫（櫓）を取る間がないように、いつも都が思われる」

（**註**）香島津（七尾）を出航し、石川県鹿島郡熊木あたりの浅瀬を航行する刳舟。

4029・珠洲能宇美尓　安佐妣良伎之弖　許芸久礼婆　奈我波麻能宇良尓　都奇弖理尓家里
（**大意**）「珠洲の海を朝、出航して漕いで（刳舟）くると、長浜の浦には月が照っていた」
（**註**）半島の東海岸沿いを航行。

4032・奈呉乃宇美尓　布祢之麻志可勢　於伎尓伊泥弖　奈美多知久夜等　見底可敝利許牟
（**大意**）「奈呉の海にしばらく船（刳舟）を借してほしい、沖に出て波が立っているか見て来ようと思う」

4044・波万部余里　和我宇知由可波　宇美辺欲里　牟可倍母許奴可　安麻能都里夫祢
（**大意**）「浜辺伝いに通って行ったなら、漁師の釣り船（刳舟）が海辺から迎えに来てくれないだろうか」

4045・於伎敝欲里　美知久流之保能　伊也麻之尓　安我毛布支見我　弥不根可母加礼
（**大意**）「沖の方から満ちてくる潮のようにさらに増して、あれは恋しく思う君の迎え船（準構造舟）でしょうか」

4047・多流比売野　宇良乎許芸都追　介敷乃日波　多努之久安曽敝　移比都支尓勢牟
（**大意**）「垂姫の浦を船（刳舟）で漕いで漕いで、今日は楽しく遊び、語り継ぎたいとおもいます」

4048・多流比女能　宇良乎許具不祢　可治末尓母　奈良野和芸弊乎　和須礼氐於毛倍也
（**大意**）「垂姫の浦を漕ぐ船（刳舟）に梶（櫓）を取る間さえ、奈良の我が家のことが忘れられない」

4056・保里江尓波　多麻之可麻之乎　大皇乎　美敷祢許我牟登　可年弖之里勢婆
（**大意**）「難波の堀江に大君の御船（準構造舟）が漕がれるのであれば、あらかじめ知ったなら玉も敷きました」

4061・保里江欲里　水乎妣吉之都追　美布祢左須　之津乎能登母波　加波能瀬麻宇勢
（**大意**）「堀江を通り水先案内をしながら綱手を引き、御船（準構造舟）を棹さし船頭は川の瀬に気をつけよう」

4062・奈都乃欲波　美知多豆多都之　布祢尓能里　可波乃瀬其等尓　佐乎左指能保礼
（**大意**）「夏の夜は道がたどたどしいので、船（準構造舟）に乗って川の瀬ごとに棹さして上れ」

4065・安佐妣良伎　伊里江許具奈流　可治能於登乃　都波良都婆良尓　吾家之於母保由
（**大意**）「暁闇を船（刳舟）出して入り江を漕いでいる楫（櫓）の音のように細々と聞こえるが、家が思い出される」

4122・須売呂伎乃　之伎麻須久尓能　安米能之多　四方能美知尓波　宇麻乃都米　伊都久須伎波美　布奈乃倍能　伊波都流麻泥尓　伊尓之敝欲　伊麻乃乎都頭尓　万調　麻都流都可佐等　都久里多流　曽能奈里波比乎　安米布良受　日能可左奈礼婆　宇恵之田毛　麻吉之波多気毛　安佐其登尓　之保美可礼由苦　曽乎見礼婆　許己呂乎伊多美　弥騰里児能知許布我其登久　安麻都美豆　安布芸弖曽麻都　安之比奇能　夜麻能多乎理尓　許能見油流　安麻能之良久母　和多都美能　於枳都美夜敝尓　多知和多里　等能具毛利安比弖　安米母多麻波祢
（**大意**）「大君のお治めになる国の天下の四方の道に馬の蹄が行き着くかぎり、船（準構造船）の舳先が行き留まるまで、昔から今の今まで調貢をあげる中で第一に作る農作物が、幾日も雨が降らず植えた田も蒔いた畑も朝ごとにしぼみ枯れていき、それを見れば心が痛ましく、乳をほしがる赤子のように空を眺め天の水を待ち、願わくば山の尾根に見える天の白雲が海の神の宮にまで一面に這い広がって雨を降らせてほしい」

4125・安麻泥良須　可未能御代欲里　夜洲能河波　奈加尓敝太弖々　牟可比太知　蘇泥布利可波之　伊吉能乎尓　奈気加須古良　和多里母理　布弥毛麻宇気受　波之太尓母　和多之弖安良波　曽乃倍由母　伊由伎和多良之　多豆佐波利　宇奈我既里為弖　於毛保之吉許登母加多良比　奈具左牟流　許己呂波安良牟乎　奈尓之可母　安吉尓之安良祢波　許等騰比能　等毛之伎古良　宇都世美能　代人和礼毛　許己乎之母　安夜尓久須之弥　徃更年乃波其登尓　安麻乃波良　布里左気見都追　伊比都芸尓須礼
（**大意**）「天照大神の御代から安の川を中に挟んで向かい立ち袖を振り交わし、命に掛けて嘆かれる人、渡し守が船（刳舟）の用意もせず橋だけでも渡してあるなら、その上を渡って行き手を取って頸に巻いて話したいことをも話、自ら慰める心もあろう。なぜ秋にならないと語り合うことが稀なのか、人の世の自分はこのことが不思議に思い、毎年の行き変

わる天の原を振り仰いで語り継いでいるのです」

4150・朝床尓　聞者遙之　射水河　朝己芸思都追　唱船人
（**大意**）「朝床にいて聞けば遥かなことであり、射水川を朝、船（刳舟）を漕ぎながら歌う船頭」

4153・漢人毛　筏浮而　遊云　今日曽和我勢故　花縵世奈
（**大意**）「唐国の人も船（イカダ）を浮かべて遊ぶという今日であり、君、花蔓をしましょう」
（**註**）『類聚名義抄』に「桴」イカダとあり。

4187・念度知　大夫能　許乃久礼　繁思乎　見明良米　情也良牟等　布勢乃海尓　小船都良奈米　真可伊可気　伊許芸米具礼婆　乎布能浦尓　霞多奈妣伎　垂姫尓　藤浪咲而　浜浄久　白波左和伎　及々尓　恋波末佐礼杼　今日耳　飽足米夜母　如是己曽　祢年乃波尓　春花之　繁盛尓　秋葉能　黄色時尓　安里我欲比　見都追思努波米　此布勢能海乎
（**大意**）「心の合った同志、男の子らが木暮に募る思いに慰めに心を晴らそうと、布勢の湖に小船（刳舟）を浮かべ真櫂（櫂）を付け漕いで廻ると、乎布の浦に霞が靡き、垂姫の崎には藤の花が咲き、浜は清く白波が騒ぎ、波のようにしきりに恋い思いはまさるが、今日だけで見飽きはしないが、こうして年ごとにこの布勢の湖を春の花の多い盛りの時に、また秋の木葉の紅葉する時に、常に通って眺め愛でよう」
（**註**）「真可伊」小舟を浮かべて漿、短い櫓を漕ぐ。

4188・藤奈美能　花盛尓　如此許曽　浦己芸廻都追　年尓之努波米
（**大意**）「藤の花の盛りにこうしてこの浦を舟（刳舟）で漕ぎ廻り毎年愛でよう」

4220・和多都民能　可味能美許等乃　美久之宜尓　多久波比於伎氐　伊都久等布　多麻尓末佐里氐　於毛敝里之　安我故尓波安礼騰　宇都世美乃　与能許等和利等　麻須良乎能比伎能麻尓麻仁　之奈謝可流　古之地乎左之氐　波布都多能　和可礼尓之欲理　於吉都奈美　等乎牟麻欲妣伎　於保夫祢能　由久良々々々耳　於毛可宜尓　毛得奈民延都々　可久古非婆　意伊豆久安我未　気太志安倍牟可母
（**大意**）「海の神が櫛箱に入れ置かれて大切にされるという珠以上に思っていた娘であるが、人の世の道理として益荒男のお誘いに越路を指して別れてから、沖の波のようにたわむ眉引きのさまが、（大船のように）ゆらゆらと面影がしきりに見え、このように娘を恋

い焦がれたら老いた身にはそれに堪えられないかも知れない」

4240・大船尓　真梶繁貫　此吾子乎　韓国辺遣　伊波敝神多智
（**大意**）「大船（準構造船）に真楫（櫓櫂）を付けて、この子らを唐国に行かせるのだから神々、どうか守ってください」
（**註**）「真梶繁貫」とは舷側板左右から櫓櫂が出して漕ぐ状態になっている。第10次遣唐船。

4243・住吉尓　伊都久祝之　神言等　行得毛来等毛　舶波早家無
（**大意**）「住吉に神が祀られ神の告げる言葉として、その船（準構造船）は行きも帰りも早いことでしょう」

4245・虚見都　山跡乃国　青丹与之　平城京師由　忍照　難波尓久太里　住吉乃　三津尓舶能利　直渡　日入国尓　所遣　和我勢能君乎　懸麻久乃　由々志恐伎　墨吉乃　吾大御神　舶乃倍尓　宇之波伎座　船騰毛尓　御立座而　佐之与良牟　礒乃崎々　許芸波底牟泊々尓　荒風　浪尓安波世受　平久　率而可敝理麻世　毛等能国家尓
（**大意**）「ふるさと大和の国、奈良の都から難波に下り、住吉の御津から船（準構造船）に乗り、まっすぐに日の入る国に使わされる君に言葉を掛けるのが恐れ多い。住吉の大神が、船（準構造船）の舳先に鎮座され、船（準構造船）の艫に立たれて立ち寄る磯の崎々や漕ぎ泊まる湊々に荒い風や波にも合わず、もとの大和の国に平穏にともない行き帰ってきてください」

4246・奥浪　辺波莫越　君之舶　許芸可敝里来而　津尓泊麻泥
（**大意**）「沖の波も岸の波も船縁（舷側）を越えないで、船（準構造船）が漕ぎ帰って来て津に碇泊するまで」

4254・蜻嶋　山跡国乎　天雲尓　磐船浮　等母尓倍尓　真可伊繁貫　伊許芸都追　国看之勢志氐　安母里麻之　掃平　千代累　祢嗣継尓　所知来流　天之日継等　神奈我良　吾皇乃　天下　治賜者　物乃布能　八十友之雄乎　撫賜　等登能倍賜　食国之　四方之人乎母　安夫左波受　恨賜者　従古昔　無利之瑞　多婢末祢久　申多麻比奴　手拱而　事無御代等　天地　日月等登聞仁　万世尓　記続牟曽　八隅知之　吾大皇　秋花　之我色々尓　見賜　明米多麻比　酒見附　栄流今日之　安夜尓貴左
（**大意**）「ふるさと大和の国、天雲に磐船（天磐船）を浮かべ艫にも舳先にも真櫂櫓楫を

付け、漕ぎながら国の様子を見られ天降り国を平らげ、多くの年を重ね次々にと治めてきた天の日継の継承者として、神ながらわが大君、世の中を治められたら宮廷に仕える多くの人々を慈しみ統率され、国の四方の人々をも余すところ無く恵まれ、昔には無かった祥瑞が次々に現れ手を出さずして治まる御代と天地と日月とともに、永久に書いて記し残そう。わが大君は秋の花をその様々の色のままに眺められ心晴らされ、宴して楽しむ今日は言葉に言えないほど貴いことです」

（**註**）「磐船」『日本書紀』「神代上」に「天磐櫲樟船」とあり、『摂津国風土記』」には「難波高津は天稚彦天降りし時、天稚彦に属て下れる神天の探女、磐舟に乗りてここに至る、天磐舟の泊る故を以て高津と号す」とある。292「石船」とあり。

4264・虚見都　山跡乃国波　水上波　地往如久　船上波　床座如　大神乃　鎮在国曽　四舶　々能倍奈良倍　平安　早渡来而　還事　奏日尓　相飲酒曽　斯豊御酒者

（**大意**）「大和の国は海の上を地上を行くように船の上は床にいるように大神が鎮めている国であり、四つの船（4 隻）が船（準構造船）の舳先を並べ、無事に行き早く渡り来て復命を申し上げる日に、この良い御神酒は相共に飲む酒である」

（**註**）『和漢船用集』に「八雲御抄に云、唐使の舟なり。遣唐使は、大使、副使、判官、主典とて、此四人の使あるにより、船四艘にてつかはすなり。是をよつの舟と云。又四綱船といへり」という。4265 に同じ。

4265・四舶　早還来等　白香着　朕裳裾尓　鎮而将待

（**大意**）「四艘の船（4 隻の準構造船）が早く帰って来いと呪って裳の裾に苧を付け鎮めて待とう」

（**註**）遣唐使船、4264「四舶」に同じ。

4313・安乎奈美尓　蘇弖佐閇奴礼弖　許具布祢乃　可之布流保刀尓　左欲布気奈武可

（**大意**）「青い波に袖まで濡らして漕ぐ船（刳舟）のかし（舫杭）を振り立てている内に、夜が更けてしまわないだろうか」

（**註**）「可之」は「戕舸」、舟・船を繋ぎ停めるために水中に舫杭を立てる杙である。『和名類聚鈔』「唐韻云、牧舸臧柯二音、楊氏漢語抄云、加之所以繋舟也」とあり、3632「可之」とある。古代刳舟にその痕跡がある。

4329・夜蘇久尓波　那尓波尓都度比　布奈可射里　安我世武比呂乎　美毛比等母我毛

（**大意**）「多くの国々の人が難波に集まり、船（準構造船）出するが、舟飾りをする日、誰か見てほしいものである」

4331・天皇乃　等保能朝庭等　之良奴日　筑紫国波　安多麻毛流　於佐倍乃城曽等　聞食　四方国尓波　比等佐波尓　美知弖波安礼杼　登利我奈久　安豆麻乎能故波　伊田牟可比　加敝里見世受弖　伊佐美多流　多家吉軍卒等　祢疑多麻比　麻気乃麻尓々々　多良知祢乃　波々我目可礼弖　若草能　都麻乎母麻可受　安良多麻能　月日余美都々　安之我知流　難波能美津尓　大船尓　末加伊之自奴伎　安佐奈芸尓　可故等登能倍　由布思保尓　可知比伎乎里　安騰母比弖　許芸由久伎美波　奈美乃間乎　伊由伎佐具久美　麻佐吉久母　波夜久伊多里弖　大王乃　美許等能麻尓末　麻須良男乃　許己呂乎母知弖　安里米具理　事之乎波良婆　都々麻波受　可敝理伎麻勢登　伊波比倍乎　等許敝尓須恵弖　之路多倍能　蘇田遠利加敝之　奴婆多麻乃　久路加美之伎弖　奈我伎気遠　麻知可母恋牟　波之伎都麻良波

（**大意**）「大君の遠い役所である筑紫の国は敵を防ぐという城であり、治める四方の国には人が多くいるが、東国の男たちは立ち向かえば後には引かない勇気ある強い兵士であり、労い任を与えられて、懐かしい母とも別れ妻とも枕を共にせず、月日を数えながら難波の御津に大船（準構造舟）に真櫂（櫓）を付け、朝凪ぎには水夫を集め夕潮には楫（櫓）を撓ませ相引き漕ぎ行く、波の間を通り無事早く到着して大君の仰せのままに男たる心を持って巡回し、任務が終わったら無事に帰ってくるように神酒瓶を床に据えて、白栲の袖を折り返し黒髪を敷靡かせ、愛しい妻はいつまでも待っていることだろう」

（**註**）「末加伊之自奴伎」真櫂とは小舟を浮かべて漿、短い櫓を漕ぐ。

4335・今替　尓比佐伎母利我　布奈弖須流　宇奈波良乃宇倍尓　奈美那佐伎曽祢

（**大意**）「新しく交代する防人の船（準構造船）出に海の上に波は立つな」

4336・佐吉母利能　保理江己芸豆流　伊豆手夫祢　可治登流間奈久　恋波思気家牟

（**大意**）「防人が堀江を漕いで出航する伊豆手舟（準構造舟）、楫（櫓）を取るのに休む間がないように、恋い思いは休む間がないだろう」

（**註**）「伊豆手夫祢」とは、文献には造舟・船記事が見られるが、中でも『日本書紀』「巻10」の応神天皇5年冬10月条には「伊豆国に科せて船を造らしむ、長さ十丈、船既に成り、試に海に浮ぶ、便ち軽く浮きて、疾く行くこと馳するが如し、故れ其の船を名づけて枯野と曰ふ（船軽く疾きに由りて枯野と名づく、是の義違へり、若し枯野と謂ひ、後人訛

れるか)」とあるによる。4460 にも「伊豆手乃船」とあり準構造舟と見る。記事から長さが約 30 メートルの舟というので準構造舟の可能性があるが、造舟・船技術がともなうのか不詳である。藤原清輔「奥義抄」に「一人してこぐ船也」とあるが、顕昭「袖中抄」に「ひとてとは二人を云也」とあり。

4359・都久之閇尓　敝牟加流布祢乃　伊都之加毛　都加敝麻都里弖　久尓々閇牟可毛
（**大意**）「筑紫へと舳先が向く船（準構造船）はいつになったら任務を果たして故郷に向かうのだろう」

4360・天皇乃　等保伎美与尓毛　於之弖流　難波乃久尓々　阿米能之多　之良志売之伎等　伊麻能与尓　多要受伊比都々　可気麻久毛　安夜尓可之古志　可武奈我良　和其大王乃　宇知奈妣久　春初波　夜知久佐尓　波奈佐伎尓保比　夜麻美礼婆　見能等母之久　可波美礼婆　見乃佐夜気久　母能其等尓　佐可由流等伎登　売之多麻比　安伎良米多麻比　之伎麻世流　難波宮者　伎己之乎須　四方乃久尓欲里　多弖麻都流　美都奇能船者　保理江欲里　美乎妣伎之都々　安佐奈芸尓　可治比伎能保理　由布之保尓　佐乎佐之久太理　安治牟良能　佐和伎々保比弖　波麻尓伊泥弖　海原見礼婆　之良奈美乃　夜敝乎流我宇倍尓　安麻乎夫祢　波良々尓宇伎弖　於保美気尓　都加倍麻都流等　乎知許知尓　伊射里都利家理　曽伎太久毛　於芸呂奈伎可毛　己伎婆久母　由多気伎可母　許己見礼婆　宇倍之神代由　波自米家良思母
（**大意**）「古の大君の御代にも海岸の難波の国に世の中をお治めになり、今も語り継がれ恐れ多いことだが神として麗らかな春のはじめに様々な花が咲き乱れ、山を見ると珍しく、川を見ると清々しくものみな栄える時というのでご覧になり、心晴らされお出ましの難波の宮は治める四方の国から奉る貢ぎの船（準構造船）は難波の堀江から水先案内をつけ、朝凪ぎに楫（櫓）を引いて遡り、夕潮には棹刺して川を下り、あじ鴨の群れが騒ぐように船（刳舟）が騒ぎ生き織っており、浜に出て海を見ると白波の重なる中に漁師の小舟（刳舟）が点々と浮き、大君の食に奉るというのであちこちで漁をし釣りをし、大変広大なものであり、限りなくゆったりとしたこの様子を見れば、神代からこの難波の宮をはじめられたことがもっともなことと見える」

4363・奈尓波都尓　美布祢於呂須恵　夜蘇加奴伎　伊麻波許伎奴等　伊母尓都気許曽
（**大意**）「難波津で両舷に楫（櫓櫂）を揃えて船（準構造船）を出して、今、漕ぎ出したと妻に伝えたい」

4365・於之弖流夜　奈尓波能都由利　布奈与曽比　阿例波許芸奴等　伊母尓都岐許曽
（**大意**）「難波津から船（準構造船）を整えて、漕ぎ出したと妻に伝えてほしい」

4368・久自我波々　佐気久阿利麻弖　志富夫祢尓　麻可知之自奴伎　和波可敝里許牟
（**大意**）「久慈川は変わることなく待っていてほしい、潮船（準構造舟）に真楫（櫓）をつけて漕で行き、帰って来ます」
（**註**）「志富夫祢」（潮舟・船）海で漕ぐ舟・船。3450「斯抱布祢」、3556「思保夫祢」、4389 「志保不尼」とあり。「麻可知之自奴伎」とは舷側板左右から櫓櫂が出して漕ぐ状態になっている。4240「真梶繁貫」とあり。『和漢船用集』に「季吟の注に、潮海の舟と注せるは委しからすと云へし。潮海の舟を潮舟といはゝ、海舟はみな潮舟なるへし」という。

4380・奈尓波刀乎　己岐泥弖美例婆　可美佐夫流　伊古麻多可祢尓　久毛曽多奈妣久
（**大意**）「難波津から船（準構造船）を漕ぎ出て見ると、神々しい生駒の高嶺に雲がたなびいている」

4381・久尓具尓乃　佐岐毛利都度比　布奈能里弖　和可流乎美礼婆　伊刀母須敝奈之
（**大意**）「国々の防人が集まり、船（準構造船）に乗って別れていくのを見れば何ともやるせない」

4383・都乃久尓乃　宇美能奈伎佐尓　布奈余曽比　多志泥毛等伎尓　阿母我米母我母
（**大意**）「津の国の渚で船（準構造船）を整えて、出港する時には見てくれる母に会いたいものだ」

4384・阿加等伎乃　加波多例等枳尓　之麻加枳乎　己枳尓之布祢乃　他都枳之良須母
（**大意**）「暁の薄明かりに島影を漕ぎ出た船（刳舟）はどのようになったのだろう」

4389・志保不尼乃　弊古祖志良奈美　尓波志久母　於不世他麻保加　於母波弊奈久尓
（**大意**）「潮船（準構造舟）の舳先を越してかかる白波のように、思いがけなく命令が科せられた」
（**註**）「志保不尼」潮舟（潮舟･船）海で漕ぐ舟･船。3450「斯抱布祢」、3556「思保夫祢」、4368「志富夫祢」とあり。

4398・大王乃　美己等可之古美　都麻和可礼　可奈之久波安礼特　大夫　情布里於許之等里与曽比　門出乎須礼婆　多良知祢乃　波々可伎奈泥　若草乃　都麻波等里都吉　平久　和礼波伊波々牟　好去而　早還来等　麻蘇泥毛知　奈美太乎能其比　牟世比都々　言語須礼婆　群鳥乃　伊泥多知加弖尓　等騰己保里　可弊里美之都々　伊也等保尓　国乎伎波奈例　伊夜多可尓　山乎故要須疑　安之我知流　難波尓伎為弖　由布之保尓　船乎宇気須恵　安佐奈芸尓　倍牟気許我牟等　佐毛良布等　和我乎流等伎尓　春霞　之麻未尓多知弖　多頭我祢乃　悲鳴婆　波呂婆呂尓　伊弊乎於毛比泥　於比曽箭乃　曽与等奈流麻泥奈気吉都流香母

（**大意**）「大君の仰せにままに妻と別れるのは悲しいこと、勇士たる心を振りおこし旅立ちの仕度をして門出すると、母は頭を撫で妻は取りすがり、早く帰ってほしいと、袖をとり涙をぬぐい、むせびながらかき口説くのでどうしても立ち去りかねて滞り、後を振り返り遠く故郷を離れ、高山もいくつか越え、海ぎわの難波に来て、夕潮に船（準構造船）を浮かべ朝凪ぎに舳先を向けて漕ぎ出そうと潮時を図っていると、春の霞が島の方に立って鶴の声が悲しく鳴き聞こえたので、遠くの家のことを思い出して背中に背負った矢がそよと鳴るほど歎き悲しんだことである」

4408・大王乃　麻気乃麻尓々々　嶋守尓　和我多知久礼婆　波々蘇婆能　波々能美許等波　美母乃須蘇　都美安気可伎奈泥　知々能未乃　知々能美許等波　多久頭努能　之良比気乃宇倍由　奈美太多利　奈気伎乃多婆久　可胡自母乃　多太比等里之氐　安佐刀泥乃　可奈之伎吾子　安良多麻乃　等之能乎奈我久　安比美受波　古非之久安流倍之　今日太尓母　許等騰比勢武等　乎之美都々　可奈之備麻世　若草之　都麻母古騰母毛　乎知己知尓左波尓可久美為　春鳥乃　己恵乃佐麻欲比　之路多倍乃　蘇泥奈伎奴良之　多豆佐波里和可礼加弖尓等　比伎等騰米　之多比之毛能乎　天皇乃　美許等可之古美　多麻保己乃美知尓出立　乎可乃佐伎　伊多牟流其等尓　与呂頭多妣　可弊里見之都追　波呂々々尓和可礼之久礼婆　於毛布蘇良　夜須久母安良受　古布流蘇良　久流之伎毛乃乎　宇都世美乃　与能比等奈礼婆　多麻伎波流　伊能知母之良受　海原乃　可之古伎美知乎　之麻豆多比　伊己芸和多利弖　安里米具利　和我久流麻泥尓　多比良気久　於夜波伊麻佐祢　都々美奈久　都麻波麻多世等　須美乃延能　安我須売可未尓　奴佐麻都利　伊能里麻乎之弖奈尓波都尓　船乎宇気須恵　夜蘇加奴伎　可古等登能倍弖　安佐婢良伎　和波己芸泥奴等　伊弊尓都気己曽

（**大意**）「大君の仰せにままに防人に立って来ると母は裳裾を抓み、髪を撫でさすり、父

は白い髭の上に涙をこぼして嘆いて言うには、鹿子のように一人で朝早く旅する悲しい息子よ、年月長く会わなかったら恋しいであろう。今日だけでも語り合おうと、名残惜しみながら悲しみ、妻も子もあちこち取り囲み、春の鳥のように泣きじゃくり袖を泣き濡らし手を取って離しはせず引き留め慕ったことだが、大君の仰せのままに旅立ちの道に出て行き丘の岬を曲がるたびに何度も振り返り見ながら遠く別れてくると、思っても心やすからず焦がれて心苦しく、生身の人間だから命のほども分からず、海の恐ろしい潮路を島伝いに船（準構造船）を漕いで渡り、行き廻り帰って来るまで無事に両親はいてほしい、恙なく妻は待っていてほしいと、住吉の大神に幣をあげ祈りを捧げ、難波津に船（準構造船）を浮かべ多くの楫（櫓櫂）をつけ水夫を集め、朝早く船（準構造船）は漕ぎ出したと家に知らせてほしい」

4409・伊弊婢等乃　伊波倍尓可安良牟　多比良気久　布奈泥波之奴等　於夜尓麻乎佐祢
（**大意**）「家の人が清めてくれたからだろうか、無事に船（準構造船）出したと親に伝えてほしい」

4412・之麻可気尓　和我布祢波弖氐　都気也良牟　都可比乎奈美也　古非都々由加牟
（**大意**）「島影に船（準構造船）を碇泊させてもその事を知らせる使いがないので、恋しがりながら行くことになるのだろう」

4459・蘆苅尓　保里江許具奈流　可治能於等波　於保美也比等能　未奈伎久麻泥尓
（**大意**）「葦を刈りに堀江を漕ぐ船（刳舟）の楫（櫓）音は、大宮人にみんな聞こえるほど響いている」

4460・保利江己具　伊豆手乃船乃　可治都久米　於等之婆多知奴　美乎波也美加母
（**大意**）「難波の堀江を漕ぐ伊豆手船（準構造舟）の楫（櫓）の軋みがしきりに音を立てるのは、水の流れが速いのだろうか」
（**註**）「伊豆手乃船」、舟・船に松浦、筑紫、足柄、伊豆などの地名を冠したものがある。4336「伊豆手天祢」とあり。

4461・保里江欲利　美乎左香能保流　梶音乃　麻奈久曽奈良波　古非之可利家留
（**大意**）「堀江から絶え間なく聞こえる舟（刳舟）の楫（櫓）の音は、いつまでも奈良の都が恋しい」

4462・布奈芸保布　保利江乃可波乃　美奈伎波尓　伎為都々奈久波　美夜故杼里香蒙
（**大意**）「船（刳舟）が先を競い上る堀江の川岸に来て鳴いている鳥は、都鳥というのだろうか」

4514・阿乎宇奈波良　加是奈美奈妣伎　由久左久佐　都々牟許等奈久　布祢波々夜家無
（**大意**）「青い海原に風も波も和ぎ､だから行きも帰りも船（準構造船）は早いことでしょう」

2、万葉集・遣唐使ほか文献資料

①　万葉集関連

万葉集の研究文献は単行本だけでも約 2500 冊以上は発行されている。ここでの文献資料は舟、港湾、漁撈などに関わる論文・単行本を採用した。とは言え直接的な資料は少なく、それに関わる文献を取り上げた。万葉集から舟だけを取り上げた研究資料はほとんどないが、詠まれた歌には舟や漁業、津、湊といった風景が多く登場する。従って万葉集という特定な時期の史料を民俗・民族学的な立場から考察することは可能なことであろう。特に漁業に関しては「棚無し小舟」と称する刳舟が万葉集には多く登場する。また「四つの船」と呼ばれた遣唐使船の編成船団を詠った歌も登場する。各地から呼ばれた防人の歌からは地方の津や湊を推察することができる。（文献続載）

阿蘇瑞枝ほか『『万葉集』の世界』読書マップ　筑摩書房　1980 年
荒木田楠千代『万葉集上野国歌』煥乎堂　1936 年
居駒永幸「万葉集に見る日本海」
「国文学　解釈と鑑賞―特集古典文学に見る日本海―」第 882 号　至文堂　2004 年
伊丹末雄『越後と万葉集』北越出版　1974 年
市村宏「第七次遣唐船の航路―山上憶良ノートより―」
「美夫君志」第 11 号　美夫君志会　1967 年
伊藤博『万葉集相聞の世界』塙書房　1959 年
伊藤博『万葉集の構造と成立』上下　塙書房　1974 年
伊藤博『万葉集の歌人と作品』塙書房　1975 年
伊藤博・橋本達雄編『万葉集物語』有斐閣　1977 年

伊藤博・稲岡耕二編『万葉集を学ぶ』全８集　有斐閣　1977 年 ~
犬養孝『万葉の風土』塙書房　1956 年
犬養孝『万葉の旅（上）―大和―』現代教養文庫 481　社会思想社　1964 年
犬養孝『万葉の旅（中）―近畿・東海・東国―』現代教養文庫 482　社会思想社　1964 年
犬養孝『万葉の旅（下）―山陽・四国・九州・山陰・北陸―』現代教養文庫 483
社会思想社　1964 年
犬養孝『万葉の風土・続』塙書房　1972 年
犬養孝『万葉風土明日香風』現代教養文庫 874　社会思想社　1976 年
犬養孝『万葉風土明日香風（続）』現代教養文庫 974　社会思想社　1978 年
猪俣静弥『万葉風土記―大和編―』偕成社　1990 年
猪俣静弥『万葉風土記―西日本編―』偕成社　1991 年
猪俣静弥『万葉風土記―東日本編―』偕成社　1991 年
今井福治郎『東国万葉紀行』有精堂　1947 年
今井福治郎『房総万葉地理の研究』春秋社　1964 年
井村哲夫『憶良と虫麻呂』桜楓社　1973 年
伊原昭『万葉の色相』塙書房　1964 年
上原和「筑紫の海に歌える―万葉紀行・Ⅱ筑紫―」
『図説日本の古典―万葉集―』第２巻　集英社　1978 年
宇野悦郎『常陸万葉風土記―万葉集常陸防人歌の郷土史的研究―』ふるさと文庫
筑波書林　1980 年
宇野悦郎『常陸万葉風土記考』宇野悦郎著作集刊行会編　1981 年
黄當時「古代日本語の船舶の名称における外来語の要素について」
「文学部論集」第 89 号　佛教大学文学部　2005 年
黄當時「古代日本語の船舶の名称における外来語の要素について
―亀甲（『古事記』中巻、神武天皇）を中心に―」
「文学部論集」第 90 号　佛教大学文学部　2006 年
黄當時「古代日本語の船舶の名称における異層の要素について
―産屋の豊玉姫が和邇の姿をしていたことを中心に―」
「文学部論集」第 91 号　佛教大学文学部　2007 年
黄當時「古代日本語の船舶の名称における異文化の要素について
―竹籠（『日本書紀』神代下、第十段、一書第一）を中心に―」
「文学部論集」第 92 号　佛教大学文学部　2008 年

黄當時「堅田―いつも堅田があり、いつも堅田が見えるところ―」
「文学部論集」第 93 号　佛教大学文学部　2009 年
黄當時「古代日本語の船舶の名称における異文化の要素について
―籠神社を中心に―」第 94 号　佛教大学文学部　2010 年
黄當時「古代日本語の船舶の名称における異文化の要素について―博多を中心に―」
「文学部論集」第 95 号　佛教大学文学部　2011 年
黄當時「古代日本語の船舶の名称における異文化の要素について
―「岩はしる垂水」を中心に―」「文学部論集」第 96 号　佛教大学文学部　2012 年
黄當時「古代日本語の船舶の名称における異文化の要素について―さばにを中心に―」
「文学部論集」第 97 号　佛教大学文学部　2013 年
扇野聖史『万葉の道』クリエイト大阪　1976 年
大井重二郎『万葉集山城歌枕考』立命館出版部　1936 年
大井重二郎『万葉集摂河泉歌枕考』立命館出版部　1939 年
大井重二郎『万葉大和』立命館出版部　1942 年
大井重二郎『万葉歌枕抄』初音書房　1950 年
太田水穂『古事記の開顕―神々の夜明―』人文書院　1943 年
大津市歴史博物館編『琵琶湖と水中考古学―湖底からのメッセージ―』
開館 10 周年記念企画展　大津市歴史博物館　2001 年
大津有一「万葉集に於ける北陸地方」『万葉集大成―風土篇―』第 21 巻　平凡社　1955 年
大西克礼『万葉集の自然感情』岩波書店　1943 年
大野透『万葉仮名の研究』明治書院　1962 年
大藪虎亮「瀬戸内海と万葉集」『万葉集大成―風土篇―』第 21 巻　平凡社　1955 年
岡田誠一『伊勢歌枕考』三重県郷土資料刊行会　1971 年
岡部政裕『万葉長歌考説』風間書房　1970 年
小川靖彦『万葉集と日本人―読み継がれる一千二百年の歴史―』角川選書 539
角川書店　2014 年
奥野建治『万葉集摂河泉志考』靖文社　1941 年
奥野建治『万葉山代志考』大八州出版　1946 年
奥野建治『万葉三国志考―伊賀・伊勢・志摩―』靖文社　1947 年
奥野健治「万葉集に於ける近畿地方」『万葉集大成―風土篇―』第 21 巻　平凡社　1955 年
奥野建治『万葉地理三題』佐紀発行所　1959 年
尾関栄一郎『万葉集東歌論稿』文栄社　1950 年

尾崎暢殃『万葉集とその周辺』明治書院　1983 年
小田芳寿ほか「万葉集遣唐使関係歌抄」「明日香風」第 130 号　古都飛鳥保存財団　2014 年
音代湘園「万葉船舶語彙」「上方」第 140 号　上方郷土研究會　1942 年
折口信夫『万葉集辞典』文会堂　1919 年
加藤順三『万葉美論』堀書店　1948 年
川口常孝『万葉歌人の美学と構造』桜楓社　1973 年
川村悦麿『万葉集伝説歌考』甲子社書房　1927 年
川村孝次郎『万葉人の美意識―天然現象を通して―』笠間選書 111　笠間書院　1978 年
神田秀夫『人麻呂歌集と人麻呂伝』塙書房　1965 年
岸哲男『万葉山河』集英社　1976 年
北島葭江『万葉集大和地誌』関西急行鉄道（株）　1941 年
北島葭江「大和の風土と万葉集」『万葉集大成―風土篇―』第 21 巻　平凡社　1955 年
北住敏夫『万葉の世界』弘文堂書房　1940 年
北日本新聞社編『越中の万葉』北日本新聞社　1972 年
北山茂夫『万葉の世紀』東京大学出版会　1953 年
北山茂夫『万葉の時代』岩波新書 189　岩波書店　1954 年
北山茂夫『続万葉の世紀』東京大学出版会　1975 年
北山茂夫『万葉集とその世紀（上）（中）』新潮社　1984 年
北山茂夫『万葉集とその世紀（下）』新潮社　1985 年
北山茂夫『万葉の創造的精神』新潮社　1958 年
木俣修『万葉集―時代と作品―』NHK ブックス 49　日本放送出版協会　1966 年
久米常民『万葉集の文学論的研究』桜楓社　1970 年
久米常民『万葉集―時代と作品―』桜楓社　1973 年
窪田空穂『防人の歌』正芽社　1942 年
栗林章『万葉と難波』柳原書店　1961 年
栗林章『大阪の万葉』1969 年
鴻巣盛広『北陸万葉集古蹟研究』金沢宇都宮書店　1934 年
小島憲之ほか『万葉集』全 4 冊　日本古典文学全集　小学館　1971 年 ~
五唐勝『訳注万葉東歌』桜楓社　1974 年
五味智英『万葉集必携』学燈社　1967 年
小林一郎『万葉集愛国歌抄』（『皇国精神講座』第 9 輯）平凡社　1942 年
西郷信綱『貴族文学としての万葉集』丹波書林　1946 年

斉藤清衛「万葉集に於ける中国・四国」『万葉集大成―風土篇―』第 21 巻　平凡社　1955 年
斎藤茂吉『万葉秀歌』上下 2 巻冊　岩波新書　岩波書店　1938 年
斉藤茂吉『柿本人麻呂』全 5 冊　岩波書店　1940 年
斉藤瀏『増補万葉名歌鑑賞』人文書院　1942 年
斉藤瀏『防人の歌』東京堂　1942 年
阪口保・増田徳二『万葉地理研究―兵庫篇―』白帝書房　1933 年
坂口保『浦島説話の研究』新元社　1955 年
阪口保『万葉林散策』創元社　1960 年
櫻井満『万葉集の民俗学的研究』おうふう　1995 年
桜井満『万葉集東歌古注釈集成』桜楓社　1972 年
桜井満『万葉集東歌研究』桜楓社　1972 年
桜井満訳注『現代語訳対照万葉集』全 3 冊　旺文社　1974 年 ~
桜井満『万葉集の風土』現代新書 493　講談社　1979 年
笹岡明「潮船に真楫繁貫き―久慈の入海と水運―」「郷土ひたち」第 46 号　日立市　1996 年
笹岡明「防人の赴任経路と水運―天平勝宝七年の常陸国の防人歌をめぐって―」
「茨城史林」第 21 号　茨城近世史研究会　1997 年
佐々木信綱ほか『校本万葉集』全 9 冊　1931 年 ~
佐々木信綱ほか『万葉集講座』全 6 冊　春陽堂　1933 年 ~
佐々木信綱『大伴旅人大伴家持―歴代歌人研究―』厚生閣　1939 年
佐々木信綱編『万葉事典』中央公論社　1941 年
佐々木信綱『万葉集の研究―仙覚及び仙覚以前の万葉集の研究―』岩波書店　1942 年
佐々木信綱・今井福治郎『万葉集防人歌の鑑賞』有精堂　1942 年
佐々木信綱『万葉請話』靖文社　1942 年
佐々木信綱『増訂万葉辞典』有朋堂　1952 年
佐々木信綱『万葉集事典』平凡社　1956 年
沢潟久孝『万葉の作品と時代』岩波書店　1941 年
沢潟久孝『万葉集序説』楽浪書院　1941 年
沢潟久孝『万葉佳品抄』全国書房　1943 年
沢潟久孝ほか『万葉集大成』全 22 冊　平凡社　1953 年 ~
沢潟久孝ほか編『万葉集大成』風土篇　第 21 巻　平凡社　1955 年
沢潟久孝・森本治吉『作者類別年代順万葉集』新潮社　1932 年
滋賀アララギ会『万葉の近江』白川書院　1971 年

重松明久「浦島伝説の性格とその変貌」「日本歴史」第 367 号　日本歴史学会　1978 年
柴田恵司・高山久明「対馬佐護湊で見聞した藻刈舟について」「海事史研究」第 31 号
日本海事史学会　1978 年
島木赤彦『万葉集の鑑賞及び其批評』岩波書店　1925 年
清水克彦『万葉論集』桜楓社　1970 年
志村陸城『記紀の歌』平凡社　1942 年
下田忠『瀬戸内の万葉』桜楓社　1984 年
新藤知義『万葉集東歌解釈』高文堂出版社　1974 年
瀬古確『太宰府圏の歌―万葉の国筑紫―』国語国文学研究叢書 13　南雲堂桜楓社　1964 年
瀬古確『万葉集の表現』教育出版センター　1974 年
瀬古確『万葉情調』桜楓社　1968 年
副島丈太郎『県別口訳九州万葉集』桜楓社　1972 年
高木市之助『吉野の鮎―記紀万葉雑攷―』岩波書店　1941 年
高木市之助・田辺幸雄『万葉集』日本古典鑑賞講座第 3 巻　角川書店　1958 年
高木市之助・竹内理三編『万葉びとの世界』角川書店　1967 年
高木博『万葉の遣唐使船―遣唐使とその混血児たち―』教育出版センター　1984 年
高崎正秀『万葉集叢攷』桜楓社　1971 年
高藤武馬『万葉女人像』女性叢書　三国書房　1944 年
高峯正冏『氷見万葉風土記』氷見市文化財保存会　1960 年
瀧川政次郎『万葉律令考』東京堂出版　1974 年
滝口弘『九州の万葉』ハレルヤ書店　1964 年
竹内金治郎『万葉防人歌新注』桜楓社　1965 年
武田祐吉『山部赤人』青梧堂　1943 年
辰巳和弘「漁労集団―海人の形成―」『日本の古代遺跡 1 静岡』保育社　1982 年
辰巳和弘「伊豆手舟と「枯野」説話―海と山のむすびつき―」
『万葉集の考古学』筑摩書房　1984 年
田辺幸雄『万葉集東歌』塙書房　1963 年
谷馨『万葉武蔵野紀行』刀江書院　1959 年
谷馨『額田王』早稲田大学出版部　1960 年
谷馨『万葉東歌新注』桜楓社　1964 年
谷馨『万葉東国紀行』南雲堂桜楓社　1964 年
田村勇「狩猟・漁撈の生活」『万葉集の民俗学』桜楓社　1993 年

筑紫豊『九州万葉散歩』角川書店　1962 年
筑紫豊『大宰府と万葉集』大宰府天満宮　1964 年
筑紫豊『古代筑紫文化の謎―万葉と古代九州―』新人物往来社　1974 年
土橋寛『万葉集―作品と批評―』日本文学新書　創元社　1956 年
土橋寛『万葉開眼』NHK ブックス　日本放送出版協会　1978 年
土屋寛『作者別万葉集』桜楓社　1978 年
土屋文明『万葉紀行』改造社　1943 年
土屋文明『万葉集上野国歌私注』煥乎堂　1944 年
土屋文明『続万葉紀行』養徳社　1946 年
土屋文明『新修万葉紀行』創元社　1952 年
土屋文明『万葉集』日本国民文学全集第 2 巻　河出書房　1956 年
土屋文明『万葉集』国民の文学第 2 巻　河出書房新社　1963 年
土屋文明『万葉名歌』現代教養文庫 141　社会思想社　1980 年
寺川真知夫「『仁徳記』の枯野伝承の形成」『日本古代論集』笠間叢書 144
笠間書院　1980 年
寺田透『万葉の女流歌人』岩波新書　岩波書店　1975 年
豊田八十代『万葉地理考』大岡山書店　1932 年
豊田八十代『万葉集東歌の研究』目黒書店　1936 年
直木孝次郎『額田王』人物叢書　吉川弘文館　2007 年
永井路子『万葉恋歌―日本人にとって「愛する」とは―』カッパブックス　光文社　1972 年
中川哲舟「万葉集にみる大阪湾の漁業」『大阪府漁業史』
大阪府漁業史編さん協議会　1997 年
中西進『万葉集の比較文学的研究』桜楓社　1963 年
中西進『万葉史の研究』桜楓社　1968 年
中西進『万葉の心』毎日新聞社　1972 年
中西進『万葉の世界』中公新書　中央公論社　1973 年
中西進「万葉時代の舟の歌」『万葉の時代と風土』角川選書 112　角川書店　1980 年
中村烏堂『万葉集東歌評釈』新英社　1935 年
中村行利『万葉と九州』日本談義社　1969 年
中村美穂『東歌私解』みづかき社　1934 年
中山太郎『万葉集の民俗学的研究』校倉書房　1962 年
西尾牧夫『海の伝説―瀬戸内海を中心として―』成山堂書店　1963 年

西角井正慶「関東・信濃・東北」『万葉集大成―風土篇―』第 21 巻　平凡社　1955 年
西村眞次「『万葉集』の文化史的研究」『日本文化論考』厚生閣　1941 年
西村眞次『万葉集伝説歌謡の研究』第一書房　1943 年
西村真次『萬葉集の文化史的研究』東京堂　1947 年
野田実『内海万葉地理考』文献書房　1933 年
芳賀登「『万葉集』の成立と内容」『真説日本歴史―万葉の世の中―』第 2 巻
雄山閣　1959 年
原島礼二「東歌と志太の浦」「『図説日本の古典』第 2 巻月報」集英社　1978 年
原田大六『万葉集発掘』朝日新聞社　1973 年
林晃平『浦島伝説の研究』おうふう　2001 年
深澤芳樹「葬送船の記憶」「万葉古代学研究所年報」第 10 号　万葉古代学研究所　2012 年
久松潜一『万葉集の新研究』至文堂　1929 年
久松潜一『増訂万葉集の新研究』至文堂　1929 年
久松潜一『万葉集』日本古典読本Ⅰ　日本評論社　1940 年
久松潜一ほか『万葉集講座』全 4 冊　創元社　1952 年 ~
久松潜一　『万葉集とその前後―万葉集論考―』刀江書院　1958 年
久松潜一・志田延義『古代詩歌に於ける神の概念』第一書房　1967 年
久松潜一『万葉集入門』現代新書 33　講談社　1979 年
久松潜一『万葉集の研究』至文堂　1969 年
久松潜一監修『万葉集講座』全 6 冊　有精堂　1972 年 ~
久松潜一『万葉集と上代文学』笠間書院　1973 年
日比野道男『万葉地理研究―紀伊篇―』白帝書房　1931 年
福田良輔編『九州の万葉』桜楓社　1967 年
堀内民一『万葉大和風土記』大和文化選書第 3 輯　天理時報社　1943 年
堀内民一『万葉大和風土記』天理時報社　1943 年
堀内民一『定本万葉大和風土記』人文書院　1962 年
堀内民一『大和万葉―その歌の風土―』創元社　1969 年
正宗敦夫・森本治吉『万葉集大辞典』日本古典全集刊行会　1943 年
松岡静雄『民族学上より見たる東歌と防人歌』大岡山書店　1928 年
松岡静雄『有由縁歌と防人歌』瑞穂書院　1935 年
松田修『万葉植物新考』社会思想社　1970 年
松田好夫「万葉集に於ける東海地方」『万葉集大成―風土篇―』第 21 巻　平凡社　1955 年

松田好夫『万葉研究―新見と実証―』桜楓社　1968 年
松原博一『万葉の精神構造』桜楓社　1975 年
真鍋充親『伊予の高嶺―熟田津石湯行宮の発見―』立春短歌会　1969 年
丸茂武重『古代の道と国』ロッコウブックス　六興出版　1986 年
三上巌『万葉散歩江津と人麻呂』江津タイムズ社　1969 年
水谷義治『校注万葉集東歌・防人歌』笠間書院　1972 年
水野祐『古代社会と浦島伝説』上下巻　雄山閣　1975 年
三松荘一『九州万葉手記―九州万葉地理考―』福岡金文堂　1929 年
南信一『万葉集駿遠豆―論考と評釈―』風間書房　1969 年
室伏秀平『万葉東歌』弘文堂　1966 年
村木清一郎『万葉集』上下 2 巻　古典日本文学全集　筑摩書房　1959 年
森浩一編『万葉集の考古学』筑摩書房　1984 年
森本治吉『万葉のうた』少国民の日本文庫　大日本雄弁会講談社　1943 年
森本治吉『万葉美の展開』清流社　1949 年
森本治吉「万葉集に於ける九州地方」『万葉集大成―風土篇―』第 21 巻　平凡社　1955 年
森脇一夫『万葉の美意識』桜楓社　1974 年
安田喜代門『上代人の生活と歌』湯川弘文社　1943 年
安田徳太郎『日本人の歴史―万葉集の謎―』（Ⅰ）光文社　1955 年
山口博『万葉集の誕生と大陸文化』角川書店　1996 年
山崎馨「四つの船―古代外交裏面史の哀歓―」「万葉集研究」第 9 集　塙書房　1980 年
山本健吉・池田弥三郎『万葉百歌』中公新書 19　中央公論社　1979 年
吉川貫一『万葉集と郷土―摂津・播磨・淡路―』中外書房　1958 年
吉永登『万葉―文学と歴史のあいだ―』創元学術双書　創元社　1967 年
吉野裕『防人歌の基礎構造』御茶の水書房　1956 年
若浜汐子『万葉植物全解』潤光社　1959 年
和田徳一「越中万葉風物考―地理篇―」「教育学部紀要」第 7 号
富山大学教育学部　1959 年
渡辺守順『万葉集の時代』歴史新書〈日本史〉12　ニュートンプレス　1978 年

〈史料編・万葉集関連〉
青木生子ほか校注『万葉集』全 5 冊　新潮日本古典集成　新潮社　1976 年 ~
石井庄司ほか『万葉集（4）』日本古典全書　朝日新聞社　1954 年

石井庄司ほか『万葉集（5)』日本古典全書　朝日新聞社　1955 年
井上通泰『万葉集新考』全 8 冊　国民図書　1928 年 ~
折口信夫『口訳万葉集』文会堂　1916 年 ~
金子元臣『万葉集評釈』全 4 冊　明治書院　1935 年 ~
窪田空穂『万葉集評釈』全 12 冊　東京堂　1943 年 ~
鴻巣盛広『万葉集全釈』全 6 冊　大倉広文堂　1930 年 ~
小島憲之ほか校注『万葉集』全 4 巻　日本古典文学全集　小学館　1971 年 ~
佐伯梅友ほか『万葉集（2)』日本古典全書　朝日新聞社　1956 年
坂本太郎ほか校注『日本書紀』（下）　日本古典文学大系　岩波書店　1965 年
佐々木信綱編『真訓万葉集』全 2 冊　岩波文庫　岩波書店　1927 年
佐々木信綱編『白文万葉集』全 2 冊　岩波文庫　岩波書店　1930 年
佐々木信綱ほか『校本万葉集』岩波書店　1931 年 ~
佐々木信綱『評釈万葉集』全 7 冊　六興出版部　1948 年 ~
佐々木信綱『万葉集選釈』明治書院　1953 年
佐々木信綱『新訂真訓万葉集』全 2 冊　岩波文庫　岩波書店　1954 年
佐竹昭広・木下正俊・小島憲之『万葉集―本文篇―』塙書房　1963 年
沢潟久孝『万葉集新釈』全 2 冊　星野書店　1931 年
沢潟久孝『万葉集新釈』全 2 冊　星野書店　1947 年 ~
沢潟久孝・佐伯梅友『新校万葉集』創元社　1949 年
沢潟久孝『万葉集新注』白楊社　1955 年
沢潟久孝『万葉集注釈』全 21 冊　中央公論社　1957 年 ~
高木市之助ほか『万葉集』全 4 冊　日本古典文学大系　岩波書店　1957 年 ~
高木市之助校註『上代歌謡集』日本古典全集　朝日新聞社　1967 年
武田祐吉校註『記紀歌謡集』岩波文庫　岩波書店　1933 年
武田祐吉『改訂増補万葉集新解』全 3 冊　山海堂　1939 年 ~
武田祐吉『万葉集全注釈』全 16 冊　改造社　1948~51 年
武田祐吉『万葉集』全 2 冊　角川文庫　角川書店　1954 年 ~
武田祐吉『万葉集全講』全 3 冊　明治書院　1955 年 ~
武田祐吉『増訂万葉集全註釈』全 14 冊　角川書店　1956 年 ~
土屋文明『万葉集私注』全 20 冊　筑摩書房　1949 年 ~
土屋文明『万葉集』日本国民文学全集第 2 巻　河出書房　1956 年
鶴久・森山隆『万葉集』桜楓社　1972 年

藤森朋夫ほか『万葉集（3)』日本古典全書　朝日新聞社　1956 年
村木清一郎『訳万葉』筑摩書房　1956 年
森本治吉ほか『万葉集（1)』日本古典全書　朝日新聞社　1956 年
山田孝雄『万葉集講義』全 3 冊　宝文館　1928 年 ~

②　遣唐使関連

遣唐使船についての研究文献は、東京国立博物館蔵（法隆寺旧蔵）『聖徳太子絵伝』やボストン美術館蔵『吉備大臣入唐絵詞』、唐招提寺蔵『鑑真和上東征絵伝』に描かれた船が基本的に引用され、船の研究は進んでいない。ここに描かれた船画は遣唐使船ではなく、宋代以後の中国で利用されていた戎克船の想像図でしかない。とは言え寛平 6 年に菅原道真の提議により廃止されるまで 19 次の航海が現実に航行しており、航路の推定考察の論考があり、寄港地や船舶に関して推考することができる。（文献続載）

青木和夫『日本の歴史―奈良の都―』第 3 巻　中央公論社　1965 年
アジア遊学編集部「アジア遊学―特集・東アジアの遣唐使―」第 3 号　勉誠出版　1999 年
アジア遊学編集部「アジア遊学―特集・日本の遣唐使―」第 4 号　勉誠出版　1999 年
アジア遊学編集部「アジア遊学―特集・道賢銘経筒の真贋―」第 22 号　勉誠出版　2000 年
アジア遊学編集部「アジア遊学―特集・九世紀の東アジアと交流―」第 26 号
勉誠出版　2001 年
アジア遊学編集部「アジア遊学―特集・遣唐使をめぐる人と文学」第 27 号
勉誠出版　2001 年
アジア遊学編集部「アジア遊学―波騒ぐ東アジア―」第 70 号　勉誠出版　2004 年
安藤更正『鑑真大和上伝之研究』平凡社　1960 年
安藤更生『鑑真』人物叢書 146　吉川弘文館　1967 年
安藤更生「鑑真和上―志とげた日本への伝戒―」
『日本と世界の歴史―8 世紀―』第 5 巻　学習研究社　1970 年
E･O･ ライシャワー『円仁唐代中国の旅』（田村完誓訳）　原書房　1984 年
飯田嘉郎『日本航海技術史』原書房　1980 年
池田温「裴世清と高表仁―隋唐と倭の交渉の一面―」「日本歴史」第 280 号
日本歴史学会　1971 年
池田温編『古代を考える　唐と日本』吉川弘文館　1992 年
石井謙治『日本の船』東京創元社　1957 年

石井謙治『図説和船史話』至誠堂　1983 年
石井謙治「海上交通の技術」『平安文化の開花』海外視点・日本の歴史第 5 巻
ぎょうせい　1987 年
石井謙治ほか「討論・遣唐使の船と航海術」「太平洋学会誌」第 14 号　太平洋学会　1982 年
石井正敏「遣唐使」『遣唐使と正倉院』海外視点・日本の歴史第 4 巻　ぎょうせい　1986 年
石井正敏「最後の遣唐使」『平安文化の開花』海外視点・日本の歴史第 5 巻
ぎょうせい　1987 年
石井正敏「いわゆる遣唐使の廃止について―『日本紀略』停止記事の検討―」
「紀要（史学科第 35 号）」第 136 号　中央大学文学部　1990 年
石井正敏「寛平六年の遣唐使計画と新羅の海賊」「アジア遊学」第 26 号　勉誠出版　2001 年
石井正敏「260 年間に 20 回！波乱に満ちた「遣唐使」の実態」
「週刊再現日本史」第 2 巻　第 8 号　講談社　2002 年
石井正敏「遣唐使時代の東アジア文化交流」「アジア遊学」第 3 号　勉誠出版　1999 年
石上英一「古代東アジア地域と日本」『日本の社会史』第 1 巻　岩波書店　1987 年
石見清裕「唐朝発給の「国書」一覧」
「アジア遊学―特集・東アジアの遣唐使―」第 3 号　勉誠出版　1999 年
石見清裕「唐の国際秩序と交易」「アジア遊学」第 26 号　勉誠出版　2001 年
市村宏「第七次遣唐船の航路」「美夫君志」第 11 号　美夫君志会　1967 年
井上光貞「王仁の後裔氏族と其の仏教」「史学雑誌」第 54 編第 9 号　史学会　1943 年
井上満郎「遣唐使廃止後日本の国際的環境」「東アジアの古代文化」第 110 号
古代学研究所　大和書房　2002 年
今枝二郎『唐代文化の考察（1）―阿倍仲麻呂研究―』高文堂出版社　1979 年
今野達「吉備大臣入唐絵詞の周辺―隆国の記と女人の伝―」「専修国文」第 8 号
専修大学国語国文学会　1970 年
上田雄『遣唐使全航海』草思社　2006 年
上野誠「大和と世界帝国を結んだ遣唐使、随想風に」「明日香風」第 130 号
古都飛鳥保存財団　2014 年
上原和ほか『海上の道と古代人』毎日新聞社　1979 年
内田吟風「東アジアの古代海上交通」「仏教大学学報」第 26 号　佛教大学　1976 年
内田吟風「古代アジア海上交通考」『江上波夫教授古稀記念論集―民族文化篇―』
山川出版社　1977 年
内田吟風「東アジア古代海上交通史汎論」『内田吟風博士頌寿記念東洋史論集』

内田吟風博士頌寿記念会編　同朋社　1978 年
内山輝男「隼人と遣唐使―隼人は文化人であったか―」『隼人族の生活と文化』
隼人文化研究会編　雄山閣　1993 年
宇野隆夫「遣唐使船とそれ以後」「考古学ジャーナル」第 536 号
ニュー・サイエンス社　2005 年
梅田善美「遣唐使と神々」「アジア遊学―特集・日本の遣唐使―」第 4 号
勉誠出版　1999 年
江上波夫編『遣唐使時代の日本と中国―日本・中国文化交流シンポジウム―』
小学館　1982 年
円仁『入唐求法巡礼行記 1』（足立喜六訳注・塩入良道補注）東洋文庫 157　平凡社　1970 年
円仁『入唐求法巡礼行記 2』（足立喜六訳注・塩入良道補注）東洋文庫 442　平凡社　1985 年
王勇『唐から見た遣唐使―混血児たちの大唐帝国―』講談社選書メチエ 125
講談社　1998 年
王勇「東アジアから見た遣唐使」「アジア遊学―特集・東アジアの遣唐使―」第 3 号
勉誠出版　1999 年
王勇『鑑真和上新伝』農文協　2003 年
王勇「遣唐使廃止後の海外渡航の物証」「アジア遊学」第 22 号　勉誠出版　2000 年
太田晶二郎「吉備真備の漢籍将来」「かがみ」創刊号　大東急記念文庫　1959 年
大庭脩「唐元和元年高階真人遠成告身について」「東洋学論集―高橋先生還暦記念―」
関西大学東西学術研究所　1967 年
岡田正之「慈覚大師の入唐紀行に就いて（第 1 回）」「東洋學報」第 11 巻第 4 号
東洋協会調査部　1921 年
岡田正之「慈覚大師の入唐紀行に就いて（第 2 回）」「東洋學報」第 12 巻第 2 号
東洋協会学術調査部　1922 年
岡田正之「慈覚大師の入唐紀行に就いて（第 3 回）」「東洋學報」第 12 巻第 3 号
東洋協会学術調査部　1922 年
岡田正之「慈覚大師の入唐紀行に就いて（第 4 回）」「東洋學報」第 13 巻第 1 号
東洋協会学術調査部　1923 年
尾形勇『東アジアの世界帝国』ビジュアル世界の歴史第 8 巻　講談社　1985 年
尾崎雄二郎「遣唐使吹き出しそうな勅を受け」
「月刊しにか―中国の占い―」第 7 巻第 7 号　大修館書店　1996 年
小沢栄一「日唐通交」『国史―上代―』研究社学生文庫 404　研究社　1940 年

小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』第1巻　法蔵館　1989年
小葉田淳『中世南島通交貿易史の研究』刀江書院　1968年
加茂正典「『伊吉連博徳書』の再検討―その執筆動機に就いて―」「文化史学」第40号
文化史学会　1984年
鐘江宏之『全集日本の歴史―律令国家と万葉びと―』第3巻　小学館　2008年
河内春人『東アジア交流史のなかの遣唐使』汲古書院　2013年
川本芳昭「隋書倭国伝と日本書紀推古紀の記述をめぐって―遣隋使覚書―」
「史淵」第141号　九州大学大学院人文科学研究院　2004年
河内春人『東アジア交流史のなかの遣唐使』汲古書院　2013年
韓昇「隋唐正史に見える中日交流関係記事について」
「アジア遊学―特集・日本の遣唐使―」第4号　勉誠出版　1999年
神田秀夫「遣唐使と遣新羅使」『万葉集』日本古典鑑賞講座第3巻　角川書店　1958年
木宮泰彦『日支交通史』上巻　金刺芳流堂　1926年
木宮泰彦『日華文化交流史』冨山房　1955年
金文経「在唐新羅人社会と佛教」（高慶秀訳）「アジア遊学」第26号　勉誠出版　2001年
日下雅義『古代景観の復原』中央公論社　1991年
久保清・橋浦泰雄『五島民俗図誌』一誠社　1934年
蔵中進「鑑真渡海前後」「神戸外大論叢」第24巻第3号　神戸市外国語大学　1973年
蔵中進『唐大和上唐征伝の研究』桜楓社　1976年
蔵中進「日唐交流史の一齣」『奈良古代史論集』第1集　奈良古代史談話会　1985年
蔵中進「唐土に迎えられた『唐大和上東征伝』」
「アジア遊学―特集・日本の遣唐使―」第4号　勉誠出版　1999年
呉玲「九世紀唐日貿易における東アジア商人群」
「アジア遊学―特集・東アジアの遣唐使―」第3号　勉誠出版　1999年
栗原朋信「遣隋使の派遣はどのような意味をもったか隋の対応はどうであったか」
『海外交渉史の視点』第1巻　日本書籍　1975年
桑原隲蔵「アラブ文献上に見えたる日本朝鮮の国号」『桑原隲蔵全集』第5巻
岩波書店　1968年
桑原秀盈「遣唐使船と瀬戸内海」「歴史手帖」第112号　名著出版　1983年
古瀬奈津子『遣唐使の見た中国』歴史文化ライブラリー154　吉川弘文館　2003年
古瀬奈津子「隋唐と日本外交」
『日本の対外関係―律令国家と東アジア世界―』第2巻　吉川弘文館　2011年

小島毅『海からみた歴史と伝統―遣唐使・倭寇・儒教―』勉誠出版　2006 年
古代学研究所「東アジアの古代文化―遣唐使墓誌をめぐる日中交流史―」第 123 号
大和書房　2005 年
小松茂美編『吉備大臣入唐絵巻』日本の絵巻 3　中央公論社　1987 年
小松茂美編『東征伝絵巻』日本の絵巻 15　中央公論社　1988 年
斉藤圓眞「最後の遣唐使船の入唐僧に対する誤解」「アジア遊学」第 27 号
勉誠出版　2001 年
佐伯有清『最後の遣唐使』講談社現代新書 520　講談社　1978 年
佐伯有清『悲運の遣唐僧―円載の数奇な生涯―』吉川弘文館　1999 年
栄原永遠男「遣唐使と海の神々」『住吉と宗像の神』筑摩書房　1988 年
栄原永遠男「紀氏集団と瀬戸内海」『学術研究集会海の古墳を考えるⅢ―紀伊の古代氏族と紀淡海峡周辺地域の古墳―』発表要旨集　第 3 回海の古墳を考える会　2013 年
坂上康俊「鴻臚館を彩る人々」「九州歴史大学講座」第 3 期第 12 号
九州歴史大学講座　1993 年
坂本太郎「日本書紀と伊吉連博徳」『日本古代史の基礎的研究』上
東京大学出版会　1964 年
坂元義種「推古朝の外交―とくに隋との関係を中止に―」「歴史と人物」第 100 号
中央公論社　1979 年
坂元義種「遣隋使の基礎的考察―とくに遣使回数について―」
『日本古代の国家と宗教』下巻　井上薫教授退官記念会編　吉川弘文館　1980 年
酒寄雅志「九・十世紀の日本の国際関係」「アジア遊学」第 26 号　勉誠出版　2001 年
佐久間竜「道昭伝考」『日本書紀研究―三品先生追悼記念―』第 6 冊　塙書房　1972 年
茂在寅男『古代日本の航海術』小学館　1983 年
茂在寅男・西嶋定生・田中建夫・石井正敏『遣唐使研究と史料』東海大学出版会　1987 年
茂在寅男「遣唐使概観」『遣唐使研究と史料』東海大学出版会　1987 年
志田不動麿「日唐交通と遣唐使」『新修日本文化史大系―奈良文化―』第 3 巻
誠文堂新光社　1938 年
シルクロード学研究センター『シルクロードを翔る―遣隋使と遣唐使―』シルクロード・奈良国際シンポジウム記録集№6　なら・シルクロード博記念国際交流財団　2003 年
杉本直治郎『阿倍仲麻呂伝研究―朝衡傳考―』育芳社　1940 年
杉山宏「課船について」「史正」5·6 合併　史正会　1978 年
杉山宏「八・九世紀の海運に関する二、三の問題」「海事史研究」第 40 号

日本海事史学会　1983 年
杉山宏「官船・課船について」「海事史研究」第 41 号　日本海事史学会　1984 年
杉山宏「遣唐使船の航路について」『日本海事史の諸問題―対外関係編―』
文献出版　1995 年
鈴木靖民「日羅関係と遣唐使―森克己氏の高説をめぐって―」
『古代東アジアにおける日朝関係』朝鮮史研究会論文集第 7 集　朝鮮史研究会　1970 年
鈴木靖民「寛平の遣唐使をめぐる基礎的考察」「國學院大學紀要」第 13 巻
國學院大學　1975 年
鈴木靖民「菅原道真と寛平の遣唐使」『菅原道真と太宰府天満宮』上巻
吉川弘文館　1975 年
鈴木靖民『古代対外関係史の研究』吉川弘文館　1985 年
鈴木靖民「九世紀の東アジアと交流」「アジア遊学―特集・九世紀の東アジアと交流―」
第 26 号　勉誠出版　2001 年
専修大学・西北大学共同プロジェクト『遣唐使の見た中国と日本
―新発見「井真成墓誌」から何がわかるか―』朝日選書 780　朝日新聞社　2005 年
高橋善太郎「遣唐使の基礎的研究」「愛知女子短期大学紀要」第 1 輯
愛知女子短期大学　1950 年
瀧川政次郎「住吉大社と遣唐使」『万葉律令考』東京堂　1974 年
武田佐知子「二つのチカシマに関する覚え書き」
『世界史上における人と物の移動・定着をめぐる総合的研究』　1992 年
田島公「日本律令国家の「賓礼」」「史林」第 68 巻第 3 号　史学研究会　1985 年
田島公「遣唐使はなぜ派遣されたか」『争点日本の歴史』第 3 巻　新人物往来社　1991 年
田中健夫・石井正敏「古代日中関係編年史料稿―推古天皇八年（600）から
天平十一年（739）まで―」『遣唐使研究と史料』東海大学出版会　1987 年
田中史生「九世紀列島の交易と東アジア」「アジア遊学」第 26 号　勉誠出版　2001 年
田村洋幸「安芸の造船と遣唐使」「芸備地方史研究」第 25･26 合併号
芸備地方史研究会　1958 年
辻善之助「聖徳太子の外交」『増訂海外交通史話』内外書籍　1930 年
土田直鎮・石田正敏編『遣唐使と正倉院』海外視点・日本の歴史第 4 巻
ぎょうせい　1986 年
土田直鎮・石田正敏編『海外視点・日本の歴史―平安文化の開花―』第 5 巻
ぎょうせい　1987 年

角田文衛「葉栗臣翼の生涯（1）」「古代文化」第 9 巻第 2 号　古代学協会　1962 年
角田文衛「葉栗臣翼の生涯（2）」「古代文化」第 9 巻第 3 号　古代学協会　1962 年
角田文衛『佐伯今毛人』人物叢書 108　吉川弘文館　1974 年
角田文衛「大和宿祢長岡の事蹟」『律令国家の展開』塙書房　1965 年
角田文衛「勅旨省と勅旨所」『角田文衛著作集』第 3 巻　法蔵館　1985 年
東城敏毅「阿部仲麻呂の〈憶い〉―「春日なる三笠の山」と遣唐使―」
「明日香風」第 130 号　古都飛鳥保存財団　2014 年
東野治之「天平十八年の遣唐使派遣計画」『正倉院文書と木簡の研究』塙書店　1977 年
東野治之「奈良時代遣唐使の文化的役割」「佛教藝術」第 122 号　毎日新聞社　1979 年
東野治之『正倉院』岩波新書 42　岩波書店　1988 年
東野治之『遣唐使と正倉院』岩波書店　1992 年
東野治之「遣唐使船の帆」「本の窓」93/11 月号　小学館　1993 年
東野治之「遣唐使と海外情報」「図書」第 528 号　岩波書店　1993 年
東野治之「ありねよし対馬の渡り」『続日本紀の時代』続日本紀研究会編　塙書房　1994 年
東野治之「遣唐使船の構造と航海術―「布帆」の存在をめぐって―」
「九州史学」第 111 号　九州史学研究会　1994 年
東野治之編『遣唐使船―東アジアのなかで―』「歴史を読みなおす 4」
朝日百科日本の歴史別冊　朝日新聞社　1994 年
東野治之「唐と日本―二つの「中華」帝国」「遣唐使船―東アジアのなかで―」
朝日百科日本の歴史別冊・歴史を読みなおす通巻 4 号　朝日新聞社　1994 年
東野治之「遣唐使の旅」「遣唐使船―東アジアのなかで―」
朝日百科日本の歴史別冊・歴史を読みなおす通巻 4 号　朝日新聞社　1994 年
東野治之「遣唐使船は何を運んだか」「遣唐使船―東アジアのなかで―」
朝日百科日本の歴史別冊・歴史を読みなおす通巻 4 号　朝日新聞社　1994 年
東野治之「行き交う人びと―「世界」と日本」「遣唐使船―東アジアのなかで―」
朝日百科日本の歴史別冊・歴史を読みなおす通巻 4 号　朝日新聞社　1994 年
東野治之『遣唐使船―東アジアのなかで―』朝日選書 634　朝日新聞社　1999 年
東野治之『遣唐使』岩波新書 1104　岩波書店　2007 年
直木孝次郎「藤原清河の娘―済恩院の由来について―」『古代史の人びと』
吉川弘文館　1976 年
直木孝次郎「定恵の渡唐について」『古代史の窓』学生社　1982 年
直木孝次郎編『古代を考える難波』吉川弘文館　1992 年

長野正「藤原清河伝について―その生没年をめぐる疑問の解明―」
『古代・中世の社会と民俗文化』弘文堂　1976 年
夏応元「遣唐使初期の重要人物―道昭について―」「アジア遊学」№27
勉誠出版　2001 年
中西進「東アジア還流―遣唐使とは何か―」
「アジア遊学―特集・東アジアの遣唐使―」第 3 号　勉誠出版　1999 年
奈良県立橿原考古学研究所付属博物館『遣唐使が見た中国文化―白楽天の時代を中心に―』
「遣唐使が見た中国文化」展実行委員会　1995 年
西嶋定生「七 ~ 八世紀の東アジアと日本」『日本歴史の国際環境』東京大学出版会　1985 年
西嶋定生「講演・遣唐使問題再考」『日本歴史の国際環境』東京大学出版会　1985 年
西嶋定生「遣唐使と国書」『遣唐使研究と史料』東海大学出版会　1987 年
西嶋定生「七世紀の東アジアと日本」『東アジア世界における日本古代史講座』第 5 巻
学生社　1981 年
西村眞次「造船術と航海術」『史的素描』章華社　1935 年
仁藤敦史「内匠寮の成立とその性格」「続日本紀研究」第 239 号　続日本紀研究会　1985 年
日本アイ・ビー・エム遣唐使館『遣唐使百科』IBM　1981 年
布目潮風「遣隋使」「季刊明日香風」第 6 号　飛鳥保存財団　1983 年
橋本進「遣唐使船のマストの謎」「旅客船」第 240 号　日本旅客協会　2007 年
浜田寛「最後の遣唐使と円仁『入唐求法巡礼行記』」「アジア遊学」№27
勉誠出版　2001 年
林士民「明州における遣唐使上陸地について」「アジア遊学」№27　勉誠出版　2001 年
日比野丈夫『図説中国の歴史―華麗なる隋唐帝国―』第 4 巻　講談社　1977 年
藤田豊八『東西交渉史の研究―西域篇―』池内宏編　国書刊行会　1974 年
藤田豊八『東西交渉史の研究―南海篇―』池内宏編　国書刊行会　1974 年
藤田元春「白鳳時代に於ける海外航路の新発見」「夢殿」第 5 冊　鵤故郷舎　1932 年
藤田元春「遣唐使の航路と海外知識」『上代日支交通史の研究』刀江書院　1943 年
藤本勝次ほか『海のシルクロード』大阪書籍　1982 年
藤善真澄「伊吉博徳書の行程と日付をめぐって」
『東西学術研究所創立五十周年記念論文集』関西大学　2001 年
増村宏「隋書と書記推古紀―遣隋使をめぐって―」「文学科論集」
鹿児島大学法文学部紀要第 4 号　鹿児島大学法文学部　1968 年
増村宏「隋書と書記推古紀―遣隋使をめぐって―」「文学科論集」

鹿児島大学法文学部紀要第 5 号　鹿児島大学法文学部　1969 年
増村宏「遣唐使粟田真人の入唐年次について―遣唐使研究の一節―」
「鹿児島経大論集」第 13 巻第 1 号　鹿児島経済大学　1972 年
増村宏「遣唐使の停止について」「鹿大史学」第 21 号
鹿児島大学法文学部史学地理学教室　1973 年
増村宏「菅家文草の史料―遣唐使の停廃について、その 1―」
「鹿児島経大論集」第 16 巻第 3 号　鹿児島経済大学　1975 年
増村宏「遣唐使停廃の諸説―早期の諸説―（遣唐使の停廃について、その 2）」
「鹿大史学」第 23 号　鹿児島経済大学　1975 年
増村宏「遣唐使停廃の諸説―後期の諸説―（遣唐使の停廃について、その 3）」
「鹿児島経大論集」第 17 巻第 1 号　鹿児島経済大学　1976 年
増村宏「遣唐使停廃の諸説―鈴木氏の論説―（遣唐使の停廃について、その 4）」
「地域研究」第 6 巻第 1 号　鹿児島経済大学地域経済研究所　1976 年
増村宏「旧新両唐日本伝の理解―遣唐使は尊大であったか―」
「鹿児島経大論集」第 18 巻第 3 号　鹿児島経済大学　1977 年
増村宏「旧新両唐書日本伝の検討」『内田吟風博士頌寿記念東洋史論集』
内田吟風博士頌寿記念会編　同朋社　1978 年
増村宏「矜大、不以実対について―再続・旧新両唐日本伝の理解―」
「鹿児島経大論集」第 20 巻第 1 号　鹿児島経済大学　1979 年
増村宏「遣唐大使藤原清河の抑留」「鹿大史学」第 28 号
鹿児島大学法文学部史学地理学教室　1980 年
増村宏『遣唐使の研究』同朋社出版　1988 年
松木哲「中国の船舶とその変容」「月刊しにか―中国大航海時代―」第 8 巻第 7 号
大修館書店　1997 年
松本保宣「唐代後半期における延英殿の機能について」「立命館文学」第 516 号
立命館大学人文学会　1990 年
水野柳太郎「道照伝考」「奈良史学」第 1 号　奈良大学史学会　1982 年
三島一「交通の発達と国内市場の成立」『東洋文化史大系―隋唐の盛世―』
誠文堂新光社　1938 年
宮川寛雄「鑑真」『人物・日本の歴史―奈良から平安へ―』第 2 巻　読売新聞社　1966 年
宮田俊彦『吉備真備』人物叢書 80　吉川弘文館　1961 年
宮田俊彦「遣隋使―日出ずる処の天子の斬新な外交―」

『日本と世界の歴史―6・7世紀―』第4巻　学習研究社　1970年
毛昭晰「遣唐使時代における五島列島と明州の関係」
「アジア遊学―特集・日本の遣唐使―」第4号　勉誠出版　1999年
森克己「遣唐使と新羅・渤海との関係」「史淵」第48号　九州史学会　1951年
森克己「唐へ渡った人びと」『人物・日本の歴史―奈良から平安へ―』第2巻
読売新聞社　1966年
森克己「遣唐使と新羅との関係」「文学部紀要―史学科第13号―」第49号
中央大学文学部　1968年
森克己「遣唐使―派遣の背景と留学生の活躍―」
『日本と世界の歴史―8世紀―』第5巻　学習研究社　1970年
森克己「日唐交渉―遣唐使の廃止と唐船の往来―」
『日本と世界の歴史―9世紀―』第6巻　学習研究社　1970年
森克己「日唐・日宋交通の航路の発達」「日本歴史」第272号　日本歴史学会　1971年
森克己『遣唐使』日本歴史新書増補版　至文堂　1974年
森克己「遣唐使の航路はなぜかわったのか当時の航海術はどのていどであったか」
『海外交渉史の視点』第1巻　日本書籍　1975年
森克己「遣唐使のはいしは内外のどのような事情によるか」
『海外交渉史の視点』第1巻　日本書籍　1975年
森克己・田中健夫編『海外交渉史の視点―原始・古代・中世―』第1巻（視点シリーズ）
日本書籍　1975年
森克己「日唐・日宋交通の航路の発達」『続日宋貿易の研究』国書刊行会　1975年
森公章『古代日本の対外認識と通交』吉川弘文館　1998年
森下金二郎「阿倍仲麻呂（朝衡）事蹟の校勘―その補遺・補注の試み―」
「宮城学院女子大学研究論文集」62号　宮城学院女子大学文化学会　1985年
弥永貞三「唐との関係」『図説日本文化史大系―奈良時代―』第3巻　小学館　1956年
山尾幸久「遣唐使―律令国家におけるその意義と性質―」『東アジア世界における
日本古代史講座―日本律令国家と東アジア―』第6巻　学生社　1982年
山崎雅稔「九世紀日本の対外交易」「アジア遊学」第26号　勉誠出版　2001年
山里純一「遣唐使航路「南島路」の存否をめぐって」「立正史学」第71号
立正大学史学会　1992年
山里純一「遣唐使と南島路」『古代日本と南島の交流』吉川弘文館　1999年
山田英雄「伊吉連博徳書と地名」「新潟史学」第2号　新潟史学会　1970年

山田英雄「日・唐・羅間の国書について」『日本考古学・古代史論集』
伊藤信雄教授還暦記念会編　吉川弘文館　1974 年
吉井巌「遣新羅使人歌群―その成立の過程―」『日本古代論集』笠間叢書 144
笠間書院　1980 年
吉川幸次郎「仲麻呂在唐」「學鐙」第 73 巻第 7 号　丸善　1976 年
ライシャワー『円仁―唐代中国への旅―』（田村完誓訳）　原書房　1984 年
渡辺直彦「遣唐使・遣渤海使の主神」『日本古代官位制度の基礎的研究』
吉川弘文館　1972 年
渡部育子「七・八世紀における遣使について」『秋田地方史の展開』みしま書房　1991 年

〈史料編・遣唐使関連〉
和田清・石原道博編『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』岩波文庫
岩波書店　1951 年

遣隋使・遣唐使

回次	使節者	舟・船数	往路	航路	復路	航路	舟・船数	
	小野妹子 鞍作福利	?	607（推古 15）年 7 月	北路？	608（推古 16）年筑紫 4 月北路	?	?	斐世清ら 13 人来日
	小野妹子 吉士雄成 鞍作福利	?	608（推古 16）年 難波 9 月	北路？	609（推古 17）年 9 月 北路？？留学僧 8 人			
	犬上御田耜	?	614（推古 22）年 6 月	?	6158（推古 23）年 9 月	?	?	百済使ら来日
	矢田都御嬬		600（推古 8）年 608（推古 16）年 610（推古 18）年	? ? ?	? ? ?	? ? ?	? ? ?	隋書・倭国伝 隋書・煬帝紀 隋書・煬帝紀
1	犬上御田耜 薬師恵日	?	630（舒明 2）年京 8 月	北路？	632（舒明 4）年対馬 8 月、難波 11 月	北路	?	
2	吉士長丹 吉士駒	1	653（白雉 4）年京 5 月	北路？	654（白雉 5）年筑紫 7 月北路 1			
2	高田根麿 掃守小麿	1	653（白雉 4）年京 5 月	南路？			－	往路、薩摩沈 没（1 艘）
3	高向玄理 河辺麻呂 薬師恵日	2	654（白雉 5）年京 2 月	?	665（斉明元）年 8 月 北？？			
4	坂合部石布 津守吉祥	2	659（斉明 5）年 難波 7 月	北路	661（斉明 7）年筑紫 5 月	北路	1	往路、南海島 漂着（1 艘）
5	守大石 坂合部石積	?	665（天智 4）年 京 12 月	?	667（天智 6）年筑紫 11 月	北路	?	
6	伊吉博徳 笠諸石	?	667（天智 6）年 11 月	?	668（天智 7）年	?	?	
7	河内鯨	?	669（天智 9）年	?	?	?		

回次	使節者	舟・船数	往路	航路	復路	航路	舟・船数	
8	粟田真人 高橋笠間 坂合部大分	?	701（大宝元）年 筑紫 6 月	?	704（衣雲元）年京 7 月	南路？	?	
9	多治比県守 阿部安麿 大伴山守 藤原馬養	4	717（養老元）年 難波 3 月	南路？	718（養老 2）年筑紫 10 月	南路？	4	
10	多治比広成 中臣名代	4	733（天平 5）年 難波 4 月	南路？	734（天平 6）年種子 島 11 月／736（天平 8） 年	南路	2	復路、崑崙漂 着（1 艘）難 波（1 艘）
11	藤原清河 大伴古麿 吉備真備	4	752（天平勝宝 4）年 難波 3 月	南路	753（天平勝宝 5）年 屋久島 12 月 754（天平勝宝 6）年 屋久島 1 月 鑑真ら薩摩 4 月	南路 南路	1 2	復路、安南漂 着（1 艘）
12	高元度	1	759（天平宝字 3）年 京 2 月	北路	761（天平宝字 5）年 筑紫 8 月	南路	1	
13	仲石伴 石上宅嗣	4	761（天平宝字 5）年 中止	−				
14	中臣鷹主 高麗広山	2	762（天平宝字 6） 年中止	−				
15	小野石根 大神末足	4	777（宝亀 8）年 筑紫 6 月	?	778（宝亀 9）年薩摩・ 松浦・甑島漂着	南路	3	復路、難波（1 艘）
16	布勢清直	2	779（宝亀 10）年 難波 5 月	南路？	781（天応元）年難波 6 月	南路	2	
17	藤原葛野麿 石川道益	4	804（延暦 23）年 筑紫 7 月	南路	805（延暦 24）年筑紫 6 月	南路	2	往路、難波（1 艘）漂流（1 艘）
18	藤原常嗣 小野篁	4（3）	838（承和 5）年 筑紫 7 月	南路	839（承和 6）年筑紫？	南路？		往路、破損（1 艘）
19	菅原道真 紀長谷雄	−	894（寛平 6）年 8 月任命	−				

③　渤海関連

中国東北地方東部に 698 年に建国し、926 年に滅亡した渤海国は、727 年以後、日本との通交があった。文献の記録によれば、渤海には重要な交通路があり、『新唐書』渤海伝に「龍原東南頻海、日本道也、南海、新羅道也、鴨淥、朝貢道也、長嶺、営州道也、扶余、契丹道也」という記事がある。この日本道は陸路と海路によって結ばれ、ロシア沿海州ハサン区に所在するクラスキノ土城は日本への海路の港湾施設であり、日本海を横断する航路があった。（文献続載）

青山定雄『唐宋時代の交通と地誌地図の研究』吉川弘文館　1963 年
アジア遊学編集部「アジア遊学―特集・渤海と古代東アジア―」第 6 号

勉誠出版　1999 年
蘆田伊人「平城平安時代日本海海上交通路の概観」「歴史地理」第 57 巻第 4 号
日本歴史地理学会　1931 年
飯田嘉郎『日本航海術史』原書房　1980 年
石井謙治「船と航海の歴史」『図説人物海の日本史―海上の道と古代人―』第 1 巻
毎日新聞社　1979 年
石井正敏「日本通交初期における渤海の情勢について―渤海武・文両王交替期を
中心として―」「法政史学」第 25 号　法政大学史学会　1973 年
石井正敏「新羅・渤海との交渉はどのように進められたか」
『海外交渉史の視点』第 1 巻　日本書籍　1975 年
石井正敏「渤海の日唐間における中継的役割」『海外交渉史の視点』第 1 巻
日本書籍　1975 年
石井正敏「日渤交渉における渤海高句麗継承国意識について」
「中央大学大学院研究年報」第 4 号　中央大学　1975 年
石井正敏「大宰府および各地の客館は外交上どのような目的・役割をもっていたか」
『海外交渉史の視点』第 1 巻　日本書籍　1975 年
石井正敏「第一回渤海国書について」「日本歴史」第 327 号　日本歴史学会　1975 年
石井正敏「渤海の日唐間における中継的役割について」「東方學」第 51 輯
東方学会　1976 年
石井正敏「第二次渤海遣日使に関する諸問題」『朝鮮歴史論集』上巻
旗田先生古希記念会編　龍渓書舎　1979 年
石井正敏「円仁と張宝高―入唐日本人と新羅人―」『図説人物海の日本史』第 1 巻
毎日新聞社　1979 年
石井正敏「張九齢作『勅渤海王大武芸書』について」「朝鮮学報」第 112 号
朝鮮学会　1984 年
石井正敏「新羅と渤海」『遣唐使と正倉院』海外視点・日本の歴史第 4 巻
ぎょうせい　1986 年
石井正敏「九世紀の日本・唐・新羅三国間貿易について」「歴史と地理」第 394 号
山川出版社　1988 年
石井正敏「東アジアのなかの渤海、そして日本」「朝日百科日本の歴史別冊―遣唐使船―」
歴史を読みなおす通巻 4 号　朝日新聞社　1994 年
石井正敏「光仁・桓武朝の日本と渤海」『日本古代の伝承と東アジア』

佐伯有清先生古稀記念会編　吉川弘文館　1995 年
石井正敏「渤海と日本の交渉」「月刊しにか」第 9 巻第 9 号　大修館書店　1998 年
石井正敏「『続日本紀』養老四年条の「靺鞨国」―靺鞨国＝渤海説の検討―」
「アジア遊学」第 3 号　勉誠出版　1999 年
石井正敏『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館　2001 年
石井正敏「東アジアの変動と日本外交」『日本の対外関係―律令国家と東アジア世界―』
第 2 巻　吉川弘文館　2011 年
井上秀雄「新羅と渤海―日本海をめぐる対外関係―」『日本と世界の歴史―8 世紀―』
第 5 巻　学習研究社　1970 年
井上秀雄「新羅と渤海―新羅商人の来航と渤海の朝貢貿易―」
『日本と世界の歴史―9 世紀―』第 6 巻　学習研究社　1970 年
荊木美行「「靺鞨国」考」『日本書紀研究』第 29 冊　日本書紀研究会　塙書房　2013 年
上田雄「渤海使の海事史的研究」「海事史研究」第 43 号　日本海事史学会　1986 年
上田雄「バイパスとしての渤海路」「兵庫史学研究」第 30 号
兵庫県歴史学会事務局　1984 年
上田雄「渤海国経由の日唐間通交路について」
『国史学論集』今井林太郎先生喜寿記念　臨川書店　1987 年
上田雄・孫栄健『日本渤海交渉史』六興出版　1990 年
上田雄『渤海国の謎』現代新書 1104　講談社　1992 年
上田雄「北の国から来た毛皮商人たち」「九州歴史大学講座」第 2 期第 10 号
九州歴史大学講座　1992 年
上田雄・孫栄健『日本渤海交渉史』改訂増補版　彩流社　1994 年
上原和「小野妹子」『図説人物海の日本史―海上の道と古代人―』第 1 巻
毎日新聞社　1979 年
王培新「中国における渤海都城と交通路の研究」「アジア遊学」第 6 号
勉誠出版　1999 年
大隅晃弘「渤海の首領制―渤海国家と東アジア世界―」「新潟史学」第 17 号
新潟史学会　1984 年
奥田淳爾「渤海使・遣渤海使等の日本海横断について」「富山史壇」第 79 号
越中史壇会　1982 年
奥田尚「天平後期の日本と新羅・渤海」「続日本紀研究」第 185 号
続日本紀研究会　1976 年

門脇禎二「吉備真備と阿倍仲麻呂―留学生活の違いと海難で岐れた明暗―」
『図説人物海の日本史』第1巻　毎日新聞社　1979年
門脇禎二『日本海域の古代史』東京大学出版会　1986年
金子修一「中国から見た渤海国」「月刊しにか」第9巻第9号　大修館書店　1998年
金達寿「鑑真―なぜ来たか―」『図説人物海の日本史―海上の道と古代人―』第1巻
毎日新聞社　1979年
日下雅義「海流の動きと遣唐使船・渤海使船」「朝日百科日本の歴史別冊―遣唐使船―」
歴史を読みなおす通巻4号　朝日新聞社　1994年
岸俊男『藤原仲麻呂』歴史人物叢書153　吉川弘文館　1969年
栗原朋信『上代日本対外関係の研究』吉川弘文館　1978年
小嶋芳孝「日本海を越えてきた渤海使節」『日本の古代―海をこえての交流―』第3巻
中央公論社　1986年
小嶋芳孝「潮の道・風の道」「明日香風」第24号　飛鳥保存財団　1987年
小嶋芳孝「高句麗・渤海との交流」『海と列島文化―日本海と北国文化―』第1巻
小学館　1990年
小嶋芳孝「日本と渤海を結ぶ海の架け橋―古代日本海域の航路―」『越の海、波濤の道』
北陸電力（株）地域総合研究所　1994年
小嶋芳孝「日本海の島々と靺鞨・渤海の交流」『境界の日本史』山川出版社　1997年
小嶋芳孝「渤海の産業と物流」「アジア遊学―特集・渤海と古代東アジア―」第6号
勉誠出版　1999年
古畑徹「日渤交渉開始期の東アジア情勢―渤海対日通交開始要因の再検討―」
「朝鮮史研究会論文集」第23集　朝鮮史研究会1986年
古畑徹「張九齢作『勅渤海王大武芸書』と唐渤紛争の終結」
「東北大学東洋史論集」第3号　東北大学東洋史論集編集委員会　1988年
古畑徹「渤海・日本間航路の諸問題―渤海から日本への航路を中心に―」
「古代文化」第46巻第8号　古代学協会　1994年
駒井和愛『中国都城・渤海研究』雄山閣　1977年
酒寄雅志「八世紀における日本の外交と東アジアの情勢―渤海との関係を中心として―」
「国史学」第103号　国史学会　1977年
酒寄雅志「渤海国家の史的展開と国際関係」「朝鮮史研究会論文集」第16集
龍渓書舎　1979年
酒寄雅志「渤海通事の研究」「栃木史学」第2号

國學院大學栃木短期大学史学会　1988 年
酒寄雅志「東北アジアの動向と古代日本」『新版古代の日本』第 2 巻　角川書店　1992 年
酒寄雅志「日本と渤海・靺鞨との交流―日本海・オホーツク海域圏と船―」
『境界の日本史』山川出版社　1997 年
酒寄雅志「渤海王権と新羅・黒水靺鞨・日本との関係」「アジア遊学」第 6 号
勉誠出版　1999 年
酒寄雅志『渤海と古代の日本』校倉書房　2001 年
酒寄雅志「渤海の遣唐使」『遣唐使の見た中国と日本』朝日選書 780
朝日新聞社　2005 年
佐藤信編『日本と渤海の古代史』山川出版社　2003 年
佐原眞ほか編「特集・古代の日本海文化」「歴史公論」第 88 号　雄山閣　1983 年
茂在寅男『古代日本の航海術』創造選書　小学館　1979 年
しにか編集室「月刊しにか―特集・渤海国・建国 1300 年・甦る「海東の盛国」―」
第 9 巻第 9 号　大修館書店　1998 年
下田礼佐「古代日満の交通」「商業と経済」第 3 冊　長崎高等商業学校　1922 年
新人物往来社編「謎の日本海王国」「歴史読本」第 32 巻第 11 号　新人物往来社　1987 年
鈴木靖民「奈良時代における対外意識」『日本史籍論集』上巻
岩崎小弥太博士頌寿記念会編　吉川弘文館　1969 年
鈴木靖民『古代対外関係史の研究』吉川弘文館　1985 年
鈴木靖民「古代日本の新羅・渤海との交流にみる日本海文化」
『古代日本海文化の源流と発達』大和書房　1985 年
高瀬重雄「日本と渤海国との交易物資」「金沢経済大学論集」第 16 巻第 1 号
金沢経済大学経済学会　1982 年
高瀬重雄「古代日本海文化の形成と大陸交渉史―日本列島の裏表と能都地方―」
「歴史手帖」第 11 巻第 5 号　名著出版　1983 年
高瀬重雄『日本海文化の形成』名著出版　1984 年
瀧川政次郎「能登国福良の津の渤海客館址」「歴史地理」第 90 巻第 3 号
日本歴史地理学会　1962 年
田中隆昭監修「渤海使と日本古代文学」「アジア遊学」別冊№ 2　勉誠出版　2003 年
東野治之『遣唐使と正倉院』岩波書店　1992 年
豊田有恒「空海と最澄―密教の演出者たち―」『図説人物海の日本史』第 1 巻
毎日新聞社　1979 年

鳥山喜一「日本と渤海との交通」「東亜研究」第 2 巻第 2 号　東亜学術研究会　1912 年
鳥山喜一「日本と渤海との交通（承前）」「東亜研究」第 2 巻第 4 号
東亜学術研究会　1912 年
鳥山喜一「日本と渤海との交通（承前）」「東亜研究」第 2 巻第 6 号
東亜学術研究会　1912 年
鳥山喜一『渤海史考』奉公会叢書　東京奉公会　1915 年
鳥山喜一「板振鎌束獄に下る事―渤海王国との交通挿話―」
「ドルメン」第 4 月号　岡書院　1933 年
鳥山喜一『渤海史上の諸問題』風間書房　1968 年
中西進・安田喜憲『謎の王国・渤海』角川選書 229　角川書店　1992 年
中西正和「新羅使・渤海使の来朝と大宰府―大宰府の外交的機能について―」
「古代史の研究」第 8 号　関西大学古代史研究会　1990 年
新潟大学環日本海研究会編「渤海と環日本海交流」「環日本海論叢」第 8 号
新潟大学環日本海研究会　1995 年
新妻利久「渤海国使に対する海路法規の研究」「国史学」第 56 号　国史学会　1951 年
新妻利久『渤海国史及び日本との国交史の研究』学術書出版会　1969 年
新妻利久「渤海国使に対する海路法規の研究」「国史学」第 56 号　国史学会　1976 年
新野直吉『古代日本と北の海みち』高科書店　1994 年
沼田頼輔「日渤交通史より見たる福浦港」『史蹟名勝天然記念物』第 8 集第 7 号
史蹟名勝天然記念物保存協会　1933 年
沼田頼輔『日満の古代国交』明治書院　1933 年
浜田耕策「新羅の中・下代の内政と対日外交―外交形式と交易をめぐって―」
「学習院史学」第 21 号　学習院大学史学会　1983 年
浜田耕策「留学僧戒融の日本帰国をめぐる渤海と新羅」
『日本古代の伝承と東アジア』佐伯有清先生古稀記念会編　吉川弘文館　1995 年
日野開三郎「羅末三国の鼎立と対大陸海上交通貿易」「朝鮮学報」第 16･17 輯
朝鮮学会　1960 年
日野開三郎「羅末三国の鼎立と対大陸海上交通貿易」「朝鮮学報」第 19･20 輯
朝鮮学会　1961 年
藤井一二「奈良時代の遣渤海使と能登・加賀」「富山史壇」第 130 号　越中史壇会　1999 年
藤井一二「天平期における加賀郡「津」と遣渤海使
―「天平二年」「津司」墨書銘を中心に―」『続日本紀の諸相』　塙書房　2004 年

藤田富士夫『古代の日本海文化―海人の伝統と交流―』中公新書 981
中央公論社　1990 年
藤善真澄「日宋交通路の再検討―参天台五台山記劄記一―」『文化史論叢（上）』
横田健一先生古稀記念会　創元社　1987 年
古畑徹「張九齢作『勅渤海王大武芸書』と唐渤紛争の終結」
「東北大学東洋史論集」第 3 号　東北大学東洋史論集編集委員会　1988 年
古畑徹「渤海・日本間航路の諸問題―渤海から日本への航路を中心に―」
「古代文化」第 46 巻第 8 号　古代学協会　1994 年
北陸電力（株）地域総合研究所『越の海、波濤の道―古代国際交流の拠点・北陸―』
北陸電力（株）地域総合研究所　1994 年
毎日新聞社編『図説人物海の日本史―海上の道と古代人―』第 1 巻　毎日新聞社　1979 年
松井等「南満州における古代の交通路」
「朝鮮と満州の研究」第 1 輯　朝鮮及満州社　1914 年
松枝正根『古代日本の軍事航海史〈下巻〉』かや書房　1994 年
松木哲「渤海使の船と航海技術」『越の海、波濤の道―古代国際交流の拠点・北陸―』
北陸電力（株）地域総合研究所　1994 年
松原弘宣「渡嶋津軽津司について」『日本古代水上交通史の研究』吉川弘文館　1985 年
松好貞夫「渤海との交渉についての一考察」「流通経済論集」第 3 巻第 3 号
流通経済大学学術研究会　1968 年
三上次男「渤海国の興亡とその文化」『東洋文化史大系―隋唐の盛世―』
誠文堂新光社　1938 年
三上次男「渤海国の興亡」『図説世界文化史大系』第 19 巻　角川書店　1959 年
三上次男『高句麗と渤海』吉川弘文館　1990 年
峯籏良充「渤海国当時における吉林と日本との交通状況」「東亜経済研究」第 16 巻第 2 号
東亜経済研究会　1932 年
簑島栄紀「渤海滅亡後の北東アジアの交流・交易」「アジア遊学」第 6 号
勉誠出版　1999 年
森克己・田中健夫編『海外交渉史の視点―原始・古代・中世―』第 1 巻（視点シリーズ）
日本書籍　1975 年
森克己「遣唐使と新羅・渤海との関係」『続日宋貿易の研究』国書刊行会　1975 年
森浩一『古代史津々浦々―列島の地域文化と考古学―』小学館　1993 年
森田悌「粛慎と靺鞨」「日本海域研究所報告」第 21 号　金沢大学　1989 年

森田悌「渤海の首領について」「国史研究」第 94 号　弘前大学　1993 年

森田悌『日本古代交通社会史考』森田悌　1994 年

八木充「古代日本の北海路について」『東アジアと日本―歴史編―』吉川弘文館　1987 年

安田喜憲編「日本海をめぐる環境と考古学」「季刊考古学」第 15 号　雄山閣　1986 年

和田清「渤海国地理考」「東洋學報」第 36 巻第 4 号　東洋学術協会　1954 年

渡部育子「律令制下の海上交通と出羽―古代出羽における海上交通の意義をめぐって―」
「日本海地域史研究」第 7 輯　日本海地域史研究会 1985 年

渡部育子「律令国家の東北辺境政策―陸奥・出羽の位置づけに関する基礎的考察―」
「続日本紀研究」第 246 号　続日本紀研究会　1986 年

〈史料編・渤海関連〉

青木和夫ほか校注『続日本紀』全 6 巻（4･5 未刊）新日本古典文学大系
岩波書店　1989 年 ~

宇治谷孟『続日本紀―全現代語訳―』全 3 巻　講談社学術文庫 1030~　講談社　1992 年

直木孝次郎ほか訳注『続日本紀』全 4 巻　東洋文庫 457~　平凡社　1986 年 ~

和田清・石原道博編『旧唐書倭国日本伝・宋史日本伝・元史日本伝』岩波文庫
岩波書店　1956 年

渤　海　使

回次	使節者	来　　着	来着地	出　　航
1	高斉徳	727（神亀 4）年 9 月 21 日	出羽国	728（神亀 5）年 6 月 7 日
2	己珎蒙	739（天平 11）年 7 月 13 日	出羽国	740（天平 12）年 4 月 20 日
3	慕施蒙	752（天平勝宝 4）年 9 月 24 日	越後国佐渡嶋	753（天平勝宝 5）年 6 月 8 日
4	揚承慶	758（天平宝字 2）年 9 月 18 日	越後国	759（天平宝字 3）年 2 月 16 日
5	高南甲	759（天平宝字 3）年 10 月 18 日	対馬	760（天平宝字 4）年 2 月 20 日
6	王新福	762（天平宝字 6）年 10 月 1 日	越後国加賀郡佐利翼津	763（天平宝字 7）年 2 月 20 日
7	壱万福	771（宝亀 2）年 6 月 27 日	出羽国野代湊	772（宝亀 3）年 9 月 23 日
8	烏須弗	773（宝亀 4）年 6 月 12 日	能登国	773（宝亀 4）年 6 月 24 日
9	史都蒙	776（宝亀 7）年 12 月 22 日	越前国	777（宝亀 8）年 5 月 23 日
10	張仙寿	778（宝亀 9）年 9 月 21 日	越前国坂井郡三国湊	779（宝亀 10）年 12 月 22 日
11	李元泰	786（延暦 5）年 9 月 18 日	前ヵ出羽国	787（延暦 6）年 2 月 19 日
12	呂定琳	795（延暦 14）年 11 月 3 日	前ヵ蝦夷地志理波村	796（延暦 15）年
13	大昌泰	798（延暦 17）年	隠岐国智夫郡	799（延暦 18）年
14	高南容	809（大同 4）年 10 月 1 日	?	810（大同 5）年
15	高南容	810（弘仁元）年 9 月 29 日	?	811（弘仁 2）年
16	王孝廉	814（弘仁 5）年 9 月 30 日	出雲国	816（弘仁 7）年
17	慕感徳	818 ?（弘仁 9 ?）年	?	819 ?（弘仁 10 ?）年

回次	使節者	来　　着	来着地	出　　航
18	李承英	819（弘仁 10）年 11 月 20 日	?	820（弘仁 11）年
19	王文矩	821（弘仁 12）年 11 月 13 日	?	822（弘仁 13）年
20	高貞泰	823（弘仁 14）年 11 月 22 日	加賀国	824（天長元）年
21	高承祖	825（天長 2）年 12 月 3 日	隠岐国	826（天長 3）年
22	王文矩	827（天長 4）年 12 月 29 日	但馬国	828（天長 5）年
23	賀福延	841（承和 8）年 12 月 22 日	長門国	842（承和 9）年
24	王文矩	848（嘉祥元）年 12 月 30 日	能登国	849（嘉祥 2）年
25	烏孝慎	859（天安 3）年 1 月 22 日	能登国珠洲郡	859（貞観元）年
26	李居正	861（貞観 3）年 1 月 20 日	隠岐国	861（貞観 3）年
27	楊成規	871（貞観 13）年 12 月 11 日	加賀国	872（貞観 14）年
28	楊中遠	876（貞観 18）年 12 月 26 日	出雲国	877（元慶元）年
29	裴頲	882（元慶 6）年 11 月 14 日	加賀国	883（元慶 7）年
30	王亀謀	892（寛平 4）年 1 月 8 日	出雲国	892（寛平 4）年
31	裴頲	894（寛平 6）年 5 月?	伯耆国	895（寛平 7）年
32	裴璆	908（延喜 8）年 1 月 8 日前ヵ	伯耆国	908（延喜 8）年
33	裴璆	919（延喜 19）年 11 月 18 日前ヵ	若狭国丹生浦	920（延喜 20）年
34	?	922（延喜 22）年 9 月 2 日前ヵ	?	?

遣渤海使

回次	使節者	出　　発	出発地	帰　　国	帰国地
1	引田虫麻呂	728（神亀 5）年 6 月 7 日	?	730（天平 2）年 8 月 29 日	越前国加賀郡
2	大伴犬養	740（天平 12）年 4 月 20 日	?	740（天平 12）年 10 月 5 日?	?
3	小野田守	758?（天平宝字 2）年?	?	758（天平宝字 2）年 9 月 18 日	越前国
4	陽侯玲璆	760（天平宝字 4）年 2 月 20 日	?	760（天平宝字 4）年 11 月 11 日?	?
5	高麗大山	761（天平宝字 5）年 10 月 22 日	?	762（天平宝字 6）年 10 月 1 日	越前国加賀郡佐利翼津
6	板振鎌束	763（天平宝字 7）年 2 月 20 日	?	763（天平宝字 7）年 8 月 12 日	隠岐国
7	武生鳥守	772（宝亀 3）年 2 月 29 日	?	773（宝亀 4）年 10 月 13 日?	?
8	高麗殿継	777（宝亀 8）年 5 月 23 日	?	778（宝亀 9）年 8 月 23 日	越前国三国湊
9	大網広道	779（宝亀 10）年 12 月 22 日	?	780（宝亀 11）年?	出羽国?
10	御長広岳	796（延暦 15）年	?	796（延暦 15）年?	?
11	内蔵賀茂	麻呂 798（延暦 17）年	?	798（延暦 17）年	隠岐国智夫郡
12	滋野船白	799（延暦 18）年	?	799（延暦 18）年?	?
13	林東人	811（弘仁 2）年	?	811（弘仁 2）年?	?